ストライク・ザ・ブラッド～春風雪華～　《完結》

坂川　一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冬休みを追試に追われる古城と呆れながらも傍にいる雪菜。その二人の下に、突如として雪菜にそっくりの少女が現れる。

彼女の名は姫柊春菜。

姫柊雪菜の姉だという。

春菜の登場と共に、ある一つの事件が動き出す。

主人公は古城。オリジナルの時間軸です。

目次

その一 ―― 1
その二 ―― 19
その三 ―― 28
その四 ―― 40
その五 ―― 50
その六 ―― 63
その七 ―― 71
その八 ―― 84
その九 ―― 98
その十 ―― 114
エピローグ ―― 127

その一

年も変わろうかという十二月の終わり。
一人の少女が空港に降り立った。
「ここが絃神島か」
白いブラウスと水色のスカートを履いた、いかにもお嬢様然とした風貌である。
空港ですれ違う人々は、思わず彼女を二度見する。
人形のような整った顔立ち。テレビのアイドルのような媚を売った感じはしない。自然体の美しさを持っているということであろう。
「それにしても、熱いね。冬とは思えないよ」
東京都絃神市。
東京の南方三三〇キロ付近の海上に建造された人工島で、島の全域が魔族特区に指定されており、実際には人工島管理公社によって統治されている独立行政区である。
人口は約五六万人。四方に配置された四基の超大型浮体式構造物と、それらを連結するキーストーンゲートによって構成されている。
東京は真冬で白雪がちらつくこともあるが、ここは南国。真冬でも半そでで活動できるというから、本土育ちの彼女には驚きだった。
彼女はからからとスーツケースを引っ張って、駐車場に出た。
照りつける太陽光が眩しい。
「とりあえず、可愛い妹に会いに行きますか」
そう呟いて、彼女は歩き出した。

■

私立彩海学園高等部に在籍する暁古城は、冬休みの真っ只中でありながら登校を余儀なくされていた。
理由は簡単。
成績不振である。
そもそも古城には止むに止まれぬ理由がある。

世界最強の吸血鬼〝第四真祖〟という肩書きを持つ彼は、当然に日中の活動を苦手としていた。今まで、何度となく死にかけるような事件に遭遇し、そのたびに絃神島を守ってきた影のヒーローと言っても過言ではない彼だが、吸血鬼になったことを家族にすら打ち明けていない。怪我もすぐに治癒してしまうので、共に暮らしている妹の凪沙でも、古城が命懸けの戦いを繰り広げてきたことには気付いていない。

けれど、世の中は無情である。

吸血鬼であることを隠すため、普通に学校に通い、夜行性であるが故に体調が優れないまま授業を受け、居眠り放題ともともとの頭の出来が積み重なった結果、成績は惨憺たるものに。冬休みの初日に、「暁古城。バカだから補習だ」というどこぞで聞いたようなフレーズで、担任から電話&転移で拉致されて以降、長期休みにも関わらず学校に行かねばならなくなったのである。

予定は四日間の補習。

この日はその最終日であった。

「終わった……やっと、終わった」

げっそりとした表情で、古城は学校の玄関から出た。

時刻は午後二時を回ったところだ。

最後の提出課題が終わったことで、解放されたのである。

「先輩も、きちんと日頃から勉強していれば、こんなことにはならなかったんです」

隣を歩く後輩が嗜めるように言った。

「悪いな、姫柊。冬休みだってのに、付き合わせちまって」

「いいんです。わたしは先輩の監視役ですから」

姫柊雪菜は、獅子王機関所属の剣巫だ。〝第四真祖〟を監視するため、この島にやってきた。ギターケースを背負い、古城の隣を歩く彼女は、その容姿が優れているために学内でも非常に有名だ。いつも、古城と連れ立っているので、多くの羨望と殺意が古城に向けられる要因となっている少女でもある。

雪菜は古城を監視するために、暁家の隣に越してきて、登下校まで

一緒にするという筋金入りである。その真面目な性格は、「いつ如何なるときも古城を視界に入れておく」という極端な行動に繋がっている。
「にしても那月ちゃんも固いよな。情状酌量の余地はあっただろう」
渋い顔で、古城は担任教師を非難する。
なんといっても、古城の担任は、古城の体質を知っている。知っていて、学業をきっちりやらせようとしているのである。
「でも、先輩の成績がよくないのは事実ですし、仕方がありません。今度から、頑張ればいいんです」
「今度なぁ」
気のない返事をする古城。
正直に言って、今度の長期休暇も同じような展開になるような気がしてならない。
最悪の展開は、春休みまでの約三ヶ月の間に、また敵が現れて古城が駆り出されるというものだが、今までが今までだけに、ありえないと一蹴できないのがつらかった。
「大丈夫です、先輩。そのときは、わたしがまた勉強を見てあげます」
「そうか、それは助かる」
雪菜は古城の一つ下であるが、高等学校卒業程度の学力は持っている。そのため、自分の勉強に時間を費やさずとも高い学力は維持できるので、高校一年生の古城の勉強を見る程度は余裕なのである。この四日間も多分に雪菜の支援を受けた。
「そうだ、先輩。今日の晩御飯はどうしますか？　確か、卵とお肉が昨日でなくなっていたような」
「そうだったな。後で買いに行くか。昨日酢豚やったし、今日は焼き魚でもするか」
「いいですね。魚料理は身体にもいいですし、わたし好きです」
「じゃ、決まりだな」
古城は、雪菜の賛意を取り付けたことで、夜の献立を決めた。
自宅に帰る途中で、いつものスーパーによることにした。
「あれ、そういえば財布」

古城は尻ポケットに入れていたと思っていた財布がいつの間にかない。
ちょっと焦る。あそこには凪沙から預かった生活費やクレジットカードなどが入っている。
「先輩。お財布なら、昼食を買ったときにカバンの中に入れたじゃないですか」
「え」
言われて、思い出した。
今朝、昼食を買いにコンビニに寄った際に、尻ポケットではなくカバンの中に財布を放り込んだのだ。
カバンの中を探してみたら、雪菜の言うとおり教科書の間に挟まる形で財布が埋もれていた。
「おお、あった。あぶねえ」
「もう、しっかりしてください」
だらしない亭主を叱る妻のように、雪菜は呆れた声で言った。
財布の所在が掴めたところで、二人は連れ立ってスーパーに入っていった。
「今日の分だけじゃなくて、一週間分は纏め買いしたほうがいいと思うんです。せめて、凪沙ちゃんが帰ってくるまでの分は今買いませんか？」
古城の妹で、普段家庭を守っている凪沙は、父に連れられて本土に帰っている。年末年始を向こうの実家で過ごすのである。母親は、職場に篭りきり。古城は一人暮らしを余儀なくされていた。
雪菜の提案に、古城は頷いた。
「そうだな。年末年始は店も閉まるし、買っておいたほうがいいな」
「お金は大丈夫ですか？」
「ああ、問題ない」
凪沙の周到な準備のお陰で、古城は当面の生活費には困らない。娯楽に諭吉を注ぎ込まなければ食費だけで済むので大した出費にもならない。
「お菓子とかはダメですよ。まだ、余っているのがあるんですから」

「分かってるよ。お前は俺の彼女かなんかか」
「か、彼女って、先輩……」
雪菜は顔を赤くした。
古城は失言に気付き、ここは母親かと言うところだったと思いながら、
「いや、姫柊。今のは冗談だ。真に受けないでくれ」
雪菜を安心させるように言う。
しかし、雪菜はムッとして、瞳を暗くする。
「そうですか。……冗談ですか……」
「ど、どうした、姫柊」
「何でもありません」
そう言って、カートを押して行ってしまった。

■

古城は両手に膨れた買い物袋を持って炎天下の道を歩く。
「いいんですか、先輩。わたしも片方持ちますよ」
「いいって。家の食料だしな。こんなことまで姫柊に手伝ってもらうわけにはいかないだろ」
「わたしは、別に構いませんけど」
「俺が構うんだよ。女の子に力仕事を手伝わせられるか」
古城にも男としての矜持がある。
女子に重い買い物袋を持たせたなんてことになったら、ご近所さんからどのような目で見られるか。
「そ、そうですか」
雪菜はなぜか照れたように俯いた。
だが、その居心地の悪いようないいような雰囲気は、そう長くも続かなかった。
違和感に気付いたのは、古城が先だった。
「姫柊。何がおかしくないか？」
隣の雪菜に、尋ねた。

「おかしい、ですか」
雪菜は何を言われたのだろうと、一瞬考え、そして、気付いた。
大通りなのに、人気がない。
大晦日を数日後に控えた晴天の日の午後。多くの店にとっては書入れ時のはず。
「人っ子一人いねえ。車通りもないってのはどういうことだ？」
「まずいですね。これは、結界です。おそらく人払い。人の認識に干渉して、『ここには近づきたくない』と思わせるものです」
雪菜はギターケースから愛槍雪霞狼を取り出して、油断なく周囲を見回した。
「その槍で打ち消せなかったのか？」
古城は尋ねた。
雪霞狼は、あらゆる魔術的干渉を無効化する結界を展開する。この槍がある限り、雪菜は魔力攻撃を受け付けない。
「打ち消しましたよ。だから、わたしたちはここにいるんです」
「どういうことだ？」
「雪霞狼が暗示を打ち消したんです。そのせいで、わたしたちはここに来ることに躊躇しなかった」
「そういうことか」
古城は納得する。
雪霞狼が人払いを打ち消した結果、雪菜は人払いの影響を受けずに結界の内側まで入ってしまったのである。
古城に関しては、〝第四真祖〟の膨大な魔力を内包する彼に暗示の類は効果がない。人気が完全になくなるまで、気が付かなかった。
「すみません。わたしがもっと周囲に気を払っていれば」
悔しそうに、雪菜は唇を噛んだ。
人払いの結界は雪菜たちに不審がられないように徐々に強まるタイプだったようで、外縁部はちらほらと人がいる。少しずつ人が減っていくので、変化に気づくのが遅れてしまった。
いや、それだけではないだろう。敵の狙いが古城と雪菜であれば、このやり方から見るに、雪霞狼の特性を熟知している。こちらを知り

尽くしている相手に先手を取られているのだ。雪菜が気付かなくても仕方がない。
そして、古城の目の前に、突然、白銀の狼が現れた。
鏡のような表皮は、太陽光を反射して輝いている。
数は三匹。
一斉に、襲い掛かってくる。
「なんだ、コイツっ」
「下がって先輩！　式神です！」
雪菜が前に出て、雪霞狼を一閃。魔力を絶つ破魔の刃が、一刀の下に狼を斬り捨てる。
「はあああっ！」
雪菜は二頭目の首を刈り、最後の一頭の腹を貫いた。
路上に投げ出された式神は、脱力した後消え去って、鉄の板だけが残った。
「鉄符。でも、これって……」
雪菜はその内の一枚を拾ってしげしげと眺めた。
その術式に、見覚えがあったからである。
「姫柊？」
「ああ、いえ、なんでもないです。これ、ちょっと調べてみますね。もしかしたら、術者の正体が分かるかもしれません」
雪菜は鉄符を回収して、ポケットに仕舞った。
人払いの結界の効果が薄れてきたのか、人が増えてくる。
「なんだったんだ？」
「さあ、でもわたしたちを狙っていたのは事実です。先輩も気を抜かないでください」
「ああ、そうだな」
雪菜の忠告に、古城は頷いた。
「あら、その必要はないわよ」
背後から声をかけられて、古城と雪菜は同時に振り返った。
そして、目を見開く。
古城は、その少女があまりにも雪菜に似ていたからで、雪菜はそれ

が見知った人物だったからだ。
「わたしの狙いは初めから雪菜ちゃんだったんだから」
姫柊のことを名前で呼ぶ、雪菜似の少女。
「姫柊、その、知り合いか？」
古城は、雪菜に尋ねた。
雪菜はぎこちない表情を浮かべて、
「はい。わたしの姉です」
と言った。

■

「粗茶ですが」
「ありがとう、暁君」
自宅に戻った古城は、とりあえず雪菜の姉を名乗る少女を家に上げることになった。
「いいんですか。姫柊、えと妹さんの部屋には行かなくて」
「いえいえ、まずは雪菜ちゃんがお世話になっている暁君に挨拶をしたほうがいいかと思いまして。ああ、これ、つまらないものですが」
そう言って、雪菜姉は綺麗に包装された箱を古城に渡した。
紙包みには、『白銀の恋人』とある。
「北海道ですか」
「ええ、先日までそこで任務を遂行しておりまして。改めまして、わたしはそこにいる雪菜の姉で、春菜と申します。以後、お見知りおきください」
楚々とした仕草で、春菜は頭を下げた。
「ああ、いえ、こちらこそ。暁古城です。妹さんには、日頃からお世話になっております」
「そうなのですか？　むしろ雪菜のほうがご迷惑になっていないか心配していたのですが」
迷惑はしていないが、困惑は十分にした。
監視と称して古城に付きまとってくるのである。別に悪いことで

もないし、古城は雪菜を信頼しているので何も問題はないのだが。
「すでにご承知かもしれませんが、雪菜ちゃんは思い込んだら一直線なところがありまして、昔から行動が極端になる傾向が……」
「まあ、確かにそういうところがあるかもしれないですね」
古城は一瞬にして、いくつかの雪菜の言動を思い起こすことができた。
「先輩」
つい同意してしまった古城に隣に座っている雪菜が嗜めるように呼びかけた。
「それで、姉さんはどうしてここに来たの？」
「それは雪菜ちゃんに会いに来たに決まっているじゃないですか。年末ですよ」
「二年間近くそちらから連絡も寄越さなかった人が何を言ってるんだか」
呆れたように雪菜は言った。けれど、口振りとは裏腹に、その表情は嬉しそうである。
「ところで、暁君は妹さんと一緒に暮らしているのだと伺ったのですが、確か名前は……」
「凪沙ちゃんだよ、姉さん」
「そうそう、そうでした」
雪菜が凪沙の名を教える。なぜ、妹の名前まで知られているのだろうか。
「それは、あなたが〝第四真祖〟だからですよ。わたしたちは国家機関ですし、パーソナルデータくらいは把握していますよ」
「俺のプライバシーとかへの配慮はないんですか？」
「それは、ほら、公共の福祉というものです」
曖昧な笑みを浮かべる雪菜姉を古城は半目で睨む。
人間でなくなったのだから、人としての人権がどうというわけにもいかないかもしれないが、魔族としての権利はきっちりと守られて然るべきである。もっとも、もともと人間であり、人としての生活を望みながら、一国の軍隊を丸ごと相手にできるとされる真祖の一員であ

る古城の扱いは、国家機関としても困るところが大きい。
監視者を送り込んでいるのも、今後の古城の扱いをどうするのかという点で情報が必要だからでもある。
「先輩、何姉さんを見つめてるんですか」
「見つめてねえよ！　誤解を招くような言い方はしないでくれ！」
二人の様子を、春菜は楽しそうに眺めている。
「姉さん。あの、どうかした？」
「ん？　いやー、仲がいいなぁとね」
「そ、そうかな。そんなことは、ないと思うけど」
「先生からは、雪菜が〝第四真祖〟に篭絡されているかもしれない、なんて言われてきたけど、うん。そんな感じだね」
「篭絡なんてされてないから！」
雪菜は勢いよく立ち上がって、テーブルを叩いた。
「先生って、もしかしてあのニャンコ先生のことか？」
「にゃんこ……？　ぷふ、くく」
春菜は古城の発言を聞いて、堪えきれぬとばかりに笑った。
雪菜を大人にしたような顔で、感情表現豊かに笑う様は、新鮮なものである。
「先生を相手ににゃんこって、あははっ。すごいですね、暁君！」
「ね、姉さん！　失礼！」
慌てた雪菜が諌めるが、春菜はツボに入ったのか落ち着くまで一頻り笑い続けた。

夕食は三人で摂ることになった。
雪菜は春菜と過ごせばいいのに、古城から目を離すわけにはいかないと言って聞かず、なら春菜も一緒にここにいればいいという話になったのである。
その話に古城が入り込むことはなかった。古城としてはどちらでもいいことなので、気にならなかったからだ。
「すみませんね、暁君。我侭を言ってしまいまして」
「いいんですよ、春菜さんはお客さんなんですから」

春菜はイスに座りながらテレビを眺めている。
キッチンに立つのは古城と雪菜の二人だ。春菜も手伝おうとはしたが、キッチンの許容量を越えてしまう。邪魔になるので、引き下がった。
「先輩、人参はこんな感じでいいですか？」
「ああ、じゃあ、次はレタスを洗ってくれ。火のほうはこっちでやっとくから」
「はい」
エプロンを着けた二人は、手際よく料理を作っていく。
その様子を春菜は珍しそうに眺める。
「ねえ、雪菜ちゃん。一つ、聞いていいですか？」
「何、姉さん？」
雪菜はレタスを洗いながら
「なんで、監視者の雪菜ちゃんが監視対象の暁君と自然に料理しているんですか？」
「！」
ぐしゃっと、雪菜はレタスを握り潰してしまった。
「あ……えと」
古城は動揺した雪菜からレタスを入れたボールを取り上げ、水切りをする。早く言い訳でも説得でもしろと言外に伝えてくるのだ。
「先輩を監視するには、一番身近にいたほうが都合がいいと思うの。あ、でもいつもこうじゃなくて、今週だけ。今は凪沙ちゃんも本土に帰っちゃってるし……だから、こんな感じに……」
「うん？　あれ、てことは今日だけじゃなくて、妹さんが本土に帰られてから毎日こんなことしていたんですか？」
「え、いうあ。あー」
「雪菜ちゃん。そんな小姑が居ない間を狙って押しかけ女房みたいなことして……上手い手だとは思いますけど」
「だ、だから違うって！　さっきからそういう方向に話を持っていこうとするの止めてよ！」
雪菜は耳まで赤くして、言う。

「だってそういう風に見えるんだもの。仕方ないでしょう」
「仕方ないって……」
雪菜は絶句する。
「姫柊、皿、持っていってくれ」
古城は敢えて冷静に、レタスとトマトを盛り付けた皿を雪菜に渡した。
「あ、はい。分かりました」
雪菜は頷いて、人数分の皿をテーブルに運んだ。
この日の夕食は、オムライスにサラダとワカメスープという単純なものになった。

□

夕食後、雪菜と春菜は古城の家を後にした。
雪菜の部屋に入ってから、春菜は一言、
「殺風景ねぇ」
と言った。
「姉さんは、わたしの部屋にどんなことを期待してたの」
「いや。普通に女子の部屋といったら、ピンク色だったりなんだりカラフルなものでしょう？　わたしはそうだったわよ」
「確かにそうだけど」
思い出される姉の部屋。
整理整頓が整いながらも、生活感があった。生きた部屋だったと思う。一方の雪菜の部屋は、最低限のものを配置しただけの殺風景さ。
「これじゃあ、エッチ系な本も出てきませんかねえ」
「ね、姉さん！　わたしがそんなの持ってると思ってたの!?」
「あなたももう子どもじゃないんだから、興味を持ってもいい頃だと思うの。恥ずかしいことじゃないですよ。わたしなんてセブンで立ち……」
「いいから！　姉さんの体験談とか別にいいから！　後、この島にいる間は本当に止めて！」

遠目からは双子なのかと思われるほど顔立ちが似ているのだ。下手をすれば、雪菜が十八禁コーナーにいると思われる。
「まあ、それは冗談として」
「冗談……」
「そりゃ、さすがのわたしもコンビニはキツイし」
「あ、そこだけ」
前半部分は本気だったらしい。
「じゃあ、雪菜ちゃん。いろいろとお話したいこともあるんだけど、とりあえずお仕事のほうの話をしましょう」
「え、はい」
雪菜と春菜は、それから小一時間ほど、ここ一年の報告をしあった。どのようなことがあって、何が大変だったか。特に、雪菜は〝第四真祖〟絡みの事件に度々関わってきたこともあり、話はバラエティーに富んでいた。
「そういえば、報告書のための日誌もつけているんでしょう？」
「うん。見る？」
そう言って、雪菜はクローゼットを開けた。ダンボールがクローゼットの下には収められていて、その蓋を開け、中から大学ノートの塊を取り出した。
いったい何冊あるというのか。
十や二十では到底収まらない。
「えーと、そんなに？」
「毎日つけているとどうしても嵩張ってしまって。一番新しいのは、机の上にあるのなんだけど、それももう一杯になってるから変えないといけないかな」
「へえ。真面目にやってるんですね。じゃあ、ちょっと拝見」
春菜は大学ノートの山から一冊抜き取って、パラパラと頁を捲ってみた。
『本日の先輩』
午前七時二十分、起床。昨日よりも五分遅い。朝食はトーストとサラダ。栄養価に偏りがあると思う。

午前七時四十分、登校。教室に入ってすぐに浅葱さんと会話。約五分。

午前八時四十分、一時間目開始。十三分後に居眠り。

・

・

・

午後四時二十分、一緒に下校。帰り道、夕ご飯の食材を購入。先輩がアイスを買おうしたけれど、阻止。冷凍庫にまだいくつか在庫があった。タイムセールスだったので、お金がいくらか浮いた。

午後五時三十分、宿題に手を付けるも、五分後に漫画を読み始める。以降手を付けず。後できちんと言わなければならない。

・

・

・

午後七時三十分、凪沙ちゃんに招待されて一緒に食事。

午後八時、入浴。式神は脱衣所までを確認。以降、音声と魔力感知で監視続行。

・

・

・

午後十一時、先輩の夜間外出を感知。追跡。コンビニで、夜食を購入。チョコレート類多め。店員のお姉さんと会話。十秒。

午前零時十二分、帰宅。

午前二時、就寝

「ふむ」

春菜は大学ノートを閉じた。

「いや、これはないわぁー」

遠い目。

監視者なので間違いとは言い難いが、分単位で記述があるところもあり、過剰監視と言えなくもない。

監視任務に携わったこともある春菜から見ても、ちょっと行き過ぎ

ていると思えた。
「というか、どうやって記述したの、これ」
「え、それは式神を専用に調整しただけだよ」
「暁君の動向をひたすら記録するだけの式神を作ったということ？」
「うん」
雪菜は頷いた。
なるほど、まあ、細かく記録するのは大切だ。
「さすが雪菜ちゃん。監視者の鑑だわ。これからも頑張ってね」
春菜はとりあえず誉めておくことにした。
「はい、これからも頑張ります！」
力強く、雪菜は宣言する。
「ところで、雪菜ちゃん。気になることがあるのですが」
「何、姉さん」
雪菜は春菜に近づく。春菜は、大学ノートを広げてみせる。付箋がついているので、頁はすぐに分かった。
「それ、結構最初のほうのヤツ」
「はい。それで、この『先輩の童貞を貰う』とはいったい……」
頁の一つを指差して、震える声で春菜は問う。
雪菜は首を傾げて、
「そのままの意味だけど？」
と、さも当然のように答えた。

□

ピンポンピンポンピンポン!!!
夕食後、夜行性の吸血鬼ということもあり眠気は一切なく、体調は万全。菓子を摘み、冷たい麦茶を飲み、漫画とテレビに囲まれ口うるさい者もいない。そんな暁古城の久しぶりの平穏な夜は猛烈なインターホンによって崩壊した。
「なんだ、いったい」
のぞき穴から見ると、雪菜、ではなく春菜のほうがインターホンを

連打しているようだ。すごい剣幕である。
「はい、今開けます」
古城は鍵を開けた、その瞬間勢いよく扉が開かれた。
「暁君。妹のことでお話があります！　ちょっとお時間よろしいですか!?」
「え、はあ、はい」
そのあまりの勢いに、古城は細かいことを言う前に頷いてしまった。
結局、再び暁家に上がった春菜は、いかにも怒っているという様子である。
古城の隣には、雪菜が腰掛けているが、こちらは姉がなぜ怒っているのか理解できないという顔をしている。
「あの、姫柊のことで話というのは？」
「そう、それです。わたしも雪菜ちゃんの姉として妹の幸せは嬉しいですし、〝第四真祖〟とはいえ暁君が真面目な人だということは、そこそこ分かっています。しかしですね、物事には順序というものがあると思うんです。たとえ、お付き合いしていたとしても、まだお互いに未成年なのですから、羽目を外さず、健全に……」
「待ってください！　付き合ってる？　俺と姫柊が!?」
「え？　違うんですか？」
「ち、違いますよ。俺は別に姫柊と付き合っているわけじゃないですし、なあ……」
古城は慌てて、雪菜の賛同を得ようと話を降った。
すると、雪菜は言葉に詰まったようにしてから、
「……そうですね、付き合ってませんね」
平坦な口調で答える。
「つ、付き合ってない。付き合ってないのにしたんですか？　雪菜とは遊びだったと？　そういうことですか!?」
「え、あ、なんのことですか？　何か、壮大な勘違いがあるんじゃないでしょうか？」
どうして、春菜がこのようなことを言ってくるのか皆目検討がつか

ない。彼女とは、さっきまで良好な関係を築いていたはずだ。何かあったとしたら、というか十中八九雪菜の自宅に戻ってから何かがあったのだ。
「姫柊、これどういうことだよ？」
「わたしも、よく分かりません。この一年のことを姉さんに話して、それで先輩の童貞を頂いたという話になったところでこんな感じに」
「それじゃねえか!?」
　雪菜のことだ。童貞を頂くということをそのまま言ったのだ。その背景や文脈を知らない人間がどのような勘違いをするのかも知らず、古城がかつて誤魔化した「未経験」という意味合いを本来の意味と誤解して使っているに違いない。
　正確には、「吸血童貞」。つまり、雪菜と出会った当時は、いまだに血を吸ったことのない半人前の吸血鬼だったということであり、雪菜が言う「童貞を頂いた」というのは、始めて血を吸った相手は自分だということである。
「それですよ！　その童貞の部分です！　雪菜ちゃんだって初めてだったんですよ！　ねえ？」
「え、ええ。まあ、わたしも初めてでしたし。あ、でも大丈夫でしたよ。少し血は出ましたけど、陰性でした」
「がっ」
　春菜は何かを喉に詰まらせたように喘いだ。
「ひめらっ。おま、この状況で!?」
　古城も、冷や汗をびっしりとかきながら、激しく焦る。
　ミサイルを叩き込むような姫柊の発言は、場を混沌とさせる一方だ。
「あ、あああ暁君。そ、そのねえ」
　春菜もさすがに顔を真っ赤にして古城にどのような言葉をかけるべきか迷っていた。
　古城も、雪菜の姉に雪菜の血を吸わせてもらっていますと言うべきか否かを判じかねている。
「あの、二人ともどうしたんですか？」

雪菜だけが、この状況をまったく理解していなかった。

騒動が一段落するのに、それから五分ほどの時間を要した。

最終的には春菜が早とちりを謝罪することになってしまったが、古城もまた頭を下げた。

「その、すみませんでした。わたし、雪菜ちゃんからもっと詳しく聞いていればこんなことには」

「こちらこそ、すみませんでした。誤魔化すためとはいえ、中途半端なことを」

「いえ、いいんです。知らない雪菜ちゃんが悪いんですから。むしろ教えていたら立派なセクハラです」

「ははは、そうですね」

疲れたような乾いた笑いを浮かべる古城。

「それでは、お騒がせしました。おやすみなさい」

春菜は頭を下げてから暁家を後にした。

「あの、姉さん。さっきのはいったいどういうことですか？」

「雪菜ちゃん。わたしね。雪菜ちゃんとしっかりお話しておくべきだと思ったんです。特に保健体育的な面で。その歳で知らなすぎるのも問題ですし。身を守るものだと思って」

「は、はあ……」

雪菜は自宅に帰ってから、新しい知識を得た。

翌朝、古城と会った雪菜の第一声は「いやらしい吸血鬼さん。おはようございます」だったという。

その二

「調停官？」

聞き覚えのない役職名に古城は首を捻った。

雪菜の姉の春菜は古城の正面に座って、頷いた。テーブルには、温かいコーンスープが湯気を立ち上らせていて、ハムを乗せたトーストと小皿に盛られたサラダが彩りを加えている。

春菜が用意した朝食であった。

暁家の食卓を、三人で囲む。

「獅子王機関が、魔導犯罪に対処する組織であるということは、ご存知ですか？」

「え、はい。それらしいことは」

古城は雪菜からかつて教えられたことを思い出す。

これまでに何かと事件に巻き込まれてきた古城は、雪菜の所属組織である獅子王機関と関わることも必然的に多くなっていた。

時には、獅子王機関と仲の悪い太史局なる組織との抗争に心ならずも巻き込まれたりもした。

獅子王機関が司る魔導犯罪は、ほぼ魔族が関わっている。普通の人間では、よほどの才覚がなければ魔力を操ることができないからであり、雪菜たち剣巫も、対魔族戦闘を想定した訓練を積んできたと聞いている。

「調停官もまた、獅子王機関の役職の一つです。ただし、剣巫が犯罪者との直接的な戦闘を行う実働部隊なのに対して、調停官は交渉によって犯罪を未然に防いだり、人質の解放に努めたりするのが仕事です」

「なるほど。交渉人ってヤツですか」

「以前映画にもなりましたね。イメージとしては、それに近いですね」

古城は納得した。

これまでの事件が、交渉の余地のない激烈な戦いだったこともあり、まったく意識していなかったのだが、よくよく考えれば、犯罪に対処するのに突撃部隊だけでは心もとない。人質などがいる場合も想定される事件に対処するには、戦闘能力だけでは心許ない。

犯人の心理を突き、争うことなく無難に解決に導けるのなら、それに越したことはない。雪菜のような殴り合いは、最後の手段であるべきであろう。
「姉さんも以前は剣巫をしていたんですけどね」
古城の隣に座る雪菜が、プチトマトを飲み込んでから口を開く。
「そうなんですか？」
「そうなんですよ」
くすり、と春菜は笑う。
「それなりの成績は出していたんですけどね。多様化する犯罪に対処するのに、部署の整理が行われたんです。それで、わたしは剣巫から調停官に仕事が変わったんです」
「そんなこと、あるんですか」
「人手不足なので、希ではありますけどね。ああ、それと」
春菜は、そこで言葉を切って古城を見つめた。
吸い込まれそうな黒い瞳がまじまじと古城を捉える。古城は心拍数の上昇を抑えきれなかった。
「わたしに対して、敬語は要りませんよ。暁君」
「いや、でも……」
「雪菜の姉ではありますが、同年代です。敬語を使われるほど、偉いわけではありませんしね」
「それなら、春菜さんもじゃないですか」
「これは習い性ですから。ですが、暁君は普段タメ口ですよね。なら、それで統一してください。ダメですか？」
「ダメじゃないで、んん、ダメじゃない」
「はい。ありがとうございます」
にこり、と微笑む春菜に古城は内心でどうしたものかと苦笑いを浮かべた。
正直に言って、少し苦手意識が芽生えていた。雪菜によく似た顔立ちで、丁寧語という点では妹と同じなのだが、どうにも姉という立ち位置が非常に強くその性格に出ているようだ。
古城は長男だ。姉もいないし包容力を感じさせる女性との関わり

は、実のところほとんどない。辛うじて、ラフォリアが該当する可能性があるという程度である。母親は論外だ。そうなると、このどことなく年上のお姉さんといった雰囲気を醸し出す女性に、どのように接したらいいのか分からなくなってしまうのだ。
「先輩、食べ終わったら流しに出してくださいね」
流れを断ち切るように、唐突に雪菜が言った。
「あ、おう。姫柊」
「ごちそうさまでした」
雪菜は一人先に食べ終わり、スタスタと流しのほうに、自分の皿を持っていく。
蛇口を捻って軽く水洗いをしてから、スポンジに洗剤をつけた泡立て始めた。
「あらら、とても自然に洗物を始めるのねぇ」
「姉さん。そういうのは、昨日で終わり」
「えー、つまんない」
春菜は、憮然としてフォークをレタスに刺した。
古城と話していたので、食事が進んでいないのである。
古城は、古城で食事が遅れていたので、慌てて腹に収める。雪菜に洗物を任せるのは、さすがによくないと思ったらしい。
食後、洗物を終えた後は家事をすることもなく、それぞれが自由に過ごしていた。年末とはいえ、古城に年越しの準備をするつもりは毛頭ない。怠惰な吸血鬼は、大掃除すらも面倒と最低限の整理整頓で済ませようという腹であった。凪沙は本土で新年を迎えるだろうし、今の古城は自由である。ベッドに仰向けになって、漫画を読んでいると、扉をノックする音が聞こえた。
返事をすると、中に雪菜が入ってきた。
雪菜はエプロンを着て、掃除機を引っ張ってきていた。
「せっかくですから、今の内に全部終えてしまいませんか？」
と、雪菜が提案したことで、だらだらとした生活を送るという算段が覆されそうになっていた。
「大掃除か？」

「はい」
　提案しているようで、すっかりやる気になっていた。
「別に今しなくても」
「大掃除は歳神様をお迎えする日本の伝統行事です。一年の厄を落としておかないと、来年もまたいろいろと騒動に巻き込まれるかもしれませんよ」
　雪菜は掃除機のノズルを上にして、古城に催促するように掃除機のスイッチを入れた。
　ゴオオオオと掃除機が唸り声を上げた。
　あたかも古城の尻を叩くかのようである。
「先輩、今まで積み上げた損害額だけでもものすごい金額になるんですから、ここは来年に備えて身奇麗になったほうがいいのでは？」
「身奇麗って、やましいところがあるみたいに言うなよ」
　とは言うものの、古城自身強力極まりない眷獣によって破壊した建造物は多い。不老不死かつ最強の第四真祖でなければ、今頃は破滅していたことであろう。
　験担ぎもたまにはやってもいいかもしれない、と思えるくらいには後ろ暗いものがある。そういう自覚があるのだ。
　よって、嫌々ながらも身体を起こす気になってしまった。
「分かったよ」
「では、いらない物を部屋の外に出してくださいね。雑誌は紐で縛ってくださると後が楽なので、そのようにしてください」
「大丈夫だって、て、あれ、ビニール紐どこだったかな」
「確か、押入れの奥にあったと思います」
「ああ、そうか。そうだったな」
「さっき、凪沙ちゃんに電話をしたんですけど、やるならキッチン周りの油汚れが気になるとのことなので、そちらにも時間をかけますね」
「アイツ、何を一番めんどくさいのを人に押し付けてんだ」
　古城は妹の面の皮の厚さに驚くと同時にあっさりと引き受けた雪菜にも呆れる。雪菜は特に文句もないようで、むしろ今すぐにでも掃除に取り掛かりたいという様子だ。

古城はのっそりとベッドから下りて、雪菜の言う押入れに向かった。
雪菜は古城が動き出したのを確認して、部屋を後にした。その後、リビングから掃除機の音が聞こえてくる。
古城の部屋には漫画雑誌が山と積まれている。
読まなくなったものや収録作品がコミックスになったことで必要性がなくなったものもあるので、そういったものを選別して紐で縛る作業をする。
他、ゴミ袋を用意して、雑貨を放り込み、学校のプリント類でいらないものなどを古紙として出す。
三十分ほどでゴミはすべて出し切った。
そうすると、妙にすっきりとした気持ちになる。
雪菜の言うとおり、一年の厄が落ちたということか。
「これ、外に出せばいいのか」
ずっしりとする雑誌の塊を持ち上げて、扉を開けて部屋の外に出した。
「姫柊。こっちは、ゴミ出し終わった」
「はい。凪沙ちゃんに関わるところはできませんから、後は凪沙ちゃんが帰ってきてからにしましょう。とりあえず、わたしはコンロの油汚れをなんとかしますから、先輩は休んでてください」
凪沙がいないことには、凪沙の部屋などには手出しができない。
今の段階ではこの家の人間である古城がよしとしたところだけを掃除するのである。
「いや、姫柊。何もうちのことでそこまでしなくてもいいんだぞ」
「いいえ。乗りかかった船ですから」
雪菜は、もう止めるつもりがない。古城は、親しいとはいえ他人の雪菜にそこまでさせるのは気が引けるのであるが、ここまでやる気になった雪菜は強情だ。止めろといってもおそらくは止めない。
「じゃあ、すまないけど頼むな」
「はい。お任せください」
雪菜は家事が好きなのか。

ともあれ、コンロの油汚れなどは一番時間がかかるところである。雪菜が引き受けてくれると言うのなら、甘えてしまおうと思ってしまった。

そこで、ふと気が付く。

「あれ、春菜は？」

家の中に春菜の姿がなかった。

「姉さんはうちです。なんでも、上から連絡が来たとかで」

「上って獅子王機関か？」

「そうだと思います。任務に関わることなら、秘密にするものですし、詳しくは分かりませんけど」

「そういうものか」

「そういうものです」

雪菜も春菜も若すぎるといってもいい年齢なので、忘れてしまうが、彼女たちは国の特務機関の人間である。古城が雪菜と出会ったのも、元は雪菜が古城を監視する命を帯びていたからである。

雪菜については、その監視に関しても未熟としかいえないようなところがあり、非常に堂々と監視を宣言し、こうして家に上がりこむなど、それでいいのかと思えるところもなきにしも非ずだが、それでも特務機関に所属しているという点で、古城よりもずっと複雑な関係の中にあるのである。

上司からの連絡など、社会人と同じような環境に彼女たちはある。職務遂行上の秘密というものはどうしても出てくるもので、それは特務機関だろうが民間企業だろうが変わりはない。

春菜は、自分の情報を守るため、隣の姫柊家に戻ったのだ。

「あれ、先輩。そういえば、今姉さんのこと名前で呼びました？」

「ん？　ああ」

手を止めてこちらを見てくる雪菜に、古城は頷いた。

「でも、さっきまでは」

「そりゃ、春菜がタメ口でって言ってきたじゃないか。それに、苗字だと姫柊と被るしな」

雪菜と春菜は姉妹なのだから、姓も同じだ。少なくともどちらか一

方は名前で呼ばなければ、ややこしいことになる。
「それはそうかもしれませんけど……」
なにやら不服な様子の雪菜は唇を尖らせて作業に戻る。
洗剤に浸け込んで浮き上がった頑固な油汚れを、歯ブラシで擦っているのだが、気のせいかさっきまでと比べて非常に力が篭っているようだ。
なんだかな、と深いことを考えることもなく、古城はテレビのリモコンに手を伸ばすのであった。

□

時は僅かに巻き戻る。
スマートフォンに上司からの連絡が入っていたことに気付いた春菜は、慌てて雪菜に事情を説明して暁家を辞した。
雪菜から受け取った鍵で玄関ドアを開けて中に入り、リビングに。それから、念のために軽く盗聴されていないかを術で調べてから上司にかけ直した。
三回ほど、コールした後で機嫌の悪そうな上司の声に身体を萎縮させる。
「はい、申し訳ありませんでした。気付かず。はい。大丈夫です」
電話越しの相手に頭を下げるのは日本人らしい。
軽くお叱りを受けて消沈する。
「はい、はい。問題はありません。滞りなく。妹とも接触できましたし、以前と同じように仲良く過ごしています」
春菜は声を潜めて、囁くように言う。
「剣巫としても、とても成長しているようです。これなら、すぐにでも……はい、間違いなくお役に立つはずです。あの娘ほどの剣巫、早々現れるものではありません。身内贔屓ではなく、客観的にです。未熟は未熟ですが、水準を大きく上回っていることも事実ですから。今の時点で、さらに伸び代があるというのが驚きです」
それは、春菜の偽らざる本音であった。

雪菜がまだまだ見習いの域を出ていないというのは、あくまでも立場上のものでしかない。実力はすでに一級品であり、暁古城と関わる中で多くの実戦経験を積んだことが、雪菜の成長を促進していたのであろう。

「第四真祖は隙だらけですし、二人とも無警戒です。ええ、はい。そちらの準備が整えば、わたしはいつでも。ですが、問題も。空隙の魔女がどのように動くか。気取られずにすめば御の字でしょうが、そうもいかないでしょう。そちらはいい？　はい、承知しました。出すぎた真似を、はい。ありがとうございます。失礼します」

電話が切れて、スマートフォンを持っていた手を下ろす。

春菜は、ゆっくりと視線を姿見に移す。

鏡に映る春菜は、雪菜をほんの少しだけ縦に伸ばしたような姿だ。髪はセミロングで、胸は女性らしさが妹よりも強調されているものの、同年代に見るからに大きな娘がいるので、グラマラスな体形とは思っていない。

雪菜と並べば双子に見えることだろう。

それほどまでに、春菜は雪菜と酷似した顔立ちなのだ。

ただし、明らかに異なる点もあった。

第一に、表情がない。

空虚だ。

瞳には何も映さず、心は何事にも動じない。だから、場所によってあらゆる表情を作ることができる。今の春菜は何も感じない。ただ淡々と与えられた任務を達成することのみが存在意義である。半ば強迫観念に支配されたかのような状態ながらも平静を維持するという異常性。二律背反の極めてアンバランスな状態を、不自然なままに持続させているのである。

その春菜の顔が、突然、苦悶に歪む。

それから春菜は自分の荷物を漁る。バッグの中から巾着袋を取り出して、洗面所に向かう。ピンク色の可愛らしいデザインの巾着袋である。

春菜はその袋の口を開けて、中から手の平大の透明な小瓶を取り出

した。中に入っているのは、白い錠剤だ。
「ぐ、くぅ」
春菜は崩れるように体勢を崩し、肘を突いて洗面台に縋りつく。膝を突いたが、上半身を洗面台に乗せるようにして堪えたので、倒れるまでにはならなかった。
その額には、汗が噴き出している。顔は青白くなり、全身に震えが奔る。寒い、怖い、気持ちが悪い。骨がギチギチと軋み上がっているような錯覚。心臓のポンプ機能が異常を来たし、激しく打ち震えて血流が急加速する。視界が変色して、右に左に揺れる。
コップに水を入れ、震える手で小瓶の蓋を外して錠剤を手に取ると、煽るようにして口の中に入れ、コップの水で胃に流し込む。
「は……あ、うん……」
息を止めて、競り上がってくるものを押し込めると、次第に高鳴った心臓が落ち着いてくる。汗も引き、顔色が元通りになった。
五分ほど、その場に蹲って呼吸を整えていた春菜は、身体の調子が戻ったのを確認すると、顔を洗って汗を流し、何事もなかったかのように背筋を伸ばした。
それから、玄関に向かう。
「戻らないと」
仕事まではまだ時間がある。
雪菜と古城のいるところに戻って、何か話でもしよう。
あの家にいると、不思議な暖かさを感じるのもまた事実だ。何か、失った大切なものがあの空間にあるような気がして、春菜は自分でもそうと気付かず、足を急がせた。

その三

絃神島は〝魔族特区〟に指定されている人工島であり、日本本土の遥か南方にある。

そのため、一年を通して温暖な気候であり、もうすぐ新年を迎えようかという時期になっていながら、照りつける太陽の光は真夏のそれと遜色なく、アスファルトに陽炎を作り出していた。

「しかし、ここまで暑いと明日から新年という気がしませんね」

春菜は手を額に当てて影を作る。

道行く人はほぼ全員が半袖姿である。春菜自身も、夏服を着用していて、まったく季節感がない。

「本土から来ると、そう思うのもしかたないと思う。向こうは今年、豪雪だって聞くし」

隣を歩く雪菜がテレビで得た情報を語る。

雪菜の服装も、実に夏らしい。チェック柄のミニスカートにニーソックスという出で立ちで、背中にギグケースを背負っているのだから、これからライヴにでも行くのかと思えるスタイルである。

二人で並んで歩くのは、いつ以来だろうか。

春菜が本格的に仕事を始めてからは、ゆっくりと会って話す機会すらも、ほとんどなかったように思う。

「ここにいると、本当に日本かと疑ってしまいますねぇ」

興味深そうに周囲を眺めながら、春菜は言う。

本土、特に北陸日本海側は、十二月中に記録的な大雪となっているらしい。豪雪地帯で名が通っている土地では、大抵積雪が一メートルを越えているという。

「本土に戻ったら、スキーでもしてみましょうか」

「スキーか。そういえば、もうずいぶんとやってないね」

「お互い仕事だの学業だので忙しかったですからね。雪菜は、雪上訓練でしか、スキーをする機会はなかったんでしょう？」

「そうだね。それも、もうずいぶんと前になるけど。二、三年前かなぁ」

スキーは、スポーツのみならず、雪上を移動するのに必要な技能でもあった。
獅子王機関は、戦闘集団でもあるので、いざというときのために雪山での戦いを想定した様々な訓練を積んでいる。概ね、十二歳から十四歳までに、毎年山篭りを経験する。
「姉さんは？」
「わたし？」
「任務、北のほうだったでしょ？」
直前まで、春菜はとある犯罪組織の捜査に加わっていたという。その組織の根拠地となっていたのが北海道の南側の都市一帯だったのだと、雪菜は聞いている。
春菜が任務の終了と共に島にやってきたときには、すでにあちらは大雪に見舞われており、大量の雪を、その肌で感じていたはずであった。
「雪は尋常じゃないくらいに降っていたのだけど、さすがにスキーを楽しむ余裕はなかったんですよね。本当に残念です。年明けには、別件に向かわなければならないのに」
「今度は、どこ？」
「それは、まだ内緒。秘匿性の高さは相変わらずですから」
秘匿性が高いということは、それだけ危険を伴うということでもある。公にできない、裏方の仕事なのかもしれない。姉が具体的にどのような仕事をしているのか、判然としないところではあるが、雪菜はただ姉を心配することしかできない。
「身体には気をつけてね」
「もちろん。この業界は身体が資本ですから」
春菜は力瘤を作って雪菜に見せる。
筋骨隆々というわけではないが、細身ながら強く、しなやかな身体つきをしているのが見て取れた。
「次はどこに行きましょうか。……アイスなんてどうでしょう。この気候なら、美味しくいただけるはず」
「アイスだったら、ここを真っ直ぐに行ったところに美味しいお店が

あるよ」
「実はわたし、チョコミントには目がないんですよね。北海道での任務の際にはエイティーンのチョコミントが数少ない癒しでした」
「北海道は真冬だよね、姉さん。氷点下の……」
直前に「この気候なら」と前提条件を付与していたのは、一体なんだったのか。
結局、春菜はどのような環境にあってもアイスをこよなく愛し、口にすることに悦びを感じるのであろう。
雪菜が案内したアイス屋は、本土から進出してきたチェーン店である。
アイスの専門店の悩みどころは冬の売り上げ低下であるが、常夏の島で、しかも人口も増えつつある絃神島は、彼らにしてみれば、まさに宝の島であった。
よって、最近になって資金力のある本土の資本が、島内進出を推し進めていたのである。
雪菜は店でブルーベリーのソフトクリームを、春菜はチョコミントの三段重ねを注文した。立ち歩いて食べるのでは行儀が悪い。二人はベンチに座って、夏の風物詩に舌鼓を打った。
「このブルーベリー、あまり甘くなくて、ちょうどいい。姉さんのは、どう？」
「スカッとする。うん、この草っぽい感じが病み付きになります」
「姉さん。もうちょっと表現を考えたほうがいいんじゃないかな……」
草っぽい、などという国語力を疑われる表現に、雪菜は呆れながら、春菜の食べる速さに目を点にした。
三段あったものが、すでに最後の一段になっていた。雪菜が目を離していたのは、ほんの僅かな時間だったにも拘らずだ。
「え、もうちょっと、味わって食べたほうがいいんじゃないかな？」
「美味しいものは新鮮なうちに食べたほうがいいじゃないですか。わたし、好きな物をがっつりいくタイプなんですよ」
「アイスに新鮮も何もないと思うよ。賞味期限だって、ないんだし」

「え、本当に？」
「知らなかったの？」
「あぁ、雪菜ちゃんに蔑まれてしまいました。おねえちゃん、割とマジでショック」
「さ、蔑むって、そんなことないし！」
　雪菜が慌てて否定する。その隙を突いた春菜は、雪菜の手に握られたブルーベリーのソフトクリームを一口。
「あ！」
「ほんと、これも美味しい。チョコミントの上にブルーベリーのソフトクリームって手もあったのね」
「姉さん！　一口が大きすぎ！」
　予想外の味に感心する春菜に雪菜が抗議の声を上げる。
　じっくり楽しんでいた雪菜のソフトクリームは、春菜の一撃によって大きく削り取られていた。がっつりいく派の春菜は、人のものを摘む際にも大きくいくのだ。
「じゃあ、雪菜ちゃんにはこっち上げる」
　そう言って、春菜は自分のアイスを差し出した。
「がっつりいっていいですよ」
「言ったね。姉さん」
　雪菜の目が猛禽の如く細められ、そして口を開けて春菜のアイスを頬張った。結果、アイスを二分の一にまで抉り取ってしまった。
「わわ、それはちょっと」
「ひゃあ、ひたッ」
　雪菜は目を瞑り、顔を歪める。
　冷たいものを一気に食べたために、頭に鈍痛が奔ったのだ。
「言わんこっちゃない。そのまま飲むからそうなるんです。交感神経がびっくりしてしまったでしょう」
「どうして、姉さんのほうが食べてるのに」
「わたしは、ほら、アイスクリーム頭痛には慣れてますから」
「え、痛かったの!?」
　頭痛を感じながら、チョコミントの味を常に口の中に感じるため

に、連続してアイスを頬張るとは、もはや呆れを通り越して尊敬してしまいそうになる。
「あ、ちなみにアイスクリーム頭痛って、ちゃんとした医学用語ですから」
などと、春菜は言いながら、最後の一口を食べてから、コーンを齧る。
「暁君も一緒に誘えばよかったですね」
食べ終わってから、一息ついて春菜が言った。
「だから、わたしもそう言ったのに」
「暁君も気を利かせてくれたんですよ。それに、彼には彼で予定が入っているんでしょう？」
「む……」
古城がここにいないのは、古城にも午後の予定があるからであった。
それが、浅葱や矢瀬との外出であると雪菜は知っていたので、内心では複雑であった。古城の交友関係に口出しすることはできないし、浅葱も矢瀬も信用できる人間である。浅葱に関しては、美人でしかも古城に好意を抱いているという点で、古城がよからぬことを働かないか心配ではあるが、古城の動向を監視する術が彼には仕込んである。雪菜が傍にいなくても、何かあれば伝わる仕掛けになっているのだ。
それは、普段から古城の傍にいられるわけではないからである。
学年が違えば、物理的に離れている時間は当然長くなる。
学校に潜入するとなれば、同じクラスになるのが最も相応しいが、一歳年下の雪菜にはそれが叶わなかった。そして、学校にいる時間は一日の大半である。それほど長い時間を、離れているのは監視者として問題がある。だからこそ、式神や魔術によって古城を監視するという行動に出ているのだ。
「ふぅん」
雪菜の表情を見た春菜は邪悪な笑みを浮かべた。
「何？」
「暁君が気になる？」

「えッ」
　びく、と雪菜は身体を揺らした。
「それは、わたしは先輩の監視役ですから。本来は、時間の限り先輩を見張る必要があります」
「そういうことじゃないんですけどね。ほら、暁君が例えば恋人とかを作ったとして、雪菜はひたすら監視し続けることになるじゃない？」
「せ、先輩が恋人なんて、そんな……」
　否定しようとして、言葉尻が小さくなった。
　真っ先に脳裏に浮かんだのは、浅葱であった。他にも夏音や紗矢華など、古城に身近な少女は多い。古城が血を吸ったのは、雪菜だけに限らないし、彼に好意を抱いているのが明らかな女性にも心当たりがある。その誰かと、正式に古城が付き合い始めたとして、雪菜はどうするのか。
　雪菜は、自分でも知らないうちにコーンの包み紙を握り締めていた。
「……でも、わたしは監視役ですから」
「職務には忠実に。うん、それも大切なのですけどね。まったく、人の恋愛を観察することほどつまらない仕事はないですよ。これ、経験談」
「経験談ですか」
「前に一年くらい受け持ってた監視任務。絶望的につまらなかったんですよね。なんでしょう。こう、絶望するんですよね」
　何が、絶望するのか。詳しくは聞けなかった。春菜が言っているのは、恐らくはジョークであり、言うほど深刻なものではなかったのであろう。彼女の口調に重いものはない。だが、それを自分に置き換えたとき、雪菜の胸に押し寄せたのは苛立ちと恐怖であった。
　古城が誰かと付き合い始めたとき、彼の隣には雪菜はいない。
　常識的に判断して、雪菜がこれまで通りに古城と接することはできなくなるだろう。古城は、朴念仁だからいいとしても相手の女性が雪菜を認めない。それは、恋愛経験がない雪菜でも容易に想像できるこ

とであり、だからこそ、古城からは今まで以上に距離を取って、本当に観察しているだけの生活になってしまうだろう。
　不愉快だった。とにかく、古城が女性と仲睦まじく道を歩き、買い物をし、そして、部屋に連れ込むといった場面を想像してしまい、吐き気すら催す不快感を覚えた。
「人の恋愛をじっと眺めているのは、確かに不快かな。これが、女子の友だちとかなら笑い話にでもなるんだけど」
「そっちに行きますかー……」
　苦笑する春菜は、乱暴に雪菜の頭を撫でる。
「わ、何するの！」
「ふふーん、別になんでもないですよ」
　仲睦まじい姉妹の様子に、道行く人はついつい振り返る。二人の類希なあまりにも整いすぎた容姿が原因であった。それは、浮世離れしたとも形容されるほどのもので、それ故に声をかけようにもかけられないといった状況になっていた。
「なんだか、視線を感じます……やっぱり、姉さんが変なことをするから、……わたしまで変な人だと思われたらどうするの」
「雪菜ちゃんは、昔から天然入ってますから、どちらかといえばすでに変な人の仲間なんですけどね」
「天、然？」
　姉にまで言われた。
　凪沙をはじめとする友人たちにも以前同じようなことを言われたが、姉にまで天然などという不名誉な評価をされるとは思っていなかった。雪菜は、しっかりものだという自負があるだけに、こうした評価には愕然とする。
「じゃあ、次、いきましょうか。暁君たちと合流するまではまだ時間があるし、旅行自慢ができるくらいに、遊びまわらないと正月休みがもったいない」
　春菜はコーンの保護紙を丸めてポケットに押し込み、ベンチを立った。
　雪菜は春菜に続いて立ち上がった。

「姉さん。次、どこに行くつもりなの？」
「さあ、どうしましょうか」
「どうしましょうって」
「じゃあ、あそこのゲームセンターにしましょう」
適当に目に付いた場所を指差したのだろう。
「あ、あそこ」
雪菜は見覚えのあるゲームセンターを見て、一瞬だけ固まった。
「あら、行ったことあるんですか？」
「うん。前に一度」
「意外」
春菜は雪菜がゲームセンターに行ったことがあるというのが、イメージと合わずに目を白黒させた。雪菜自身も、そこまでゲームに興味があるわけではない。ただ、監視対象の第四真祖につれられて訪れただけであり、最初の事件に巻き込まれるきっかけにもなった場所だ。遊んだのは一度きりだが、そういう意味では思い入れがあった。
「行ったことがあるのならちょうどいいですね。お金はわたしが持つので、パーと遊んでしまいましょう！」
「え、あ、ちょっと」
春菜はギグケースを背負い直した雪菜の手を引いて、半ば強引に雪菜をゲームセンターに連れ込んだのであった。

□

「お、来たか。いつも通り遅れるんじゃねえかと思ったんだけどな」
「時間通りに来たのに、なんでがっかりされてんだ俺は」
待ち合わせ場所にやってきた古城は、矢瀬のあんまりな言い様に不機嫌そうに返す。
「古城さん、こんにちは！」
「おう、結瞳。元気してたか」
飛び跳ねるような勢いで、古城に挨拶をしてきた結瞳に古城は手を挙げて挨拶を返した。

「時間通りって言っても時間ぴったりってのはどうかと思うわよ。五分前行動は基本でしょ」
結瞳の隣に立って手を組んでいた浅葱がそんな憎まれ口を言う。
「あんたが最後っていうのは、割といつも通りよね」
「悪かったな。炎天下で待たせちまってよ」
「結瞳ちゃんだって大変だったのにね」
「え、いえ。そんなことはないですよ！」
「ほら、浅葱。結瞳坊を見習えって」
矢瀬がからかうように結瞳を指差す。
その指を、結瞳が掴んで、あらぬ方向に捻じ曲げた。
「痛て、こら、なにすんだ！」
「変な呼び方しないでくださいって言ってるじゃないですか」
結瞳は書類上は矢瀬家に保護されている。よって、学生寮が閉まっている年末年始は、矢瀬家で生活しているのだ。矢瀬の兄が、結瞳の世話をするはずもなく、必然的に基樹が結瞳の面倒を見ているのだが、二人の仲は、さほど良好ではない。
「たく、このガキ」
「あんたが悪いでしょ、今のは」
顔を顰めて手を振る矢瀬を浅葱がため息混じりで嗜める。
「だからって、指ここまで曲げるか？　ここまで来たんだぞ？」
矢瀬は、結瞳の暴力によって自分の指がいかに限界間際まで曲げられていたのかをアピールする。
「古城さんは、どう思います？」
「そりゃ、コイツが悪い」
結瞳に尋ねられたので、古城は迷うことなく悪友を指差した。
「ですよね」
「こじょ、お前までか。俺とお前の友情はどうしたんだよ」
「あー。はいはい、友情友情」
大袈裟な反応を示す基樹に古城は鬱陶しそうに対応する。
古城のそっけない態度に、基樹はあからさまに舌打ちをして不平を示した。

「あれ、それよし古城。あんた、姫柊さんどうしたのよ」
浅葱が、古城に言う。
それに続いて、基樹や結瞳も首をかしげて古城を見た。
「あいつなら、今いねえよ」
「いない？　四六時中一緒にいるようなお前らが？」
「いや、別に四六時中一緒にいねえよ」
古城は否定するが、実際学校以外のところでは、古城と雪菜はよく一緒にいる。登下校も一緒で、追試にまで同伴するという具合なので、矢瀬の意見は必ずしも的外れではない。
「あんた、姫柊さんに失礼なことしたんじゃないでしょうね？」
「なんでそうなる！　別に俺が何かしたわけじゃねえよ！」
雪菜が一緒にいるとからかいの対象になり、一緒にいないとどういうわけか古城が雪菜に何かしたのではないかと疑われる。くっ付いてくるのは雪菜のほうなのに、どういうわけだと古城は内心でへそを曲げる。
「だけどよ、本当に姫柊ちゃんがいないのって珍しいじゃねえか。何か用事でもあったのか？」
「アイツの姉貴が来てんだよ。それで、島を案内してんだ」
「姉？　姫柊さん、お姉さんがいたんだ」
浅葱が意外そうにしている。古城も、そんな話は聞いていなかったので、浅葱の気持ちも分かる。
「ああ、春菜って人だ。同い年くらい、少し年上にも見えたか……？」
「美人？」
「なんだそれ」
「いいから」
浅葱が妙に強い口調で言ってくるので、古城は反応に困った。
「まあ、あれだ。姫柊を少し成長させたような感じだ」
「姫柊さんを？　それ、要するに超美人ってことじゃないの」
浅葱が絶句する。
姫柊が、見惚れるほどの美少女なのだ。それをそのまま成長させ、さらには姉属性まで完備するとなれば、それは脅威となりうる。

「別にこっちで生活するわけじゃないんだろ？」
「ああ、二日までこっちにいて、三日には帰るってよ」
春菜はあくまでも雪菜に会いに来ただけだ。もう少し島で過ごすつもりのようだが、休みが終わる前には島を離れなければならない。
「だってさ。よかったじゃないか、浅葱。それに結瞳坊もな……いでッ」
浅葱と結瞳の鋭い肘撃ちを受けて、矢瀬は悶絶した。
「く、……まあ、姫柊ちゃんのお姉さんか。是非一度お近づきになっておきたいもんだ。後で合流するんだろ？　なあ、古城」
「ああ。つっても、夜の花火の時くらいじゃないか。向こうから連絡が来れば、もっと早くにってこともあるけどな」
姫柊姉妹が今どこを巡っているか分からない。もしかしたら、これから行く先にいる可能性もある。後で一緒に花火を見ようとはいったものの、こちらから今すぐに合流しようとは言わないことにしていた。
「姉妹水入らずに水は差さないってこと？」
「まあな。何でも、二年ぶりくらいだっていうからな」
「二年か。それは、また」
浅葱は思案げな顔をする。
雪菜が特務機関の人間であることは、すでに浅葱も知っている。よって、その姉に当たる春菜が、同じ組織の一員であろうとは予想できるだろう。しかし、実の妹と二年近くも会えないというのは、それだけ組織から与えられた仕事が忙しかったからなのだろうか。
「そっか、考えてみたら姫柊さんだって上に言われてこの島に来てるんだもんね」
浅葱が呟くと、基樹がそちらを向いた。
「なんか言ったか、浅葱」
「なんでもない。あんたは、気にせずその辺でも見てなさい」
「ひでえ、言い回し。俺の扱い酷くないか、さっきから!?」
「いや、矢瀬。同情するわ」
古城が上手い具合に乗っかる。

先ほどからかわれた鬱憤を晴らすかのような邪悪な笑みであった。
「で、まずはどこに行くんだ？」
古城は、話を強引に変えるかのように唐突に浅葱に尋ねた。

その四

ゲームセンターで一頻り遊んだ後、春菜と雪菜は一緒に早めに夕食を摂った。

春菜はこの機会に遊び倒すつもりなのか、食後にも好奇心を衰えさせることなく、様々な店に足を踏み入れては雪菜を困惑させた。

というのも、雪菜は、服飾関係にはほとんど興味がなかったし、古城の監視任務を優先するあまり、「お洒落な店」についての情報を仕入れていなかった。それは、雪菜が女の子らしいものに興味がないということではなく、ただ仕事を優先する生活を送っていたということである。

そうはいっても、春菜が雪菜を連れ込む店は、どう見ても学生が出入りするような店ではない。

並ぶ煌びやかな衣服に、ついつい目が吸い寄せられる雪菜であるが、値札を見て愕然とする。

「え、何これ」

雪菜が着ている服の値段よりも二桁あまり違う。

それは、獅子王機関から多額の資金を渡されているとはいえ、基本的に質実とした生活を送っている雪菜にとっては、あまりに次元違いの世界であった。

「ねえねえ、雪菜ちゃん。これなんか、どうでしょう?」

そんな雪菜の驚愕を他所に、姉は能天気に黒を基調としたワンピースを見せてくる。

「ね、姉さん。ここ、すごく高級なお店なんだけど」

「そうみたいね。でも、大丈夫。わたし、これでも結構稼いでるから、雪菜ちゃんにちょっとしたお年玉」

「え、ちょっとした……?」

買ってくれるらしいのだが、ちょっとしたという額ではないのだ。

春菜の金銭感覚はどうなってしまったのか。

確かに、危険な任務に就いている攻魔官は、総じて高給取りである。獅子王機関の剣巫などはその最たるもの。元剣巫で、今でも最前線で

任に当たっている春菜の収入は、一般企業に勤めるサラリーマンを遥かに上回っているだろう。
しかし、それでも春菜はまだ学生でもある。
雪菜とそう歳も変わらないのに、このような金銭感覚ではこの先心配になってしまう。
「まあまあ、気にしないで。年末なんだから、これくらいは許されるでしょう。一年の努力にご褒美がないと」
笑顔で言いながら、春菜は雪菜の背中を押して更衣室に押し込む。
「はい、じゃあ、まずはこれ着てみましょう」
「え、こ、これ？」
「似合うと思うんですよ。そう思いませんか？」
春菜は、店員の女性に尋ねた。
「はい。非常によくお似合いになると思います」
「やっぱり、そうですよね」
春菜が雪菜に渡したのは、白を基調としたブラウスである。柔らかい手触りなのが、高級感を一層高めている。
「姉さん。これ……」
「やっぱり、上に羽織るのも必要でしょうか。グレーな感じで」
「それでしたら、こちらの商品はどうでしょうか」
「ああ、ぴったり。イメージ通りです！」
雪菜を置いてけぼりにして、春菜と店員とて盛り上がっている。その内容が、雪菜を着せ替えることを目的としたモノなのだから、慄然とする。
「じゃあ、雪菜ちゃん。ちゃちゃっと着てみてくれませんか？」
笑顔で、春菜は言った。
「え、……うう……」
その笑顔には、言葉にならない威圧感めいたものがあった。雪菜自身も、似合うと煽てられ、可愛らしい服を手渡されて悪い気はせず、結局押し負ける形でしばしの間着せ替え人形として過ごすことになった。

雪菜と春菜は、大通りを歩いていた。
雪菜のために春菜が購入した衣服は、宅配サービスを利用したので手元にはない。
雪菜の手には、ゲームセンターで獲得したねこまたんの人形を入れた袋があるだけで、ギグケースを除けば後はなにもない。
散々遊び倒した割には、手荷物が少ないのは、食べ歩きをしていたこともあるのだろう。
太陽はすでに水平線の彼方に沈み、夜の帳が降りてはいるが、通りは人でごったがえしていた。
それは、この日が大晦日だということもあるのだろう。
世界各国、新年を祝うというイベントがあるところでは、ほぼすべてで特別な一日である。お祭り騒ぎになることも不思議ではなく、それは〝魔族特区〟である絃神島でも変わらない。
特に絃神島ではお祭という色合いが非常に強く出ている。新年の幕開けを彩るイベントとして、大規模な花火大会があるからだ。
絃神島では、一年の終わりをカウントダウンするのに合わせて花火を打ち上げる。夜空に咲く大輪の花を、多くの人が見物するので、家の中で新年を迎えるのは、花火が家から見える好立地に暮らす者くらいになる。
花火大会が始まる前までに、花火をいい位置から見るために、花火がよく見えるビルの屋上や高台は、昼間から場所取りで賑わうことになる。
「いやはや、ここまでとは思いませんでした。ちょっと、通りに人が多すぎません？」
人間と魔族が融和して生活する現代。その生活様式は、基本的に人間のそれに近いものとなっている。それは、ある見方をすれば、魔族が人間の文化に取り込まれているとも取れるものだが、世界的に見て、それを問題視する動きは少ない。
魔族の中には伝統的な生活を残そうとする者もいるが、それは人間でも先住民族の生活を保障するといった活動があるので、別段珍しいものではない。

〝魔族特区〟では、魔族が、神社に参拝するという光景も、もはや普通のものとなっている。
「先輩たち、もう神社についているそうですよ」
「なら、急がないといけませんね」
春菜は雪菜の手を引いて早足になる。
人込みを掻き分けて、前に進むのだが、どうにも目的地までが遠い。
「そのギグケースも、ずいぶんと迷惑になっていますね」
「す、すみません……」
申し訳なさそうにする雪菜は、できる限り周囲の人にぶつからないように、ギグケースを身体に引き寄せて、揺れないようにしている。
心なしか、身体も萎縮しているように見える。
「もうすぐ、新年のカウントダウンが始まりますね。人払いしてしまいましょうか……」
「それはダメだからね。魔術の私的利用は」
「冗談ですよ。でも、これだけ人が多いと、ついつい使いたくなっちゃうんですよ」
「気持ちは分かるけど、ダメだからね」
「はいはい」
いつもよりも歩くペースがどうしても遅くなってしまう。
心も身体も逸っているのに、人込みのために思うように進まないのである。
雪菜も、約束の時間に遅れそうになっているのが心苦しく、早く古城に合流したいと思っているのだが、気持ちだけでは混雑は解消しない。周囲にいる大半の者が、雪菜と同じような心境だからである。
「少し送れそうですね。雪菜、暁君に遅れるってメールしたほうがいいかもしれません」
「うん、そうする」
雪菜と春菜は、古城にメールするために道の端によって立ち止まった。
雪菜は自分のスマートフォンで古城にメールをする。
味気ない淡々とした文面を眺めて、他にも付け加えることがあるか

と頭を悩ませたが、特に思いつかず、雪菜は遅刻する旨を伝えるだけの簡素なメールを送信した。
その直後である。
隣で、茫洋と道行く人を見送っていた春菜が胸を押さえて蹲ったのである。
「姉さん!?」
あまりのことに雪菜は声を大にして叫んでしまう。
それによって、衆目が集まった。
春菜は、雪菜の声が聞こえているようで、手を伸ばしてきた雪菜の肘のあたりをを強く握り締める。
「ね、姉さん。どうしたの!? 胸、苦しい?」
雪菜も膝をついて春菜と視線を同じ高さにして、尋ねる。春菜は、ぜぇぜぇと乱れた呼吸を整えようとして咽る。
「だい、じょうぶ。ちょっと、……息がつまっただけ、だから」
「大丈夫って、そんな風に見えないよ!」
春菜の額には、汗が滲んでいる。それが、暑さによるものではないというのは明白である。顔色も蒼然としている。
春菜を心配して、何人か傍にやってきてくれた。
とにかく、春菜の状態が普通じゃない。もしかしたら、何かの重大疾患を抱えているのかもしれない。そう思うと、雪菜は足元が崩れ去るような恐怖に駆られた。
「救急車、救急車すぐに――――」
「ダメッ!!」
「ッ……!?」
鬼気迫る春菜の言葉に、雪菜はスマートフォンを操作しようとしていた手を止めた。
「薬」
「え……?」
「薬、飲めば落ち着くから……」
消え入りそうな声で、春菜は言う。それから、カバンのチャックを開けた。雪菜が、そのカバンを横から取り、尋ねる。

「薬って、この瓶？」
雪菜が取り出した瓶をを見た春菜は、弱弱しく頷いた。
雪菜はすぐに瓶の蓋を取る。焦っているために、扱いが乱暴だが、気にしていられない。
「姉さん、何錠いるの？」
「三、四くらい……水はいらない、から」
雪菜は手にとった錠剤を、春菜の口に押し当てるようにして入れる。
春菜は顔を歪めながら薬を飲み下し、深く息を吐いた。

手助けをしてくれた人に礼を言って、雪菜は春菜を支えて近くの公園に向かった。
路地裏にある小さな公園には、大した遊具もないが、ベンチがあれば事足りる。
大通りの喧騒を離れた公園には、遠くに人のざわめきがあるものの、静けさが漂っていた。
「姉さん。落ち着いた？」
雪菜は春菜を膝枕していた。
街灯の冷たい明かりが、ベンチに座る二人を照らす。
「ありがとうございます、雪菜ちゃん。ずいぶんと、楽になりました」
春菜はそう言いながら、雪菜の太ももを揉んだ。
「う、きゃあ、何、してるの！」
「うお、そんな風に暴れたら酔う」
雪菜が春菜の頭を膝に乗せたまま暴れたので、春菜は頭を大きく揺さぶられる形となった。
「姉さんが悪いんでしょ。いきなり、触るから」
「いや、最高の枕だと思って。柔らかいしあったかいし、どことなくいい匂いもする気がね」
「ね、姉さん。もう大丈夫だというのなら、頭を上げてもいいんじゃない？」
若干引きながら、雪菜は言った。

春菜も、あまり雪菜に負担をかけたくなかったのか、ゆっくりと身を起こした。
「それにしても、びっくりしたよ。いきなり、倒れそうになるなんて」
雪菜は、春菜の様子を観察しながら、言った。顔色はまだよくないが、一時にくらべればずいぶんと頬に赤みが戻った。
「……何か、病気でもあるの？」
雪菜は、尋ねようか迷ったものの、結局は切り出すことにした。
それに対して春菜は、少しだけ口を噤んだ後で、
「ううん。大丈夫。雪菜が心配することじゃないし、薬を飲めば落ち着くから」
と言った。
もちろん、その答えに雪菜が納得するはずがなかった。薬を飲めば落ち着くというのは、完治を意味する言葉ではない。
春菜が何か身体に問題を抱えており、薬によって症状を抑えている可能性は非常に高いし、春菜の口振りからは、その問題は治せない類なのではないかとも推測できてしまう。
しかし、それは病を抱える者にとってはとても重大なものである。雪菜がどこまで踏み込めるのか、実の姉のことではあるが、雪菜はそれ以上の追及ができなかった。
そんな雪菜の様子を見て、春菜は嬉しそうに笑った。
「ありがとう。心配してくれるのね」
「当たり前でしょ。姉妹なんだから」
照れたような表情で、雪菜は言う。
すると、春菜は雪菜の頭を無造作に撫でた。
「昔はよく、こうしてましたね」
「そんなこと、ないよ」
雪菜は否定する。しかし、春菜の手を払い除けることはなかった。
「そうでしたか？　紗矢華と仲良くなるまで、雪菜はわたしの後ろをくっ付いて回っていたじゃないですか」
「それは遡りすぎじゃないかな。本当に小さい頃の話でしょ」
確かに、紗矢華という友人ができるまでは、雪菜はきちんと話せる

友人に恵まれず、姉の手を煩わせた。その当時のことは、雪菜にとってもあまり思い出したくないものである。
「今では友だちも多いようで、安心しました」
「うん。凪沙ちゃんとか、よくしてくれるから」
「いい娘なんですね。暁君の妹さんは」
「うん、それはもう」
凪沙とも一緒に新年を迎えたかったと思う。
彼女は、今本土に渡っている。
思えば、凪沙も身体が弱かった。実兄の古城ですら、凪沙の病状について詳しく知っているわけではないが、彼女の肉体には、強力な霊体が憑依しているのが原因だと雪菜は見ている。それは、凪沙本人でも知らない事実である。
凪沙の霊能者としての潜在能力は、雪菜よりも上である可能性もあるくらいだが、第四真祖の眷獣に関わる何かが身体に憑依していて体調を崩さないほうがどうかしている。むしろ、凪沙が日常生活を普通に送っていることのほうが、不可解だというくらいである。
「姉さん。今日はもう家に帰ろう。ゆっくり休まないと、いつぶり返すか分からないでしょ」
「大丈夫ですよ。薬も飲みましたから、後半日は持ちます。今に始まったことではないのですから、そう心配しなくてもいいですよ」
「でも……」
「それに、雪菜ちゃんだって暁君たちと花火を見たいでしょう？　わたしも、雪菜が日頃お世話になっている皆さんにお会いしてみたいですし、この機を逃せば次がいつになるか」
春菜がこの島にいられる期間は短い。残り二日を島で過ごせば、次に雪菜の下を訪れるのは、何年先になるか分からない。
「雪菜ちゃんと、もっと一緒にいたいですしね」
春菜は疲れたような表情と浮かべて呟いた。
どこか影のある、憂いを帯びた表情であった。
「姉さん。……わたしも、姉さんと一緒にいたいよ」
「そう。そうなの。……よかった」

春菜は安堵したように笑みを浮かべた。
それから、春菜は立ち上がって、背筋を伸ばした。
「もう、立って大丈夫？」
雪菜は、先ほどまで死人のようだった春菜の顔色を思い出す。決して、楽観できるものではない。しかし、春菜が大丈夫だと言って聞かないのだから、雪菜にはどうすることもできない。できれば、すぐにでも家に連れて帰り、ゆっくりと身体を休めてもらいたいが、春菜の身体のことが、どうなっているのか分からないから、強くものを言うことができないのだ。
雪菜は、春菜の後に続いて立ち上がった。
「ねえ、雪菜ちゃん」
「何？」
大通りを向いた春菜は雪菜に背を向けているので、その表情を窺い知ることはできない。
「さっき、わたしと一緒にいたいって、言ってくれましたね」
「え、うん。言った」
雪菜は頷いた。紛うことなき本心であった。
「嬉しかったんですよ。一緒に、いられるようにしたいですよね」
「姉さん？　どうかしたの？」
春菜の様子が、どことなくおかしい。
雪菜は駆け寄って、春菜の顔を横から覗き込んだ。
「わたしも、姉さんと一緒にいられるのなら、嬉しいけど」
「ありがとう、雪菜」
春菜は淡い口調で、消え入るように言葉を紡ぐ。
「ねえ、それなら。ずっと、一緒にいられるようにしましょうか……」
「え？」
雪菜は聞き返す。
「雪菜がこの島を離れて、一緒に本土に帰ってくれば、また一緒に暮らせるかもしれないでしょう？」
「確かに、そうかもしれないね」
春菜の言葉を冗談と受け取った雪菜は、くすりと笑って言う。

「でも、わたしには先輩がいるから、しばらく本土には戻れないよ。監視任務は、わたしだけの仕事だからね」
他の誰にも、渡せる仕事ではないし、渡したくはない。
第四真祖を監視するという当初の任務以上に、雪菜の言葉には多分に私情が篭っていたが、それだけに軽口ながら、強い意思が込められていた。
それに、獅子王機関が雪菜の任を解くとは思えない。これまで色々とあったが、それでも雪菜は古城の監視を継続させてもらっているのである。
「そうですね。……ですが、他にもいろいろと考え方はあるはずです」
春菜の呟きに、雪菜は眉を顰める。
「雪菜ちゃん。暁君たちと合流する前、最後に行っておきたいところがあるのだけど、付いてきてくれるかな？」

その五

雪菜と春菜が遊んでいるころ、古城たちもまた自由を満喫していた。

冬休みに入ってからこの方、追試や補習などに奔走していた古城は、他の面々と異なって冬休みらしい生活をまともに送っていなかった。

外に出て自由を味わう。古城は、出所した元囚人にも似た心境で、開放感を楽しんでいた。

絃神島の新年は花火で祝う。

気候も真夏そのものとなれば、当然ながら夏祭りと同じように出店が立ち並び、人々が集う。

金と笑顔と人が集まり、混ざり合う、混沌とした市場が完成するのである。

「姫柊も言ってたけど、本当のこの島の新年は、季節感ないわ」

古城がいるのは、参拝客で賑わうとある神社の参道である。

島内では最大規模の神社で、絃神島にある神社はこの神社の分社がほとんどなので、事実上島内唯一の神社ということになろうか。境内も大きく、参道の両脇には威勢のいい声を上げる的屋の露天が立ち並ぶ。本土での生活の

ほうがまだ長い古城は、こうした光景が夏祭りと重なってしかたがない。

「あんたもここ長いじゃない。今更何言ってんの」

「まあ、そうなんだけどな。姫柊がそんなこと言ってたから、本土にいたときのことを思い出したんだよ」

浅葱のツッコミに、古城は頭を描いて答える。

古城は絃神島の育ちではない。妹の凪沙を治療するのに、〝魔族特区〟の最先端技術が必要だとされて引っ越してきたのである。

「姫柊ちゃんだって、すぐに慣れるだろ。そんなこと言ったら、コイツなんて最近来たばかりだぞ」

矢瀬がそう言って結瞳を指す。

結瞳は、矢瀬にぞんざいな扱いを受けるのが気に入らないのか、相変わらず渋い顔をしている。
「古城さん。こんな人は放っておいて、りんご飴でも買ってきましょう」
つれない小猫のように、結瞳はプイと矢瀬から離れて古城を誘う。矢瀬もさすがに結瞳のませた態度に慣れたので、嫌な顔をすることもない。むしろ、自ら煽っていくスタイルを貫く。
「結瞳坊も甘いものには目がないか」
「その変な呼び方止めてください。人が嫌がることすると、将来禿げますよ」
「禿げねえよ！　根拠なく人の将来を辱めんな！」
禿げる、などと言われては、矢瀬も捨て置けない。ついつい、息を荒げて反発する。
「何、基樹。あんた禿げんの？　知り合いに植毛関係で仕事してる人いるけど紹介しようか？」
「余計なお世話だ。お前まで何言ってんだよ」
浅葱も結瞳に乗っかってからかう。心底、嫌な顔をして矢瀬は呻く。顔には出さないが、古城も矢瀬の気持ちは分かる。男として、頭に問題が表れるのは辛いことだと思う。
四人で話をしていると、その背後から声をかけられた。
「お前たち。往来のど真ん中で、邪魔だぞ」
声の主は、古城の担任の南宮那月であった。
真夏並みの気温だというのに、いつも通りにゴスロリドレスに身を包み、ひらひらの付いた黒い扇を古城の脇腹にぐりぐりと捻じ込んでくる。
「げ、那月ちゃん」
「教師をちゃん付けで呼ぶな」
「痛てえ、痛てえって」
古城は一歩退いて、那月を睨む。
「まったく、こいつらはいいとして。……お前は遊んでいる余裕はないんじゃないのか？」

「なんでだ？　補習はもう終わっただろ？」
「冬休みの課題は、お前に関しては他の生徒よりも多いだろう。言っておくが、提出日を延ばしたりはしないからな」
「ぐ……いや、まあ確かに」
　古城は第四真祖として、多くの事件に心ならずも巻き込まれてきたが、同時に学生という立場でもある。義務教育ならばまだいいが、高等学校では出席日数が大きな問題となる。
　古城は、頑張ればそれなりの成績を出せる頭を持っているが、そもそも学校に行っていないとなれば強制的に留年となる。それを回避するために、補習をこなしていたのであり、それだけではまだ不安が残ると言うから冬季課題も多めに出されていたのである。
「いや、でも、なんとかなるだろ。今までも、何とかなったし」
「そもそも真面目に学校に出てきていればこんな面倒は起こらなかったのだがな」
「んなこと言ってもな……」
　古城も面倒とは思いながらも、学校には行かなければと思っているのだ。それが叶わないから、困っているのである。
「ところで、那月ちゃんもずいぶんと楽しんでるみたいだな」
「あん？」
「いや、その手のさ」
　那月の目つきが妙に鋭いので、古城は引きながら那月が持っているものを指差す。
　それはチョコバナナであった。露天の基本であろうそれを、那月は持っていた。
「ああ、これはアスタルテのものだ」
「アスタルテの？」
　那月の視線が動く。その先を追ってみれば、見慣れた少女が金魚すくいに熱を上げているではないか。
　当初は表情のなかったアスタルテだが、那月に引き取られ、古城たちと接している間に徐々に人間らしい感情を育ててきている。感性が独特なのは、仕方のないことではあるが、傍目から見れば人間と大

差ない。
結瞳がその隣に座り、アスタルテと競争するように金魚を追っている。いつの間にか、古城を那月に任せて自分たちは出店巡りを再開したらしい。
「それはそうと、獅子王機関の舞威姫が来ているようだな」
「舞威姫？」
古城は聞きなれない単語に首を傾げる。が、その後すぐにそれが紗矢華の肩書きだということを思い出した。
「煌坂が来てるって？」
「ああ。なんだ、まだ会っていないのか。お前たちのことだから、……ん？　転校生がいないな。珍しい。喧嘩でもしたか」
「してねえよ。姫柊にだって都合があるんだっての」
那月にまで、古城と雪菜がセットだと捉えられているのかと思うとげんなりとする古城であった。
「てか、なんで煌坂が来てるって知ってるんだよ」
「獅子王機関の人間が島に来れば伝わるに決まっているだろう。素手で魔族と戦える人間だぞ。事前連絡もなくゲートを通れるものか」
言われてれば、確かにその通りだ。
魔族と戦える攻魔師は、得意技能を有し、人間の常識を超えた身体能力や魔術を行使する。生まれ付いての才能も関わる分野であり、人手不足も相俟って未成年でも力のある者は免許を取得できるとされるが、当然力には相応の義務が発生する。
「じゃあ、春菜のことも伝わってるのか」
「春菜？」
「姫柊の姉貴だよ。今、アイツの家に泊まってるんだ」
春菜は今でこそ剣巫を退き、別の役職に就いていると言っていたものの、獅子王機関の人間であるという点に変わりはなく攻魔師資格を有している。ならば、那月にも話が向かうはずである。
「何だと？　転校生の姉？」
だが、那月は信じられないとばかりに表情を変えた。
「何だよ。別に、姫柊に姉貴がいてもおかしくはないだろ？」

「転校生に姉がいることくらい知っている。履歴書に書いてあったからな」
ふむ、と那月は思案するように扇を広げて口元を隠す。
「暁古城。今、転校生はその姉と一緒にいるのだな？」
「ああ、そうだよ。もうじき、合流する予定だけど」
そう言って、古城はスマートフォンを取り出す。そして、眉を顰めた。
「なんだ、アイツ。少し遅れるってか」
雪菜から送られてきたメールであった。人込みがあまりに酷く、予定していた合流時間に間に合わないという。サイレントモードにしていたために、メールが来ていたことに気付かなかった。
「今すぐ連絡を取れ」
「は？」
「今すぐにだ。転校生の姉とやらに話がある」
凄む那月の圧されて、古城は雪菜に電話をかけた。
那月に連絡が行っていないだけだろうに、妙に力強く命じてくる。とはいえ、文句を言ってもやぶへびになるだけだ。古城は大人しく那月に従うしかない。
「まったく、生徒使いの荒い教師だよ、まったく……」
しばらく待ったが、雪菜が応答することはなかった。
無味乾燥とした機会音声が、雪菜が電話に出られないことを告げる。
「あれ、どうしたんだ、アイツ」
画面を確認すると、姫柊雪菜の名前がきちんとある。番号を間違えたということではない。とすれば、雪菜が気付いていないか、電話に出られない状況にあるということである。
「那月ちゃん。電話、通じないみたいだわ」
「チッ、肝心なところで使えんやつだ」
露骨に舌打ちをして、那月は小さな魔法陣を手の平に展開した。
「何だ？」
「念話用の魔術だ。雑念が入るからしばらく話しかけるな」

頼られたかと思えば熱い手の平返しだ。
いつものことなので、特になんとも思わないが、それでよく教師をやっていられるなと毎回思う。攻魔師としての実力が桁外れすぎて、誰も文句をつけられないのではないか。
「何だってんだよ……」
頭を掻いて、古城は呟く。
那月が、妙に焦っているようでもあるが、その理由が掴めない。どうやら春菜にあるようだが、それはどういうことなのか。
「第四真祖。南宮教官（マスター）が何か？」
金魚すくいから戻ってきたアスタルテが、無機質な表情で尋ねてきた。手には二匹の金魚が入った袋が握られている。
「それが分かったら、苦労はしねえっての」
紛れもない古城の本心であった。
那月が何を考えているのか分からない。
「古城さん。見てください。五匹です。一回で五匹！」
結瞳が目を輝かせて金魚を見せてくる。なるほど、確かに五匹というのは中々できることではない。不器用な人間がやっても、一匹も取れず、結局お情けで一匹か二匹ほどの金魚がもらえるだけなのだから、結瞳は器用に掬ったのであろう。
それ故に、古城は結瞳を誉める。誉められた結瞳は嬉しそうに目を細めて喜んだ。
「ん、アスタルテ。お前、何すんだ？」
「再戦」
「は？」
アスタルテはメイド服のスカートを翻し、金魚すくいの的屋に向かう。結瞳に金魚の数で負けたのがよほど悔しかったのであろうか。
「アスタルテさん。不思議な人ですね」
「え、ああ。まあ、独特だよな」
結瞳がアスタルテの背中を興味深そうにして見送る。
「で、古城。あんた、また追試？」
「んなわけねえだろ。さすがに。春菜のことを聞かれたんだよ」

「春菜って、姫柊さんの、お姉さんよね？　それがどうしたの？」
「だから、知らねえって」
何度、同じ質問をされただろうか。浅葱への返答が多少ぞんざいになるのも仕方がないだろう。
「まあ、ここで補習の話がでないんなら、しばらくは大丈夫そうね」
「ああ、そういう考えもあるのか」
「冬休み課題はあるけどね」
浅葱のからかうような口調に古城は顔を歪める。新年を迎えようとするこの時にまで、何故勉学で頭を悩ませねばならないのか。
「ん？」
その時、不意に見たスマートフォンの画面に、着信履歴が表示されていた。三件。皆、同一人物からである。
「何よ？」
「煌坂から電話だ。ちょっと、出てくる」

古城は、人込みを避けて参道をはずれ、露天の後ろ側に回った。そこは、鎮守の森となっていて、松林が続く場所であるが、遊歩道が設置され、街灯もあるのでそれなりに明るい場所であった。
公園のような鎮守の森の中、古城は紗矢華に電話をかけ直した。
『暁古城！　今、どこにいるの!?』
ワンコールで紗矢華が電話に出た。ずっと、スマートフォンを握り続けていたのであろうか。
「どこって、神社だよ。んで、お前、今島に来てるんだってな」
『え、ど、どうして知っているのよ!?』
「那月ちゃんから聞いただけだよ。お前たちが島に入ると伝わる仕掛けになってるんだろ？」
『ああ、そういうこと』
電話の奥で納得したと安堵のため息を吐くのが分かった。
「煌坂。お前、なんで突然来たんだよ？」
『え、何？　わたしが来たらまずいっての？』
「ちげえよ。でも、姫柊も何も言ってなかったしな。いきなり来て

るって言われて驚いただけだ」
　雪菜と心底仲がいい紗矢華は、雪菜を溺愛している。それこそ、実の姉の春菜以上の執着を感じるほどである。それならば、雪菜に一報を入れてもいいはずだが、今回は何も音沙汰がなかった。
『それは、急に休みが入ったから。……この時期にこっちに渡れる航空券なかなか手に入らないし、慌ててね。飛行機の中からじゃ、連絡できないでしょ』
「そんなに、急にか？」
『今日の午後になって急にね。どういうわけか分かんないけど、ありがたく利用させてもらったわ』
　休みが取れてその場で絃神島に渡ると決める紗矢華の決断の早さに呆れる。
　本土から絃神島は、飛行機でも数時間はかかる。手続きなどを含めれば、先ほど降り立ったというのも、納得だ。
『それで、雪菜よ！　すぐに連絡取ろうとしたのに、全然繋がらないんだけど!?　どうして!?　着拒!?　わたし、雪菜に何かした!?　メールも戻ってくるし、どうなってんのよ!?』
「あー……まあ、姫柊と連絡取れないのは、こっちも同じでさ」
『何それ？　あんたも連絡取れないって。一緒にいるんじゃないの？』
「いいや。昼間に春菜と出かけたっきりだ。さっき、那月ちゃんに言われて電話をかけたけど、繋がらねえ」
『春菜って、春菜さん!?　雪菜のお姉さんの!?』
　紗矢華はよほど驚いたのか、声を大にした。
　雪菜と幼馴染の彼女は、春菜とも面識があるのであろう。
「ああ、なんか遊びに来てんだ」
『そんな、だって、あの人は……』
「春菜がどうしたってんだよ」
『春菜さん。しばらく潜入捜査で連絡が付かないはずよ。仕事が終わったって話も聞かないし、休暇が取れるような、そんな任務じゃないんだけど』

「はあ？　でもそんなこと一言も言ってなかったぞ。調停官とか言う仕事だって」
『それはこっちにも色々とあるのよ。でも、雪菜には危険な仕事に就いてるって言ってないはずよ。心配かけたくないって、前に会ったときに言ってたから』
　どうやら、春菜は調停官の仕事に就いていたわけではないらしい。しかも、雪菜にも教えずに、潜入捜査を行っていたというのだ。
「じゃあ、あの春菜は何なんだよ」
『知らないわよ。もしかしたら、仕事が終わってたのかもしれないけど、わたしは聞いてない』
　紗矢華の知らない春菜。そして、春菜と一緒にいる雪菜とは連絡が付かず、獅子王機関の人間が出入りすれば伝わるシステムでありながら、春菜の存在は気付かれていなかった。
　どうやら、春菜には古城の知らない何かがあるらしい。
『で、暁古城。神社のどこにいるの？　話に聞くと結構大きいらしいじゃない。神社』
「あ？　今は、参道の真ん中辺りだけど、また移動するからな。花火が見える位置を探して歩き回るはずだ。なんで、そんなこと聞くんだ？　今、姫柊はいねえぞ」
『あ、いや、ほら、どうせ、雪菜と後で合流するんでしょ？　だったら、わたしもそこに行けば雪菜に会えるじゃない？　……それとも、あれ、もしかして、迷惑だったりする？』
　焦ったような口調を一転させて、紗矢華は道に迷った仔犬のような声で古城に尋ねた。
「いや、迷惑なんてことはねーよ。姫柊も喜ぶだろ。春菜もいるしな」
『あー、うん。そう。じゃ、そっち行くから。また、連絡する』
　そう言って、紗矢華は通話を切った。
　嵐のような会話の後で、参道に戻ると神妙な顔をして待っていたのは那月であった。
「暁古城。転校生が見ていない隙に女を電話か。いいご身分だな」
「変な言い掛かりはよしてくれよ、那月ちゃん。別に煌坂と話したく

らい、何てことないだろ」
「まあ、そうだな。わたしは」
「わたしはって」
　ふと、反対方向を向けば浅葱と結瞳、そしてアスタルテが何か言いたそうな、それでいて諦めたような表情でこちらを見ている。
「さて、暁古城。お前が連中と騒動を起こす前に、こちらに協力してもらおう。藍羽もだ」
「はあ!?」
「え、な、なんでですかッ!?」
　古城だけの問題かと思っていた浅葱が驚いて声を上げる。
「緊急の案件だ。さっさと来い。リリスの小学生は、そこの保護者と一緒にいろ」
「えぇー、むぅ」
　抗議しようとした結瞳だが、相手が悪い。大人びた性格だから、なおさら敵にする者を選ぶ。大変不服だったが、結瞳は口を噤んで引き下がった。

□

　古城と浅葱が連れてこられたのは、社務所であった。
　真新しいのか、柱に使用されている木や床板の色が明るい。テーブルの上には、すでに起動しているデスクトップ型のパソコンが置かれており、棚には、業務で使用するための様々な道具を綺麗に並べられていた。
「で、こんなところに呼び出して、何があったんだよ」
　古城は、若干不機嫌になりながら尋ねた。
「結論から言うと、転校生の姉を捕縛する必要ができた」
「な、……はあ!?　なんで、そうなるんだよッ」
　古城は信じられないとばかりに怒鳴る。捕縛とはすなわち逮捕である。教師が出来の悪い生徒を連行するのとは訳が違う。
「姫柊春菜と言ったな。転校生の姉は」

「ああ。それが、どうしたってんだ」
「空港の入島履歴を調べさせたが、そんな名前はなかった。転校生の顔によく似ているというから、空港の監視カメラで確認したが、こちらにはきちんと映っていた。これが、何を意味しているか分かるな？」
「偽名を使ったってことですか？　姫柊さんのお姉さんが？」
　古城よりも先に答えたのは、浅葱であった。
　空港にいるのは確かなのに、名前がないとなれば、それ以外には考えられない。そして、搭乗手続きなどの時間と映像の時間を付き合わせれば、どの名を名乗ったのかはすぐに分かる。
「偽名って、何でまた」
「それを確認しなければならないから、捕まえねばならんと言ったのだ。お前とは繋がりがあるからな。もしかしたら、向こうから接触があるかもしれない」
「そういうことかよ」
　春菜が何かを企んでいる可能性がある。となれば、一緒にいる雪菜がどうしているのかが気になる。紗矢華からの連絡にも応じないとなると、一層危機感が募る。
「藍羽。そこのパソコンを使って、足取りを探れ。お前ならすぐに追えるだろう」
「え、ええッ!?　いや、できなくはないですけど、そんな、学生に犯罪を教唆していいんですかッ!?」
「緊急事態だ。やれ」
「は、はいッ」
　有無を言わさぬ迫力に、浅葱は背筋を正してパソコンに向かう。
「モグワイ。聞いてたわね。全力で、姫柊さんとそのお姉さんの居場所を調べるわよ」
『ケケ、さっさとしねえと、花火も見れねえかもしれねえな。あんだけ楽しみにしてたのによ』
「うっさい。さっさとする！」
　と、ＡＩに怒鳴りながら、浅葱はキーを叩く。

才能というには、あまりに常軌を逸した能力で、浅葱は瞬く間に絃神島中の監視カメラを掌握し、ＧＰＳにまで手を伸ばす。雪菜と春菜の一日の行動を調べるため、キャッシュカードの使用履歴なども参照する。
「いた。ブティックワードで服を買ってるみたい。うお、結構な額を買い込んでる」
「名義は？」
「もちろん、春菜さんの名義です」
那月の言葉に浅葱がてきぱきと答える。
浅葱に支配されたパソコンが映し出す複数の映像に、那月は目を通し、情報を取得していく。
「空港を抜けて気を緩めたか？　まあいい、そこから先は追えるな？」
「はい」
浅葱の手は止まらない。複数のルートから同時にハッキングをしていく。浅葱一人いるだけで、世のプログラマーの大半は叩き潰されるであろう。
「姫柊さんのスマホのＧＰＳはここで途切れてますね」
浅葱の手が止まる。
「人工島北区（アイランドノース）の第三埠頭近くか。藍羽。後は、監視カメラの記録映像だ。ＧＰＳが途切れた時間に、その付近に連中が映っているかどうか調べろ」
「もうやってますよ」
そして、パソコンに出たのは、第三埠頭付近の監視カメラの映像である。複数の画面が同時に表示されるので、慣れていないとどこに誰が映っているのか、探すだけでも一苦労である。ただ、時間ははっきりと分かっているし、雪菜はギグケースを担いでいるのだ。見つけるのは難しくなかった。
「なんでアイツ。あんなところに行ったんだよ」
「お姉さんが何か言ったってことなんでしょうけどね。……本当に埠頭のほうに歩いていくわね」
雪菜と春菜が連れ立って、歩いている。

周囲にはコンテナが立ち並び、クレーンや大型の貿易船がいくつも並んでいる。商船を専門に受け容れる港なのである。
雪菜と春菜はなにやら話しながら、コンテナの間を抜けて海に出る。コンクリートに固められた港には、自然の趣など何もない。無機質な船とコンテナだけのその場所に、少女が二人だけである。
そこに、コンテナの間から複数の人影が躍り出てきた。雪菜と春菜を瞬く間に取り囲み、そして、アサルトライフルを向けた。
「姫柊ッ!?」
「な、何よこれッ!?」
古城が叫び、浅葱は悲鳴を挙げる。そして、那月も不快の念を隠しきれずに眉根を寄せた。
その後、監視カメラの映像に映っていたのは、武装集団に単身立ち向かう雪菜の姿であった。

その六

「姉さん！　どういうこと！」
　雪菜が叫んだ。
　彼女の周囲には、武装した兵士がいる。その数は一〇。すべてが、アラルトライフルの銃口を雪菜に向けている。太陽はすでに没し、埠頭には満足な灯りもない。月明かりと点滅する僅かな外灯が、この場を照らしている。
　雪菜に睨みつけられた春菜は泰然として、その叫びを受け流した。
「春菜君。どうやら、うまく行ったようだな」
「ええ、なんとか」
　狼に類似する顔の獣人は、屈強さを感じさせながらも丁寧な言葉遣いで春菜に話しかけた。
　立ち位置からして、武装集団の頭目と思われる人物である。
　その獣人の問いに平坦な口調で春菜は返す。
　その声音には、一切の感情が認められなかった。
　雪菜は思わず背筋を震わせた。何が起こっているのか皆目検討もつかないが、春菜がこの武装集団と繋がって雪菜をここに連れ込んだというのは理解できた。目的は不明で所属も不明。ただ、春菜が獅子王機関を裏切っていることだけは、明確な事実として雪菜を打ちのめした。
「うむ。話には聞いていたが、雪菜君といったかね。なるほど、春菜君によく似ている。さすがは姉妹といったところか。血の繋がりというのは、実にすばらしいものだな」
「ありがとうございます。ルドルフ様」
　春菜の口調は相変わらず無機的だ。
　かつての、陽光のような姉の姿はそこにはなく、機械のような冷淡な存在として雪菜の前に佇んでいる。
「姉さん。いったい、どうして！　姉さん！」
　雪菜の問いかけに、春菜はゆっくりと振り返って、小さく笑んだ。
「どうもこうも、見ての通りよ、雪菜」

「見ての通りって」
「あの方が、今のわたしの上司……〝黒懺会〟幹部のルドルフ様」
「〝黒懺会〟!? 過激派テログループの!?」
〝黒懺会〟は、昨今世の中を騒がせているテロ集団だ。戦争介入や要人暗殺などを手がけ、組織の規模を拡大してきた。明確な思想は不明で、魔族に限らず、人間にも会員がいるとされている。テログループの最大手であった〝黒死皇派〟が、獣人優位主義を掲げていたのに対して、〝黒懺会〟はそういった種族の垣根が低い。そうしたた下地があったために、〝黒死皇派〟の勢力が縮小していくにつれて、その版図を蚕食する形で勢力を伸ばすことができたのである。
「ただいま紹介に預かりいました。〝黒懺会〟のルドルフです。そして、これからのあなたの上司でもあります。以後お見知りおきを」
「どういうことですか……?」
すでに雪菜の雪霞狼はいつでもルドルフを貫けるように穂先をその身体に向けている。
相手は獣人。基本となる身体能力は雪菜を上回って余りあるが、剣巫として訓練を積んだ雪菜であれば、大抵の獣人はその刃の前に倒れ伏すことになる。
それを分かっているのかいないのか、ルドルフは余裕を崩さない。
「ふふふ、なるほど。この状況で恐れず槍を握りなおしますか。さすがは、春菜君の妹。その若さで第四真祖の監視者に選ばれるだけのことはありますね」
伝説とされた第四真祖の存在を知っていることについては、春菜が敵に渡った今驚くに値しない。
「質問しているのは、わたしです」
「君の命を握っているのは私ですよ、雪菜君」
ルドルフの部下が自分たちの存在を忘れられては困るとばかりに銃口を煌かせる。
四方からの十字射撃に曝されてはさすがの雪菜でも蜂の巣にされる可能性が高い。
「とはいえ、その質問には答えてあげましょう。できれば、あなたには

自分の意思でこちらに来ていただきたいですしね」
と、言いながらルドルフは狼の顔から人面に戻した。膨らんでいた身体が萎み、身長二メートルほどの人間の男性の姿を取った。
「我々は言うなれば傭兵集団です。任務を請負い、駒を戦場に派遣して対象を討つ。つまり、戦争ビジネスを行う会社というわけですね。ですので、優秀な戦士は喉から手が出るほど欲しい。君のような外見のよい少女というのは、さらに価値が跳ね上がるのですよ。要人暗殺に、これほど優れた道具はありませんからね」
雪菜を仲間に引き入れるために、わざわざ絃神島にやってきたというのか。
春菜がそこにいるということもそうだが、彼らが武装集団を率いて島内に侵入していたというのが驚きだ。
「わたしが、獅子王機関を抜けてそのような仕事をすると思っているのですか？」
ルドルフの口にしたビジネスとやらには、まったく共感するところがない。
所詮は人殺しの集団に過ぎず、世を混乱させる悪である。雪菜の嫌悪するところだ。
「荒事は避けたいので、是非あなた自身で私の手を取ってもらいたいのですが、やはり叶いませんか」
「当然です」
「ふむ」
武器を向けられても物怖じすることなく対峙する雪菜を見て、ルドルフは苛立つ様子もなく微笑んで見せた。
「恐怖を押さえつける強い心は戦士たるに相応しい。……ふむ、もしも特区警備隊（アイランド・ガード）を頼みとしているのかもしれませんが、彼らはこちらには来れませんよ。今頃は、島の反対側をシーサーペントの群れが襲っている頃合です」
「なッ!?」
シーサーペントは下級の海棲魔獣だが、身体が大きく肉食で獰猛な生態から、時として船を襲撃して沈めるなどの被害を出すこともある

危険な種である。これの群れを沿岸部に集結させたとなれば、被害を抑えるために、島の軍事力がそちらに裂かれてしまう。こちらで多少の騒ぎが起きても、対応が遅れるに違いない。
「どうやって、そんなことを」
「何、こちらには夢魔の会員がいるのでね。彼女に手を貸していただきました」
雪菜は内心で歯噛みしながら、リリスの転生体となった少女を思い出す。彼女の力は、神話の怪物であるリヴァイアサンを支配するほど強力なものであった。事実上最強の夢魔である彼女には及ばずとも、夢魔というだけで魔獣に対して一定の支配力を及ぼせるのは、証明されている。
雪菜は視界の端で姉を捉える。
先ほどから一切口を開かない姉は、何故このような外道の手を取ったのであろうか。
気になることは多いが、まずはここを切り抜けるのが先決だ。相手は法を犯してこの島に侵入した密入国者であり、国際犯罪者である。
この港に逃亡の足を用意しているのであろうが、それでも騒ぎを起こして特区警備隊（アイランド・ガード）に見つかるのは避けたいはずだ。
しかし、相手は銃を手にした兵士一〇人と能力不明の獣人。そして、姉の計一二人である。数的不利は否めない。魔術の類を使用してくる相手ならばともなく、雪霞狼の結界は銃弾には効果を発揮しない。
「命が惜しければ投降してください。雪菜君。私も、貴重な人材を失いたくないのでね」
雪菜に目を付けたのは、春菜という手駒を手に入れたからであろう。春菜がどこまで相手の深いところにまで取り込まれているか分からないが、元剣巫というだけで隔絶した戦闘力がある。その力を暗殺などに利用すれば、仕留められない獲物はいない。妹の雪菜を手中に収めようとするのも、理屈としては理解できる。春菜がいれば、雪菜を罠にかけるのも容易い。
そうして、雪菜がこの場に現れた時点で、雪菜は九割方詰んでいた。

四方を敵に囲まれて、頼みとなるのは槍とこの身に積み上げた武技のみである。
今までにないほど、危機的な状況だ。
これまでは少なからず仲間がいた。古城がいれば、最終的に彼に任せれば事件は解決すると半ば信じていたこともあり、戦いに赴くのに恐怖を感じることさえなかった。
しかし、この状況はこれまでとはまったく異なる次元のもので、恐らくはこのような状況こそが、煌坂紗矢華らが潜り抜けてきた修羅場なのであろう。そう考えれば、雪菜は相当恵まれた環境にいたようだ。
雪菜は心を氷のように冷たくして、冷厳たる面持ちで敵と自分の位置関係を整理する。
半円状に囲まれた状況。ルドルフとその隣の春菜までの距離はおよそ一〇メートルで、展開した一〇人の武装兵はルドルフを始点としてVの字型に隊列を組んで雪菜を左右から挟みこんでいる。
逃げ場はない。ならば、倒すかない。
雪菜はゆっくりと息を吸って、
「ハッ！」
気合と共に雪霞狼を右側の兵に投じた。鋭い槍の投撃は、兵の一人の銃を軽々と斬り裂いて、地面に落ちる。
手から落ちた銃が地面と触れ合って、金属音を立てる前に、雪菜はその反対側にいた兵の顔面に膝蹴りを打ち込んでいた。
槍の投撃によって虚を突かれた兵は、唖然としてその光景に見入る。
魔族ですらない人間の少女が、助走もなしに数メートルもの距離を跳ぼうなどとは思うまい。しかし、現実として、それは起こったのである。
「あ、足を撃て！」
誰かが叫んだ。同時に、激しい銃撃が行われる。雪菜は素早く銃撃の死角に滑り込む。
それは、敵の陰。

今、雪菜は一瞬のうちに二人を無力化したが、この時点で囲みの外に飛び出している。よって、奥に並んだ敵からすれば、前面に並んだ敵五人が陰となって雪菜を銃撃できない。精密射撃など期待できない全自動射撃をしようものなら、味方が蜂の巣になってしまう。

「若雷！」

強烈な掌底が身近な敵兵の腹部を撃ち抜き、その身体を反対側にまで吹き飛ばす。奥の二人を纏めて跳ね飛ばすことに成功すると、雪菜は左手を引く。その動きに合せて、地面に転がっていた雪霞狼が飛んできて、雪菜の手に収まった。投じる瞬間に、柄に糸を括りつけていたのである。獣人の動体視力を以てしても、この早業は見抜けまい。銃さえ無効化すれば、相手はザコも同然である。まして、相手は雪菜を殺害できない。どうしても、正確に射撃しようとするので、行動が遅れる。猫のように俊敏に移動し、虎のように強力な一撃を放つ雪菜に、彼らは対応できない。

戦闘時間は一分にも満たず、戦場には一滴の血も流れなかった。

ただ、骨を砕かれて悶絶する兵士と、槍を構えて平然としている雪菜の姿がそこにはあった。

「フハハハハハハッ、これはすばらしい。春菜君が絶賛するのも分かります。剣巫の力を甘く見ていたわけではありませんがね。私の兵を一方的に、しかも殺さずに打ちのめすとは！　ますます、その力が欲しくなりましたよ」

「あなたに屈服することはありません。大人しく投降してください。姉さんも、そんな人とは縁を切って、然るべき処置を受けてください」

強い意思を宿した瞳で、春菜を見る。

残る敵はルドルフと春菜だけだ。

「ルドルフ様。ここは」

「ええ、そうですね。獅子王機関で培ったその力、是非私に見せていただきましょうか」

春菜がルドルフを庇うように雪菜の前に出る。

やはり、こうなってしまうのかと雪菜は諦観とともに事態を受け容れる。

「姉さん。本当に、どうして……！」
「語る必要はないわ。あなたも、すぐに理解するんだもの。……ルドルフ様にお仕えし、その覇業の一翼を担うすばらしさをね」
春菜の言葉に嘘は感じられない。
少なくとも、現状ではこれが心からの言葉であると判断せざるを得ない。何がそこまで彼女を変えてしまったのかは未だに分からないままだが、それを追及する余裕はない。
「姉さん。……く、分かった。とにかく、詳しい事情を、聞かせてもらうから！」

□

島の反対側から重厚な爆発音が聞こえてくる。
夢魔の部下が洗脳し、暴れまわらせているシーサーペントは、一〇〇を超える。
あの部下の能力は、海棲魔獣にしか効果を発揮しないものの、一点特化したことから大量の魔獣を同時に暴れさせるという離れ業を行ってみせる。撹乱にはこれほど都合のいい能力はない。
「おや、雨ですか」
ポツポツと空から雫が落ちてくる。
天気予報では夜から朝にかけては曇りのはずだったが、外れたらしい。
「ルドルフ様。傘を。折りたたみで恐縮ですが」
そこに、春菜が折り畳み傘を広げて差し出した。
「ああ、気が利きますね」
ルドルフはその傘を受け取って、差した。
僅かだった雨は、瞬く間に豪雨へと変化した。
「そういえば、ここは南国でしたね。あるいは、降水量もほかよりも多いのかもしれません」
ルドルフは南の国には詳しくない。熱帯雨林などは、高温多湿でスコールが生じるというが、この島ではどうなのだろうか。

「ああ、それと。血の繋がった妹を引き摺るのはよくありません。傷は少ないほうが商品価値が高まるのですからね」
ルドルフは冷え切った目で春菜に言った。それから、視線を下に降ろす。
気絶した雪菜がそこにいた。
春菜の右手が雪菜の襟を握り締めていて、雪菜は完全に脱力して春菜に身体を預けていた。
「回収は終了ですね。では、目的も果たしましたし、出航しましょうか。ついでに、船内で脳の洗浄を行ってしまいましょう」
アジトに戻るまで数日はかかる。
表向きは商船として航行するが、途中でどのような事態になるか分からない。雪菜を味方にしてしまえば、春菜と共に一級の護衛として活用できる。
獅子王機関の剣巫を二人も手に入れた。
組織の中での発言力も立場も、これで確固たるものとなるだろう。
この二人の商品価値は計り知れない。姉妹であるというだけで付加価値が付く上に、獅子王機関の剣巫という出自で、しかも見目麗しい。傭兵としてだけでなく、その他様々な用途で稼いでくれることだろう。大きな危険を冒してでも、この島にやってきた甲斐があったというものだ。
ルドルフはほくそ笑んでその場を後にした。

その七

「なんだよ、これはッ」
古城は動転のあまりに叫び、テーブルを殴りつける。
雪菜が敵の手に落ちた場面は、監視カメラに鮮明に映し出されていた。
「音声は拾えないか」
「監視カメラは映像だけですから」
「フン、そうか」
那月は、扇で口元を隠し、思案げな表情をする。
「那月ちゃん。すぐに、俺を埠頭まで届けてくれ！」
「何？」
「見てただろッ。姫柊を助けに行くんだよ！」
古城は牙をむいて怒りを露にする。
雪菜の身に危険が降り注いだ。それが、腹立たしくて仕方がない。
「相手は武装集団だ。お前とは相性が悪いだろう。特区警備隊（アイランドガード）と沿岸警備隊（コーストガード）に救援を要請するから、お前たちは……」
そこで、地響きにも似た大音声が響き渡った。
「な、何……花火？　もう？」
浅葱が困惑した顔で窓の外を見る。しかし、夜空に花が咲いたわけではない。神社の境内に集まった参拝客も、何事かと不審げな表情だ。
「今のは」
古城や那月には、それが花火によるものではないとすぐに理解できていた。
それは、音に魔力が込められていたからである。
眷獣や魔術を使う二人には、魔力の有無が分かる。魔術に疎い古城ですら理解できる強力な魔力が神社を揺るがした。
「西のほうからだな」
那月が視線を険しくする。
高台に位置するこの神社からしても、ビル群のさらに奥からの発生

源までは見えない。この状況下で、真っ先に動いたのは浅葱であった。
軽快にキーを叩き、再び監視カメラを乗っ取る。今回は、西側に設置されているカメラを手当たり次第に奪い取った。
結果、強力な魔力の発生源はすぐに見つかった。隠れるつもりが端からなかったからであるし、そうした智恵もないのであろう。
「ちょ、これ、シーサーペント？　ちょっと、多すぎない!?」
浅葱が悲鳴を上げる。
海を埋め尽くさんとするほどの、巨大な蛇の群れであった。魔獣の中でも、肉食で船を襲撃することもあるとされる獰猛な種である。通常群れで行動することはないが、今、絃神島の西部を襲撃しているシーサーペントは数えるのも億劫になるほどの大群であった。
「どうなってるんだ、これ!?」
「まず、間違いなく陽動だな。よほど転校生に執心していると見える」
「陽動って」
あまりにも単純な戦術であるが、シーサーペントの群れは脅威である。人工島管理公社も、少なからぬ戦力を、西海岸に割かねばならなくなる。
「それだけではないな。参拝客の避難誘導も必要になる。この状況で、転校生にまで戦力を割くのは難しいか」
年末ということで、多くの人が外に出ている。仮にシーサーペントが上陸してしまった場合の被害は計り知れない。そのため、戦力はシーサーペントの上陸阻止のために、配置しなければならず、また多人数の避難のために、道路の確保などをする必要ができる。となれば、雪菜の奪還に人数が割けなくなるのである。
「はあ!?　どうするんだよ、姫柊は!?」
「お前が行くんだろう。わたしも、現場にかかりきりになる。まったく、面倒なことだ」
忌々しそうに、那月は吐き捨てる。
強大な吸血鬼という存在がある以上は、戦いを決めるのが、数ということにはならないが、それでもシーサーペントの大群は絃神島の戦

力を以てしても容易には駆逐できない。被害を最小限に抑えるには、那月もまた現場で陣頭指揮に当たらなければならないのである。
「獅子王機関の舞威姫がいるだろう。あれと合流すれば、それなりの戦力になるはずだ」
「煌坂か。分かった、那月ちゃん。すぐに連絡する」

□

雪菜が危難に陥っているとき、紗矢華はタクシーの中に閉じ込められていた。
渋滞が酷く、前に進めないのである。
魔力の波が襲い掛かってきたのはそのときである。
全身の細胞を刺すような大気の震え。
〝魔族特区〟とはいえ、これほど大きな魔力の動きが発生することは希だ。それこそ、第四真祖が眷獣を召喚したときくらいのものではないか。
よって、紗矢華はすぐに異変を察し、タクシーを出て近くのビルに駆け込もうとした。高いところから状況を観察しようとしたのである。ちょうど、そこはビル群で、一際高い商業ビルが立ち並んでいた。なんとかして屋上に出れば、島内を一望できるのではないかと思ったのである。
古城から電話がかかってきたのは、そのときである。
「暁古城？」
『煌坂。お前、今どこにいる？』
妙に切羽詰ったような古城の声に、紗矢華は緊急事態の匂いを嗅ぎ取った。魔力の異常な動きもある。意識が、戦闘状態のそれに変化する。
「わたしは今、あんたのいる神社から二キロくらい南の市丸量販店の中よ。もうすぐ、屋上に出る」
『なんで、そんなところに』
「あんたは、魔力の動きを感じなかった？　高いところからなら原因

が見えるかと思って」
『それなら、原因は分かってる。シーサーペントの群れが西側の沿岸部を襲ってるんだ』
紗矢華は耳を疑った。
「なんで、そんなこと。いや、シーサーペント？」
『ああ。それで、お前に協力してもらいたいんだ。姫柊がまずいことになってる』
「姫、雪菜がッ!? ちょっと、それどういうことよ!!」
雪菜がまずいと聞いて、紗矢華は一気に逆上するようにスマートフォンに怒鳴った。
紗矢華にとって雪菜は何よりも大切な友人で妹分である。その気持ちは溺愛と言っても過言ではない。
しかし、紗矢華は古城から満足のいく回答を得られなかった。
説明を求める紗矢華の足元に突然魔法陣が展開されたからだ。ぎょっとして身を固くする紗矢華は、抵抗することができなかった。
紫色に輝く魔法陣が、紗矢華の身体を飲み込んでしまったのである。

気がつけば紗矢華は見知らぬ場所にいた。
とはいえ、彼女とて元は巫女としての修行を積んだことがある身なので、そこが社務所と呼ばれる神社の一部であると瞬時に理解できた。
そして、目の前に古城がいることから、これが那月による転移魔術であると分かる。
「煌坂……」
「暁古城！ 雪、雪、ゆ、ゆご、雪菜が、あ、ぶ、危ないって、どういうことッ!!」
古城の姿を認めたとき、真っ先に紗矢華は古城に掴みかかった。
古城の襟首を鷲掴みにして、吊り上げるようにし、さらに前後に振り回す。
「ま、まて。説明、するから、待て」

「待て？　これが待っていられるかッ。あの娘が危ない目にあってるなら、今すぐにでも助けに行かなきゃならないでしょうがッ」
唾を飛ばさんという勢いで、紗矢華は怒鳴る。
ガクガクと頭を揺すられて古城は答えるに答えられない。
その紗矢華のポニーテールを、那月が引っ張った。
「うぐ」
「騒がしいヤツだ。さっさと説明して、埠頭に飛ばすぞ」
古城から紗矢華を引き剥がした那月が、浅葱の表示したパソコンの映像を交えて紗矢華に雪菜の現状を伝える。
春菜が敵に関わっていると聞いたときには紗矢華も半信半疑であったが、実際に雪菜と春菜の戦闘を見て、顔色を蒼白にした。
「とにかく、俺はすぐにでも姫柊を助けに行く。だから、お前にも手伝って欲しい」
「当たり前でしょ。雪菜に手を出した馬鹿共。一人残らず叩き潰してやるわ」
紗矢華もまた、キーボードケースから己の武器を取り出して、すでに戦う気まんまんといった様子である。
「古城。無理だけはしないでよ」
浅葱の心配する声に、古城は「おう」とだけ答えて、紗矢華と共に魔法陣が展開する。
「ではな、暁古城。シーサーペントがある程度片付いたら増援を送ってやる」
「それまでに片付けてやるさ」
軽口を叩きながら、古城と紗矢華は魔法陣の中に消えた。
雪菜が拉致された商船の近く、第三埠頭の入口に、転移したのである。

□

ルドルフが絃神島にやってくる際に使用したのは、自らが経営する貿易会社の商船である。無論、その会社もまた〝黒懺会〟の資金源で

あることに疑いはない。中規模の貿易会社であるから、大企業ほどの知名度もなく、そのために目立ちにくい。絃神島とも、健全な付き合いを続けてきたので、疑われる可能性は低かった。
大型の商船の中の隠し部屋がある。
薄暗い部屋は手術室のようにも、牢屋のようにも見える。雪菜が監禁されていたのは、この部屋である。
簡素なアルミ製のベッドに寝かされた雪菜の意識が戻るのに、そう時間はかからなかった。
「ぐ、ここは……」
雪菜は身体を起こそうとして、手足が固定されていることに気付いた。
「な、く……これは」
手首と足首に、古代の罪人のように嵌められた枷が、雪菜の力を封じている。霊力が著しく減少している、というよりは押さえ込まれているといったほうが正しいか。如何に雪菜が同世代と隔絶した身体能力を有していても、人間の限界を超えるものではない。霊力を封じられてしまえば、素の筋力で枷を破壊できるほどの力はない。
「おや、もう目が醒めたのですか。思いのほか早い」
人間の姿をしたルドルフが、雪菜の顔を覗き込んだ。
雪菜は、ルドルフをキッと睨み付ける。
「くく、怖い怖い。その反骨心は邪魔ですねぇ。まあ、今のうちに精一杯反発してください。すぐに、そうも言っていられなくなりますからね」
下卑た視線で、雪菜を見下ろすルドルフの手には、雪菜に見せ付けるように注射器が握られていた。
「わたしを、どうするつもりですか」
「あなたには、春菜君と共に〝黒懺会〟の看板娘になっていただきたくてね。大丈夫。春菜君のときには、抵抗力が予想以上に強くて調整にずいぶんと苦労しましたからね。私は過去から学ぶ獣人なのですよ」
春菜君のときには……？

それはつまり、春菜もまた、ルドルフの手に掛かっていたということである。
「あなたは、姉さんに!!」
「ミイラ取りがミイラにというヤツですか。まあ、拾い物でしたよ、彼女はね。それに、今では幸せそうでしょう？　そうなるように、調整したんですよ」
「この、外道……！」
ルドルフの持つ注射器には、透明な液体が入っている。その正体は雪菜には分からないものの、よくないものだというのは見て分かる。
「恐怖しましたね。よいことです。ですが、その感情すらも、すぐに悦びに変わります。私の呪詛は、感情に作用するものでしてね。剣巫の抵抗力には弾かれる程度の弱いものですが、それでも薬物で前後不覚に陥れれば十分に機能するのです」
そして、一度抵抗の意思を失えば、その後はどうにもならない。戦おうとする意思すら持てないのでは、自らその支配から脱することはないからだ。
ルドルフの姿が獣のそれに変わる。
灰色の毛をした狼のような顔に、屈強な肉体。伸縮性のある衣服だったのだろう。破れることはなかったが、その分だけ筋肉が浮き上がるほどに身体に張り付いていた。
雪菜は必死になって、ルドルフから逃れようと身体を捩るが、脱出することはできない。霊能者や魔族を封じるための特殊な拘束具が雪菜の戦闘力を著しく低下させているからだ。今の雪菜では獣人のルドルフの力には太刀打ちできない。簡単に押さえつけられてしまう。
「離してッ！」
「大人しくしていただきましょうか。下手をして刺すところがずれたら、大変なことになりますからね」
雪菜の腕を押さえつけたルドルフが、注射器の針を刺す。
乱暴な施術で強い痛みが生じ、雪菜は身体を強張らせた。
「ぐぅ、あああああああッ!?」

薬剤を打たれたところが酷く熱い。掻き毟りたくなるような激しい熱が、腕を侵食し、さらに身体にまで到達する。恐怖と絶望が、瞬く間にどうでもよくなってくる。不快に思うという感情が消失し、身体が宙に浮き上がるかのような多幸感が押し寄せてくる。

かつてない感覚に雪菜の視界が真っ白に染まり、何も分からなくなった。

雪菜の調整が一段落して、ルドルフは部屋を後にした。

第一段階は終了した。次は、第二段階。呪詛により、善悪や嫌悪の感情を乱し、物事の優先順位をルドルフにとって都合のいいように改竄する作業が待っている。薬が全身に回るのを待って、首筋から呪詛を注入すれば終わりだ。春菜から得た実験データから、雪菜にはそれほど時間をかけることなく洗脳を終えられると踏んでいる。

「ルドルフ様」

「春菜君。何故、出航していないのですか？　もう、出航時刻は過ぎているはずですよ」

「それが、人工島管理公社から出港停止命令が出ているとのことです。詳しくは船長に確認していただきたいのですが、今の段階ではいつ許可が下りるか分かりません」

ルドルフ自身が表立って行動したことはないので、国際指名手配もされていないのだが、絃神島で騒ぎを起こした以上は、追われる身となろう。その危険を冒して有能な人材を手に入れたのは、組織の中での発言力を高めるためだ。

元剣巫を二人も侍らせているとなれば、それだけでも箔がつく。会社一つを潰し、犯罪の表舞台に立ってでも、手に入れる価値があると判断したのである。

とはいえ、ここは孤島である。

船を止められては脱出できずに捕らえられる。そうなる前に、ヘリで本土に渡れる程度の距離まで力づくで脱出する必要があった。

「三十分経って許可が下りなければ強行突破しなさい。所詮はダミー会社の一つが潰れるだけ。それよりも、こんなところで掴まってはす

べてが水の泡です」
冷徹に命令を下す。
まだ、ルドルフの悪事が勘付かれたと分かったわけではない。余計なトラブルを抱えるくらいなら、多少は様子を見てもいい。人工島管理公社の戦力もシーサーペントに向かっており、こちらは手薄だ。密輸した武器を合わせれば、十二分に突破可能だと判断した。
「ルドルフ様」
春菜に背を向けて、その場を立ち去ろうとしたルドルフを、春菜が呼び止めた。
「なんです？」
「魔術の気配があります。埠頭の傍。おそらくは転移魔術かと。……数は、二」
鋭い視線で、春菜は見えないはずのものを見る。警戒のために敷いた春菜の結界が、その内側に入り込んだ異物を捉えたのである。
「なるほど、強行突破を検討しなければならないわけですか」
予想以上に敵の動きが早い。
あるいは第四真祖が単独で乗り込んできたか。雪菜のスマートフォンを破壊し、ＧＰＳによる追跡もできないようにしていたはずだが、どうやってこの場を知ったのだろうか。
シーサーペントの襲撃を早い段階から雪菜の失踪と結びつけた者がいる。
おそらくは雪菜の身近な者による仕業であろう。そう考えれば接近してくるのが第四真祖である可能性が極めて高くなる。
「迎撃しなさい。殺さずとも動けないようにすれば、我々が安全圏に逃れるまでの時間は稼げるでしょう」
吸血鬼の真祖でも瞬間再生ができるわけではない。ルドルフには真祖を殺しきる手札はないものの、心臓を潰せばしばらく動けなくすることくらいできる。
春菜と部下たちに迎撃命令を下し、ルドルフは雪菜の調整を早めることにした。

□

古城と紗矢華が送り込まれたのはコンテナの集積場であった。無数のコンテナが積み上げられたそこを抜ければ、すぐに雪菜が連れ込まれた商船に辿り着ける。

「春菜のヤツ。雪菜とあんなに仲良かったのに突然どうしたってんだ」

古城は今でも信じられない気持ちでいっぱいだ。

それは春菜が雪菜を心底大切に思っているというのが、言動を通して伝わってきたからだ。

「春菜さんについては、なんとも言えないけど。もしかしたら、洗脳されているのかもしれないわ」

コンテナに背をつけて膝立ちになり、静かに商船の様子を窺う紗矢華が呟いた。

「洗脳だって？　この前のお前みたいにか？」

「あれのことは忘れなさいよッ」

以前、紗矢華は夢魔の精神支配を利用した魔術によって一時的に敵に回っていたことがあった。それは古城の奮闘によってなんとか解決したものの、紗矢華は古城や雪菜に迷惑をかけてしまった挙句古城に血を吸われたということで黒歴史認定しているのである。

「そうでも考えなきゃ春菜さんが雪菜に手を挙げるなんて考えられないもの。それに、……そうだとすれば、雪菜を攫った理由も分かる」

紗矢華は吐き気すらも催す想像をしてしまい、また、それが現実味を帯びつつある事態に恐慌に陥りそうになる。

男に支配されるというのは、紗矢華にとっておぞましいというのを通り越した、恐怖と嫌悪の対象なのである。それが雪菜に降りかかろうとしていると思えば、こんなところで息を潜めている時間すらも惜しい。

しかし、相手は武装集団である。有象無象が何人いたところで敵ではないが、春菜がいるとなれば話は別である。

「暁古城」
「なんだ……て、おい!?」
古城の前で紗矢華がブラウスの第二ボタンまでを外して首筋を見せてきたのである。
「ほら、早くしなさいよ」
「早くって、お前な……」
突然のことに驚きながらも、紗矢華の意図を悟る。
古城は吸血鬼である。それも世界最強の第四真祖である。ところが、古城自身、まだ未熟で眷獣の制御もままならない身なので、本来の力を全力で振るうには、誰かから血を吸わなければならない。
しかし、同時に古城は好きなときに吸血できるわけではない。
吸血鬼の吸血衝動は、性的興奮によって引き起こされるものであり、それがなければ血を吸うことができないのである。
「ああ、もう!」
紗矢華は顔を紅くしながら、古城の頭を自分の胸に掻き抱いた。
古城は絶句しながらも、紗矢華の豊満な胸部の感覚に思わず呻く。柔らかい上に良い匂いがするのだ。吸血鬼となって五感が人間を上回っている今、紗矢華が発する女の匂いにくらりときてしまうのも無理のない話であった。
紗矢華の拘束を抜けた古城は、紗矢華に一言物申すべく口を開く。
「お前、こんなことして」
「わたしだって恥ずかしいわよ。でも、雪菜が危ないんだから、形振り構っていられないわよ」
小声で口論するが、古城が臆しているのに対して紗矢華は言葉通り後先を考えていない。
「あんただって、雪菜を助けたいんでしょ。だったら、一思いに吸いなさいよ」
雪菜を助けるという強い意思が、古城を動かした。
ここまでされて、何もしないというのはただのへたれだ。暁古城の緊急時における爆発的な行動力からすれば、恥ずかしがって血を吸わないということはありえなかった。

「分かったよ」
紗矢華の覚悟を見て、古城は腹を決めた。
そして、紗矢華を抱き寄せて、その首筋に牙を突き立てたのであった。

開戦の狼煙を上げたのは、紗矢華だった。
自慢の弓六式重装降魔弓（デア・フライシュッツ）。煌華麟という銘を持つそれは、人間では発生不可能な大規模呪術を放つ砲台として機能する。
打ち上げられた鏑矢が、甲高い音を発して呪詛をばら撒いた。上空ではじけた紫色の光は、リンプンのように周囲に広がっていく。
「行くわよ、暁古城。これで、半径五百メートル以内の人間は眠ったはず！」
紗矢華が先陣を切って飛び出した。
鎮圧呪術は、本来は魔獣に対して使用するような強烈な代物だ。だが、今回は事が事だけに、後遺症などの問題を度外視して効果的なものを選んだ。
この術ならば、魔力に耐性のない人間は一撃で昏倒させられる。狙撃手の存在も警戒していたが、纏めて鎮圧したはずだ。
「まさか、いきなりこんな危ない術を飛ばしてくるなんて」
声が響き、紗矢華は足を止めた。
次いで、古城が紗矢華の隣に並ぶ。
二人の前に、見慣れた少女とそっくりの顔が現れた。商船の甲板から飛び降りた春菜は、何事もなく古城と紗矢華の前に立ちふさがったのである。
「春菜さん」
紗矢華の呪詛は強力だが、一定の抵抗力があれば、耐えることができる。敵勢力の大多数を無力化したものの、春菜という強敵は、どうあっても対決しなければならないらしい。
「紗矢華。お転婆は相変わらずのようですね」
春菜の立姿に隙はない。
雪菜を圧倒した実力者であり、古城と紗矢華の二人掛りだからと

いって、楽に勝てるなどというのはありえない。
「春菜さん。雪菜と一緒に、あなたも連れて帰りますから」
「無理ですね。それは。――――それに、あなたがわたしたちと一緒に来ることになるかもしれませんよ」
くすりと笑った春菜は右手を一閃する。
魔力が吹き上がり、春菜の右手に蛇のような何かが絡みついた。
それは、黒い炎のような魔力を帯びた、鎖だった。
「四式魔導捕縛鎖（ケッテ・シュラングェ）……！」
紗矢華が唇を噛み締める。
春菜が己の武装を出したからには、死力を尽くして戦わなければ敗北は確実である。だが、そうなれば、命の保証はなくなる。
「春菜、お前！」
「暁君。あなたとは、別の機会にお会いしたかったですよ」
寂しそうに微笑む春菜は、それでも力強く、黒い鎖を振り下ろした。

その八

姫柊春菜の肩書きは、調停官。
交渉によって事件を解決する魔導犯罪の専門官である。
しかし、その実体は、敵勢力に取り入り、内部から情報を探る密偵であり、調停官は隠れ蓑に過ぎない。極めて危険度の高い職務であり、それ故に帰ってこない者も多いという。
春菜のように、敵の手に落ちる者も少なくない。
とはいえ、それは春菜が弱いということを意味しない。
何せ、こういった任に就く者は、当然ながら自衛手段を有しているし、情報を守るために自害も辞さない強固な精神を持っているのが前提とされる。
春菜が敵に洗脳されるという異常事態は、獅子王機関にとっても想定外の事案だったのではないか。

紗矢華はすでに弓に魔力を充填した矢を番えている。
呪術の知識に於いては剣巫よりも紗矢華たち舞威姫のほうが一歩も二歩も先を行く。ほんのかすかではあるが、確かに春菜の身体から、汚らわしい精神操作の呪詛w
姫柊春菜は、近接戦闘能力に於いて他の追随を許さぬ圧倒的な実力を持ち、獅子王機関が開発した兵器である四式魔導捕縛鎖（ケッテ・シュランゲ）――――通称、縛大蛇。癖が強く、使いこなすのにかなりの修練と相性を必要とするじゃじゃ馬だというが、一度使いこなしてしまえばその力は極めて強力である。
「暁古城！　左から！」
「分かってる！」
左右に分かれて、同時に春菜を攻める。古城は吸血鬼の身体能力を駆使して地面を蹴って加速、遅れて紗矢華が呪矢を連射しつつ弧を描くようにして春菜の側面を狙う。
「優しいのですね、二人共」
春菜は向かってくる二人に対して余裕を崩さない。

碧い呪矢が三本、春菜目掛けて飛ぶ。物理ダメージではなく、催眠術によって相手を昏倒させる麻酔弾のようなものなので、直撃しても問題ないと思いきり射たものだ。

対して、春菜は迎撃する。縛大蛇の分銅つきの先端が勝手に跳ね上がり、真上に跳ぶ。蛇が鎌首を擡げるように、起き上がった縛大蛇がその身を以て紗矢華の矢を弾き飛ばす。催眠術は、無機物には通じない。まして、強力な漆黒の魔力を帯びた縛大蛇には、生半可な攻撃では届かない。

「ですが、殺す気で来なければ、わたしに触れることもできませんよ」

春菜は縛大蛇が絡まる右腕を振るう。

鞭と化した縛大蛇が横薙ぎに一閃された。驚くべきは縛大蛇の攻撃範囲だ。紗矢華と古城までは、およそ二〇メートルはある。その距離を、一撃で薙ぎ払うほどの射程があった。手に持てる程度の鎖だと思っていた古城は、目測を誤って、目を見張る。

「うおおおッ!?」

伏せたところを通り過ぎる縛大蛇。しかし、それで終わらないのが、魔術戦だ。通常の鞭であれば、慣性に従ってそのまま弧を描き、勢いを失うところだが、縛大蛇は違う。途中でうねり、分銅を古城にめり込ませようと鋭い刺突となって襲い掛かる。

「なんだこれッ!?」

「掴まらないで！　縛大蛇の能力は魔力の固定化よ！　掴まったら、あんたも魔力が押さえ込まれるかもしれない！」

「まじか。くそッ」

襲われる古城を救おうと、紗矢華が矢を放ち、縛大蛇を撃つ。撓んだ隙をついて、古城は転がるように縛大蛇から距離を取る。

「なるほど。魔力を散らす呪矢ですか。やはり、舞威姫は器用ですね」

魔力を固定化する縛大蛇を相手にするには、その固定化能力に拮抗する能力を撃ち込むべきだ。例えば雪菜の雪霞狼などは天敵なわけだが、紗矢華には問答無用でその力を打ち消すことはできない。精精が乱す程度である。

「紗矢華が言ったとおりですよ、暁君。わたしのこの縛大蛇は、捕縛を

目的とした鎮圧兵装。魔力を固定化し、押さえつけることで、吸血鬼の眷獣すらも縛り上げる業物です。もちろん、第四真祖の眷獣相手にどこまで持つかは分かりませんけどね」
吸血鬼の眷獣は、意思を持つ強大な魔力の塊だ。そのため、魔力を固定化する縛大蛇に囚われると身動きが取れなくなって、能力の大半が封じられてしまうし、本体となる吸血鬼が捕縛されてしまえば、その魔力が身体の外に出なくなってしまうために抵抗する余地を失う。攻魔師が持つに相応しい武器といえた。
「では、暁君にはリタイアを、そして紗矢華には同行を願いましょう」
春菜が縛大蛇を振るう。
撓る縛大蛇が空中でトリッキーな軌跡を描き、襲い掛かる。紗矢華は戦闘経験を、そして古城は動体視力と身体能力で辛うじてかわす。縛大蛇が掠めたアスファルトが削れ、コンテナが斬り裂かれた。
中距離戦闘では、縛大蛇の能力が光る。
春菜は縛大蛇を意思によって操作している。魔術的なやり取りが、武器との間に成り立っているのだ。そのため、わざわざ春菜自身が身体を動かす必要もなく、それ故に隙も生まれにくい。それでも、直接手で動かしたほうが速く、重い攻撃になるのだが、今は二人に対応しなければならないということでそこまでしていない。
「あの鎖伸びるのかよ！」
「あの黒いのは本体じゃないのよ！」
紗矢華が叫ぶ。
「本体じゃないって？」
「縛大蛇の本体は、春菜さんの手首についてる腕輪よ。大気中の魔力とか、春菜さんの霊力とかを固定化して鎖の形状を作ってるってだけ！」
「てことは、射程は」
「実質無限ってとこかしらね！」
轟と風が切り裂かれる。
闇色の鎖が鞭となって古城と紗矢華に襲い掛かる。驚異的な武装である。鎖が生き物のように蠢いている。先端の分銅と中央の鎖の

部分で、動きが異なるのである。先端は蛇が獲物に喰らい付くように鋭い刺突を放ち、それと同時に中央は変幻自在に動いて紗矢華の矢を弾き返している。矢による狙撃は、春菜に届いていない。
「ただの呪矢じゃ、全然効果がない。だったら！」
紗矢華はバックステップを踏んで、距離を取りつつ、番えた矢を放った。
放たれた矢は途中で、突然進路を空に変え、三〇メートルほど上空で炸裂した。
現れたのは巨大魔法陣の天蓋だ。
「縛大蛇！　結界／固定！」
春菜は即座に応戦する。空から降り注ぐのは、強力な重圧魔術である。範囲内を圧迫し、押し潰す重力の檻だ。その中で、一瞬早く春菜は縛大蛇によって結界を構築した。
魔力の鎖は、春菜の周囲一メートルほどの空間を包み込み、その内と外を断絶した。魔力の固定化能力は、捕縛だけでなく、防御にも優れた性能を発揮するのである。
「出鱈目だな、あの鎖」
「正直、敵に回るとこんなに厄介だったなんて思わなかったわ」
二人揃って呆れる。
手加減しているとはいえ、紗矢華の強力な呪術を受け止めて平然としていることが不思議でならない。
「とにかく、春菜さんを突破しないことには雪菜を助けることができないわ」
「分かってる。春菜は洗脳されてるってのはマジなんだな!?」
「間違いないわ。思考そのものの方向性を捻じ曲げるタイプの呪詛ね。春菜さん自身も、自分がやっていることが正しいと思い込んでいるんだわ！」
紗矢華は魔術のエキスパートだ。戦闘の最中に、春菜の身体を調べ、その身に打ち込まれた呪詛の正体を暴いていた。
「どうにかならないのか!?」
「解呪するなら、近付かないと」

「近付くってな……」
罅が入ったアスファルトは、春菜のいた場所だけ完全に原型を留めていた。紗矢華の魔術が完全に遮断されていた証拠であった。
怪物的な強さだ。今の段階で、春菜に近づけたわけでもなく、春菜自身も一歩も動いていない。古城と紗矢華が必死になって春菜の攻撃を受け流しているのが現状なのだ。
「派手になってきましたね。では、わたしのほうも少々力押しをさせてもらいましょうか」
春菜は右手をコンテナに向ける。
弾丸のような勢いで縛大蛇がコンテナを貫いた。さらに、金属の板をぶち抜く音が連続する。それが、一〇回ほど続いた後で、
「あなたたちなら、大丈夫ですよね」
そう言って、春菜は鎖を掴み、真上に跳ね上げた。
撓んだ鎖は、そのまま先端まで力を伝える。物理法則など魔力が固定化した鎖には通じない。
複数のコンテナが宙に舞い上げられたのである。
狙いは当然、古城と紗矢華だ。
高所から落下してくるコンテナに押し潰されれば、一溜まりもない。復活できる古城ならまだしも、紗矢華は即死するだろう。
追い討ちをかけるように、足元を縛大蛇が狙う。
「あんた上！」
「疾く在れ（来やがれ）、〝双角の深緋（アルナスル・ミニウム）〟！」
二の句なく、古城は眷獣を召喚する。
落下してくるコンテナを迎撃するのは、九番目の眷獣である緋色のバイコーンであった。全身が振動でできており、存在するだけで周囲に衝撃波をばら撒く。
一〇メートルを越す巨体を駆って、〝双角の深緋（アルナスル・ミニウム）〟がコンテナに体当たりをする。さらに、二本の角が音叉のように共鳴して爆発的な振動波で、コンテナを跡形もなく消し飛ばした。
そして、紗矢華は煌華麟を剣の形に変形させて、鎖を斬り飛ばす。
剣の形状の煌華麟の能力は、擬似的な次元切断である。魔力を固定

する程度で、防げるものではない。とはいえ、その防御は瞬間的なものでしかなく、先端を切り飛ばしても、後続までは防げない。僅かな猶予を得たに過ぎないのだ。
「暁古城、離れなさい！」
と、紗矢華は叫び、古城の身体に呪矢を撃ち込んで跳ね飛ばした。
「ぐおおおおおおッ」
突然のことに、古城は受身すら取れずに転がっていく。
古城は全身に擦り傷を作りながら、すぐに立ち上がり、紗矢華に一言文句を言おうとして目を見張った。
春菜が、紗矢華の目の前に迫っていたからだ。
紗矢華に鎖を切り飛ばされた春菜は、その鎖を手繰り、地面に突き刺した。そして、そこを基点として、自らの身体を引き寄せたのである。

紗矢華と春菜の戦いは、傍目から見ても紗矢華が劣勢だった。
紗矢華の煌華麟は剣として使うこともでき、次元切断は理論上斬れないものはないという凄まじい力を誇る。だが、その殺傷性の高さが不幸にも春菜に圧される要因になっていた。
威力を加減できないため、春菜を殺してしまうからである。そのため、紗矢華は春菜に全力での近接戦闘を挑めない。心のどこかで、手加減してしまうのである。一方の春菜は、素手での戦いのため紗矢華を殺さないように加減するのが簡単だ。
「ぐ、くぅ……！」
炸裂弾が爆発したかのような音が響き渡る。
怒涛の連続攻撃を、紗矢華は紙一重でかわす。
「腕を上げましたね、紗矢華。煌華麟の力が使えない近接格闘戦の間合いで、よく持つものです。ああ、今のあなたはわたしを傷付けないように、加減してくれているのでしたね」
肩で息をする紗矢華に対して、春菜は余裕の顔色だ。手加減しているのは、春菜も同じようだ。
「愚かです」

春菜の中で何かが爆発した。
少なくとも紗矢華にはそのように見えた。膨大な霊力が春菜の身体から噴き出したのである。
「この間合いで、あなたがわたしに勝った例(ためし)がありますか？」
ビリビリと肌を焼くような強烈な霊力だ。
霊能力者としても、春菜は超一流だ。凄まじい、威圧感である。
「く……響(かぎり)よ！」
紗矢華の号令の下に、六枚の呪符がアスファルトの亀裂から飛び出した。春菜を取り囲むように、展開した呪符は、瞬時に猛禽に姿を変えて春菜に殺到する。
「旋転／切断」
春菜の足元から黒々とした炎を纏った鎖が竜巻状に立ち上る。
紗矢華の式神は、その一撃で切り刻まれて飛び散った。
紗矢華は後ろに跳んで、煌華麟を剣から洋弓に変形させる。そして、呪矢を放った。轟音を叩きつけて、昏倒させようとしたのである。
「若雷！」
春菜は避けようともしなかった。
握り締めた拳を斜め下から抉りこむように光の矢に打ち込んだ。
爆発的な魔力の渦が生じる。しかし、春菜の力が、紗矢華の呪矢を上回っていた。紗矢華の魔術ごと、呪矢は春菜の拳から放たれた魔力によって消し飛ばされてしまった。
「そんな……ッ!?」
紗矢華は、驚愕に目を見開く。
春菜は事もあろうに素手で叩き伏せてしまったのだから、当然だ。
「紗矢華。あなたも雪菜と同じですね。便利な道具に頼りすぎているのです。呪的身体強化(フィジカルエンチャント)も、そのようなお座なりな使い方では話になりません」
ザン、と足音が響く。そのときにはすでに、春菜は紗矢華の視界から消えていた。
「わたしを殺す気で来なさいと、初めに言ったはずですよ」
気付けば春菜は紗矢華の懐に潜りこんでいた。速度もあるが、それ

以上に紗矢華の呼吸や瞬きを把握して、反応できないタイミングで動いたことが、紗矢華に消えたと誤認させた要因であった。
「鳴雷」
胸元で手榴弾が爆発したかのような衝撃であった。
超至近距離から解き放たれた強力な一撃に、堪らず紗矢華は吹き飛ばされた。

端的に言って、春菜は強すぎた。
紗矢華はコンテナに背中を預けて動かないし、満足に動けるのは古城だけだが、どうしても春菜に勝てる気がしなかった。
眷獣を使えば、勝てるには勝てる。だが、間違いなく殺してしまう。それだけはできない。
古城は心の中で舌打ちをする。
最強の力しか持たない古城は、こういった場面で不利に陥りやすい。相性の悪さを痛感させられる瞬間であった。
「後は暁君ですね」
春菜は改めて古城に向き合った。
紗矢華を倒したばかりだと言うのに、春菜は息を上げてもいない。素の実力が違いすぎたのであろうか。
「操られてるあんたに言っても仕方がないけどよ。自分が何やっているか分かってんのか？」
「何をやっているか？　ルドルフ様の偉業を邪魔する人を始末して、そして雪菜ちゃんを連れて帰る。それだけでしょう？」
「ルドルフってのが、春菜をこんな風にした犯人てわけか」
吐き気がする。
春菜は笑顔だ。紗矢華を傷付けたことも雪菜を傷付けたことも、罪悪感を感じていない。紗矢華が言うには、考え方に作用する術をかけられているということだが、恐ろしい能力である。春菜ほどの実力者を、味方にすることができるのだから。おまけに、今は雪菜まで囚われている。
「とにかく、あんたを止めるぞ。春菜。理由はどうあれ、妹に手を上げ

るなんざ、姉貴のやっていいことじゃねえだろうよ。姫柊に、きっちり謝らせてやるから覚悟しやがれ！」
古城は形振り構わず駆け出した。
結局のところ、古城にできるのは何とか春菜に近付いて、押さえ込むことだけである。頼りになるのは、吸血鬼の肉体唯一つだ。
「眷獣を使わない吸血鬼に、後れを取るわたしだとでも思っているのですか？」
思ってなどいない。
紗矢華に圧勝する実力者に、正面から挑むのは愚策である。しかし、それ以外に思いつかないのだから仕方がない。
そんな古城の接近を許す春菜ではない。
縛大蛇を鞭のように振るって古城の足を止める。
真祖を殺し尽くすのは、春菜であっても難しい。だが、動けなくすることはできる。とりわけ、春菜の武神具は、拘束することにかけては右に出る者のない逸品である。
「蛇動／拘束」
フェイントまで織り交ぜた縛大蛇に古城は翻弄される。
愛用のパーカーは、すでにズタズタになっていて、擦り傷の数も数え切れないほどになっている。再生で治るのだが、治ったそばから傷つくので、常に傷だらけの状態になってしまっている。
その古城も、いつまでも逃げていられるわけではない。紗矢華の支援がなくなったために、古城だけではとても対処できなくなった。一瞬先を視る春菜の霊視も、厄介だった。相手の攻撃は恐ろしいほど古城の動きに合わせているのである。
「しまッ」
古城の左腕を捕らえた縛大蛇は、万力のような力で締め上げる。さながら、大蛇が獲物を絞め殺そうとしているかのようであった。
「旋転／墜落」
左腕を捻り上げるようにして、縛大蛇は古城を振り回す。そして、その勢いのまま、背中から地面に叩きつけた。
「ごあ……ッ!?」

骨がいくつか砕けた。衝撃が全身を貫き、息が止まる。
すぐに肉体が修復を始めるが、魔力の動きが極めて緩慢だ。左腕に絡まった鎖が、古城の体内の魔力を押さえつけているからである。
「く……こいつッ」
古城は鎖を引き千切ろうと力を込めて引っ張るが、びくともしない。吸血鬼の身体能力は人間よりも上という程度で魔族全体から見れば脆弱だ。獅子王機関の生み出した捕縛用の武神具を破壊できる腕力など期待できない。
魔力を固定化するので、おそらくは霧に姿を変えるという脱出方法も期待できない。
「では、チェックメイトです」
鎖の中央が蠢いて、輪を描く。古城に絡みついた部分のみが、空間に固定されているかのように動かず、それ以外の部分が投げ縄のような形状となって、古城に襲い掛かってきたのである。
「やばッ」
掴まれば、一巻の終わりだ。眷獣を召喚する機会を得ることもできないだろう。
ならば、ここは無理をしてでも眷獣を召喚するしかない。
振動や雷撃では、暴発の恐れがある。
大破壊を撒き散らす類の眷獣ではなく、もっと限定的な効果範囲の眷獣が理想的だ。
「疾く在れ（来やがれ）、〝神羊の金剛（メサルティム・アダマス）〟！」
魔力を絞り上げて、吼える。
現れたのは煌びやかな金剛石の楯だ。空には楯と同じ金剛石の身体を持つ大角羊が悠然と現れる。
攻撃の反射能力を持つ、強力な眷獣であるが、今回は効果範囲を限定する。あまり広げすぎて、周囲を巻き込むわけには行かない。まず、春菜の束縛に服す前に、金剛石の楯で、肘から左腕を切断する。
「ぐ、おおおおおおッ」
激痛に脳が沸騰する。だが、歯を食いしばって、古城は耐えた。放っておいても腕は治る。それよりも今は、腕を落としてまで束縛か

ら逃れたのだから、春菜の追撃を受けないようにこの場を離れるのが先決である。
古城は春菜の鎖を金剛石の楯で弾いて進路を確保し、全力で駆け出した。

煌びやかな輝きに守られた古城に、春菜の攻撃は尽く弾き返された。
攻防一体の眷獣を持つ吸血鬼は、珍しくもないが、古城のそれは規格外に過ぎた。
「展開／固定!!」
春菜が縛大蛇を長大化させ、古城の前面に鎖の壁を展開する。大気中の魔力を取り込み、固定化することで、強固な障壁を生成したのである。
「切り開け、〝神羊の金剛（メサルティム・アダマス）〟！」
数百からなる金剛石の楯が、縛大蛇と衝突する。大地を揺るがす衝撃が駆け抜け、埠頭全体に大きな地震にもにた振動を伝える。
〝神羊の金剛（メサルティム・アダマス）〟と縛大蛇の激突は、数秒の間続き、そして金剛の輝きが闇色の炎を切り破るに及んで勝敗が決した。
「そんな、……縛大蛇が……。第四真祖の眷獣。まさか、ここまでなんて」
これまで、数多の魔族を捕縛してきた自慢の逸品が、大して抗することもできずに食い破られたのが驚きだった。
縛大蛇の鎖が砕け散り、魔力に還元されて消えていく。その中を、古城は駆け抜ける。
「おおおおおおッ！」
古城の猛烈な突撃は春菜の予想を大きく上回った。
〝な……早い!?〟
それまでの古城の動きとは何もかもが違う。
縛大蛇が鎖の再生成を急ぐが、十分な強度の鎖を作る前に古城が懐に飛び込んでくるであろう。
〝これは。そうか、呪的肉体強化（フィジカルエンチャント）！〟

古城は魔術を使えないという先入観が、気付くのを遅らせた。
肉体強化だけなら、本人が使う必要はない。他人による強化も、効果を発揮するのである。
今回の場合は、古城に撃ち込まれた紗矢華の矢が、古城の肉体を強化する呪詛を帯びていたのだ。吸血鬼の身体能力は、魔族の中では低いほうだが人間基準で考えれば十二分に脅威となる。それを、さらに魔術で強化したのだ。並の人間なら、その瞬発力に反応することすらできないだろう。
「近付いたところで、暁君の武術じゃどうしようもないんですよ」
そう。春菜はかつて剣巫も務めた近接戦闘のスペシャリストだ。その実力は雪菜を凌駕する。当然、身体能力を向上させただけの素人に、組み伏せられるほど柔な訓練を積んでいない。
拳を握り締め、古城を迎撃する準備を整える。
筋力を強化し、肺腑の空気を入れ替える。古城の動きを仔細に観察し、反撃に適した動きをシミュレートする。そんな春菜の視界がぐらり、と揺れた。
「ぐ……！」
突発的な眩暈。違う。いつの間にか、手首に呪刻が刻まれていた。弱い術式で、込められた魔力も微々たるものである。春菜に与える影響もまた、たいしたことはない。すぐに排除できる程度である。が、その僅かな差こそが、勝敗を左右することもある。
「紗矢華……ッ」
紗矢華を打ち据えたあの一瞬で、身体に呪詛をつけていた。紗矢華が春菜に反応したわけではない。紗矢華自身がそういった呪詛を帯びていて、春菜が触れたことで感染したのだ。
〝やってくれましたね……ッ〟
歯噛みしつつ、呪詛を祓い、身体の自由を取り戻す。この間に古城は手が届くところにまで近付いていた。
「春菜ーーーーーーーーッ！」
古城が、残された右手を伸ばす。
春菜は、一瞬先の未来を視て、古城の心臓を一撃の下に粉砕する。

――――確かに、春菜はこのとき、自らの腕が古城の胸を貫通する未来を視た。
「疾く在れ！　甲殻の銀霧！」
――――そして、古城が眷獣を召喚すると同時に、春菜の拳を古城の心臓を撃ち抜いた。
「ッ!?」
目を見開いたのは春菜であった。
春菜の腕は肘まで古城の胸にめり込んでいる。だが、血が出ていない。それどころか、殴ったはずの拳に、手応えが何もないのだ。
古城の身体が霧になっているからだった。
「捕まえたぜ、春菜！」
古城が残された右手で春菜を突き飛ばし、走ってきた勢いのままに押し倒した。古城にカウンターを仕掛けた春菜は、逆にその攻撃をいなされて咄嗟の反撃ができず、衝撃を受け止めることもできなかった。
「うきゃッ」
可愛らしい悲鳴を上げて、春菜は倒れた。
その上に古城は圧し掛かっている。
片手でどれだけ春菜を押さえ込めるか分からないから、早めに方をつける。幸い、春菜の洗脳を解くのに最適な方法が――――非常に強引だがある。かつて、紗矢華が洗脳されたときと同じだ。吸血することで、第四真祖の世界最強とも呼ばれる由縁たる強大な魔力を流し込み、精神支配の呪詛を打ち消すのだ。
そのためには、性的興奮が必要になるが、春菜を押し倒した際に偶然、古城の右手は春菜の胸にあった。
狙ったわけではない、と心の中で自己弁護しつつ、その柔らかさや形をついつい意識してしまう。春菜はどうやら、良い意味で着やせするタイプのようだ。雪菜よりもずっと大きなものを持っているようだった。
古城は春菜が反撃してくる前に、春菜の首に牙を立てた。
「あぐ、くぅあッ」

春菜の身体が震える。

古城を引き離すように、春菜が古城の肩を掴んだ。しかし、古城は離さず吸血を続ける。魔力を流し込み、春菜の体内から不純物を除去するために、ここで離れるわけにはいかないのである。

やがて、春菜の抵抗が薄れ、そして春菜の手が力を失って地面に落ちた。

その九

戦場となった第三埠頭に広がっている光景は、惨状と呼ぶに相応しいものとなっていた。

なにせ、周囲のコンテナはひっくり返り、粉微塵になったものまであり、路面のアスファルトは捲れ上がって、ところどころ陥没して構造材が見えてしまっている。

「暁古城、無事？」

弓を抱えた紗矢華がやってきた。足場の悪さもまったく気にしていない。

「ああ、こっちは何とかな。というか、お前、春菜に思い切りやられてただろ。大丈夫なんか？」

古城は再生力があるから、心臓を潰されたとしても時間をかければ復活できるが、紗矢華はそうではない。春菜に強烈な打撃を貰い昏倒していたようだったし、こうまでピンピンしているのが不思議でならなかった。

「ああ、それなら大丈夫。春菜さんの攻撃は、呪符と強化の魔術でなんとか受け流してたから」

「てことは、あれか。お前、気絶してなかったのか？」

「ええ、まあ、そうなるわね」

「マジかよ。人が苦労してる間に」

古城は紗矢華が無事だったことを喜べばいいのか、それとも寝たふりをしていたことに悪態をつけばいいのか分からなかった。

「いや、あのね。あのまま戦ってたら、本当にわたしやられてたし。気絶したふりをしたからこそ、最後にタイミングを見計らって呪詛を発動させられたんじゃない。むしろ、あんたのことをサポートしたやってたんですけど」

「そうだったのか？　そういえば、身体が軽くなったような気がしたんだが」

「呪詛は舞威姫（わたしたち）の十八番。呪的身体強化（フィジカルエンチャント）もその中に入ってるのよ」

近接戦闘では春菜に分があると判断した紗矢華は、春菜の攻撃をあ

えて受けて、倒されたと見せかけてその場をやり過ごした。そして、古城と春菜にかけた呪詛をそれぞれ発動させるタイミングを見計らっていたというのである。

古城ならば何とかするだろうという希望的観測に基づく賭けではあったが、結果的に奏功した。

「暁古城。腕は？」

紗矢華は古城の隣に膝をついて、古城の左腕を手に取った。血塗れた腕は、先ほどまではついていなかった。自ら切断した腕が、蜥蜴の尻尾のように生えて機能を取り戻したのである。

「もうほとんど治っているみたいだな。春菜から血を吸ったからか、治りも早い」

「そう。ま、治ったんなら、それはいいけどね」

変態真祖やらなにやら罵ってくるかと思ったが、存外そうでもない。紗矢華は、古城の容態を確認した後で、春菜の首筋に脈をとるように指を当てる。

十秒ほど、そうしてから紗矢華はほっと息を吐いた。

「春菜さんの呪詛。あんたのおかげで綺麗に打ち消されたみたいね」

「そうか。上手くいったか」

「意識がいつ戻るかは分からないけど、そう遠くないはずよ」

緊張がやっと解けた。

後は雪菜を助け出すだけでいい。残る敵は、おそらくはあの獣人くらいのものである。古城と紗矢華ならば、獣人を一人倒すくらいは可能であろう。

「春菜を安全なところに運ばないと」

「そうね。ちょっと待って」

紗矢華が、スカートのポケットから一枚の呪符を取り出した。紗矢華が呪符に息を吹きかけると、呪符は形を変えて、一頭の獅子となった。

「なんだ、コイツ」

「式神よ。春菜さんを埠頭の駐車場まで運ばせるわ。あそこまで離れれば、戦いに巻き込まれることもないでしょ」

埠頭は広く、駐車場まで歩いて五分ほどはかかる。
古城の眷獣を狙って解き放てば別だが、そういう事態になるとも思えない。最もいいのは、二人のうちのどちらか一方が春菜に付き添うことだが、戦力が古城と紗矢華の二人だけなので、現実的ではない。
古城が春菜を獅子の背に乗せて、紗矢華が命を下す。見た目が獰猛な猛獣なので、不安にもなるが、紗矢華の命令を大人しく聞いて春菜を落とさないように注意しながら、その場を去っていく。
「よし。それじゃ、姫柊を助けに行くとするか」
「ええ。雪菜に手を出した報いを受けさせてやるわ」
獰猛な笑みを浮かべて、紗矢華が言う。
ここにいない獣人の男に、心からの侮蔑を向けているのである。
「あの船にどうやって乗り込むかだけど」
春菜が飛び降りてきた商船の中に雪菜がいることはすでに確定している。乗り込んでいって、雪菜を連れ帰るのに、どこから行くのが最も効率がいいか。
そう考えていたときであった。
「やってくれましたね。第四真祖。そして、獅子王機関の舞威姫」
商船のデッキに、獣人が出てきたのである。
二メートル近い巨体で、すでに獣の状態に変化している。
「てめえ、姫柊をどこにやったッ!?」
「姫柊？　ああ、雪菜君のことを言っているのなら、この船内にと答えるほかありませんね。もうご存知でしょう？」
獣の姿をしていると、表情が分かりにくいのだが、この獣人は明らかに軽薄な笑みを浮かべている。癪に障る笑みだ。
「お初にお目にかかります。〝黒懺会〟のルドルフと申します」
丁寧な口調とは裏腹にその言葉の中には隠しきれない感情の揺らぎが感じられた。ルドルフと名乗った獣人もまた、古城と紗矢華に思うところがあるのであろう。
そのルドルフを前にして、紗矢華が進み出て、叫んだ。
「あんた、雪菜に手を出してないでしょうね！」
「それについてはご心配なく。傷物にしてしまっては商品価値が下が

りますからね。身体のほうは、綺麗なままですよ。身体のほうは、ね」
「あんた、……まさかッ」
絶句して、目を見開く紗矢華は怒りでカタカタと震えている。今にも飛び出して、相手を斬り殺しそうな雰囲気である。
「よもや、春菜君を倒すとは思っていませんでしたよ」
獣人は呟くような声色で言った。
「おまけに、春菜君を戦場から遠ざけるとはね。回収にまた手間がかかってしまう。わざわざ、危険を冒してこの島にまでやってきたというのに、骨折り損のくたびれもうけでは割に合いませんよ」
「回収だとか商品だとか。てめえ、姫柊たちをモノ扱いしてんじゃねえよ！」
「人間など。所詮は、使い捨ての道具でしかないでしょう。下等生物の分際で、我が物顔で世を跋扈する救いようのない生き物ですよ。使い道を示してやっているだけ、まだ私は良心的じゃあないですか」
正気を疑う発言であるが、相手は獣人の犯罪者である。〝黒死皇派〟がそうであったように、獣人の中には獣人以外の種族を見下す思想を有する者もいる。なまじ身体能力が多種族よりも優れているから、そうした考え方に至りやすいとも言われる。
「それに、腹立たしいのはこちらも同じ事。汚らわしい吸血鬼如きが、私の商売の邪魔をしようというのですからね！」
ガン、と金属音を響かせて、獣人は跳んだ。凄まじい身体能力は、強化魔術を用いず、素のままで商船のデッキから飛び降りる芸当を可能とする。
古城たちから、二〇メートルほど離れた場所に着地したルドルフは、獣そのものの顔に憤怒を浮かべ、唸った。
「舞威姫。あなたのおかげで、私自らが出なければならなくなりましたよ。管理職とはいえ、時間外労働は辛いものがありますからね。あなたで帳尻を合わさせて貰いますよ」
「上等じゃないの。やれるもんならやってみなさい、この変態外道!!」
紗矢華が弓に呪矢を番える。
初手で紗矢華がこの辺り一帯に催眠系の呪術をかけたことで、獣人

以外の戦闘要員が昏倒したのであろう。しかし、それはルドルフが紗矢華の呪詛に耐えるだけのスペックを持つ高位の獣人であるということを示している。

「ぶっ飛べ！」

紗矢華が渾身の呪矢を射放った。

大気を割いて、強烈な呪詛を含む光の矢が、獣人の顔面を目掛けて飛んだ。容赦の欠片もない、殺すことすらも辞さない一撃だ。直撃すれば、強靭な獣人の肉体でも消し飛ぶであろう。

その呪矢を、ルドルフは身体能力のみで回避した。

地面を蹴るだけで、アスファルトを抉る。それほどの脚力で、跳んだルドルフは破壊を免れて生き残った、錆色のコンテナの上に飛び移った。

「あなたのことは聞いていますよ、煌坂紗矢華君。呪術のエキスパートは、我々の業界でも喉から手が出るほど欲しい人材です」

「春菜さんみたくあんたの洗脳を受けろって？　お断りよ！」

「初めは皆そう言うのですよ。春菜君然り雪菜君然りね。ですが、ご心配なく。春菜君のときに、壊れかけるまで弄りましたからね。そのときのデータから、実に効率よく洗脳を推し進める方法を確立しました。あなたは、彼女ほど苦痛を味わうこともないでしょう」

どこか得意げに、春菜を甚振ったという事実を述べる。

紗矢華はもう聞いていられなかった。頭の血管がすべて千切れんばかりに、血潮が沸騰する。

「――――このッ」

逆上しそうになる紗矢華を押し退けて、古城が前に出た。両腕を突き出し、その間に魔力の渦を生成する。

「疾く在れ（来やがれ）、〝双角の深緋（アルナスル・ミニウム）〟！」

超小規模の召喚である。敵との距離が近いために、眷獣の圧倒的破壊は自分たちをも巻き込んでしまう。そこで、古城は眷獣の魔力の一部を抽出して、その能力だけを使用したのだ。

圧縮された振動派が、砲弾となってルドルフを襲う。

「ぬッ!?」

その攻撃は予想外だったのか、ルドルフは息を呑み、コンテナから飛び降りる。古城の攻撃は、ルドルフを捕らえ損ない、コンテナの上部を抉り取った。
「煌坂！」
古城が叫ぶ。その意図するところを悟り、紗矢華は弓に呪矢を番えた。
空中では、獣人の超越的な身体能力は発揮されない。そこが狙い目だ。
紗矢華が放った矢が一目散にルドルフを襲う。ルドルフの進路に回りこむように放たれた矢は、そのまま行けば、まごうことなくその胸に突き刺さる。
絶対に避けれらないはずの攻撃からルドルフが生還したのは、紗矢華の矢を真横から打ち落とした何かがあったからである。
矢と激突して砕け散ったのは、おそらくは剣の類だろう。古城の動体視力が、その影を捉えていた。そして、その剣を投じたのは――――、
「雪菜ッ!?」
「姫柊ッ!?」
紗矢華と古城は同時に叫んだ。
デッキの上に現れた雪菜が、ルドルフを救った犯人だった。
雪菜はちらりと古城と紗矢華を見た後、口を開くこともなくルドルフの前に舞い降りた。それは、古城と紗矢華から、ルドルフを守る位置取りだった。
「姫柊……ッ」
古城が呻いたのは、間に合わなかったからである。雪菜が敵の手に墜ちる前に、何とか辿り着いて救い出そうとしていたのに、こうして雪菜は古城たちと敵対してしまっている。
「雪菜……ッ。ねえ、雪菜！　そんなところにいないで、一緒に帰ろう！　雪菜ッ！」
紗矢華が雪菜に呼びかけた。
悲壮な思うを込めた、必死の叫びである。その紗矢華の声に、雪菜

は抜刀を以て返答する。
「雪菜……」
紗矢華が唇を噛み締めた。雪菜が自分に刃物を向けてくるというだけで、心は平静を失いそうになる。
「無駄ですよ。彼女には何も聞こえていません。導入段階ではありますが、敵を屠る兵士としては、十二分に機能しますからね」
春菜のように、洗脳される前の人格とほぼ同じ状態を維持することも、ルドルフの技術ならば可能なのだが、それにはもう少し時間が必要だったのだ。しかし、春菜が倒されたことで雪菜を出陣させるしかなくなった。結果、感情を殺した状態の、機械的な状態となったのである。
古城や紗矢華にとっても、雪菜から罵声なりルドルフへの敬愛なりが発せられないというのは救いであった。もしも、雪菜がそのようなことを口走ってしまったら、今度こそ紗矢華は激情のままにルドルフに突っ込んで行ったことだろう。
「煌坂」
「大丈夫。分かってる」
とはいえ、この状況で考えなしの突撃は命を縮める。
戦い慣れた獣人と剣巫見習いとはいえ、古城と共に最上級の敵と渡り合ってきた雪菜のコンビである。生半可な覚悟では挑めない。
自然と煌華麟を握る手にも力が篭る。
「さて、と。時間をかけている余裕もありませんし、早々に決着と行きましょうか。雪菜君。叩き潰しますよ」
ルドルフの合図で、雪菜は前に進み出る。
紗矢華と古城を相手にするのに、聊かの迷いも感じられない動きであった。
「煌坂。姫柊は俺が押さえる。その間に、あの馬鹿を!」
雪菜の相手は古城が買って出た。紗矢華では雪菜の相手は務まらない。技術の問題ではなく、精神面での問題だ。どの道、雪菜を巻き込む可能性が高いため、古城は眷獣の使用を控えなければならない。ルドルフを雪菜が庇おうものなら、その時点で雪菜を殺してしまうか

らである。
　雪菜にかけられた呪詛を古城が解けるのも、春菜の呪詛を吸血で解いたことから証明されている。そして、何よりも雪菜は雪霞狼を持っていない。それが大きかった。
　吸血鬼の真祖すらも亡ぼしうる獅子王機関の秘奥こそが七式突撃降魔槍（シュネーバルツァー）、すなわち、雪霞狼である。その能力は、あらゆる魔力を打ち消す神格振動派を発生させることであり、古城のみならず呪詛を主武装とする紗矢華にとっても相性が悪い。だが、雪菜自身が魔術の虜となっている今、雪霞狼は使えない。一瞬でも触れてしまえば、雪菜にかけられた呪詛が霧散してしまうからである。
「暁古城……分かった。雪菜のこと、任せるわ！」
「ああ」
　低く抑えた声で答えた古城は、赤い瞳で雪菜を見る。
　槍の代わりに日本刀を構えた雪菜は、身を低くして古城に迫っている。どうやら、相手も古城に雪菜をぶつける算段だったようだ。雪菜が古城の相手をしている限り、古城は眷獣を使えない。妥当な判断であろう。
「まさか、本当にお前に命を狙われることになるなんてな」
　古城は雪菜に雪霞狼を向けられたかつての出来事を思い返し、薄く笑った。だが、そのときですら雪菜の顔には隠しきれない感情が浮かんでいたのだ。今のような、表情のない機械的な少女では断じてなかった。
　雪菜には幾度となく救われてきた。今度は、古城が雪菜を救う番だ。
　古城は覚悟を決めて、雪菜の振るう白刃に挑みかかった。

□

「愚かしい。私を相手に、ただの人間が勝てるとでも？」
　軽い跳躍で、一〇メートル以上を移動するルドルフに、紗矢華の矢

は掠りもしない。身体能力に隔絶したものがある。紗矢華は舌打ちをして、空に矢を放った。
「あんたを倒さなくちゃ雪菜を助けられないなら、倒すだけよッ」
ぱあん、と空で矢が弾けた。飛び散る魔力が、そのまま矢となって降り注ぐ。相手が速すぎて捕まえられないのなら、攻撃範囲を拡大してしまおうという算段であった。
矢の雨にルドルフは押し潰される。
捲れ上がる地面。吹き上がる粉塵が、威力の凄まじさを物語っている。
相手が倒れたかどうかを確認する前に、紗矢華は次の矢を番える。
舞い上がった粉塵が内側から吹き飛んだ。
激しい衝撃が四方に飛び散り、紗矢華の身体を痺れさせる。
「く、……んなッ」
現れたのは五メートルはあろうか。巨人に匹敵する、見上げんばかりの巨体であった。屈強な獣人の肉体が、さらに膨れ上がり、強大な魔力を惜しむことなく垂れ流している。おぞましさ以上に、神々しさを醸し出す。
「神獣化、ですってッ!?」
紗矢華が驚くのも無理はない。
神獣化は最上位の獣人のみが可能とする特殊能力である。寿命すらも消耗する変わりに、莫大な力を手にするという。その力は、吸血鬼の眷獣にすら匹敵するとされ、純粋な身体能力では、この状態の獣人に勝る種族は皆無に近い。
「そうか。春菜さんは……!」
紗矢華は理解する。
春菜ほどの力の持ち主が、敵に捕らわれたり理由はここにあった。孤立無援の潜入操作の最中に、神獣化能力を有する獣人に襲われては、無事ではすまない。
敵は春菜を正面から打倒しうる怪物である。
「如何にも。……この姿を人間に見せるのは、これが二度目ですよ。誇ってください」

声にすら魔力が乗っている。
身体の大きさで言えば、魔族というよりも魔獣である。
神獣化した今、ルドルフと紗矢華の間に跨る距離など、零に等しい。瞬きすら許さず、その巨体は紗矢華の眼前へと迫るであろう。弓による狙撃は、矢を番えた時点で致命的な隙となるだろう。ならば、選択肢は一つだけだ。
紗矢華は煌華麟を弓から剣の形態に変化させた。弓の形態では、ルドルフの動きに対応できないからである。
「ふ、この私を相手を、剣ですると？」
ルドルフは丸太のような太ももをはち切れんばかりに膨張させ、紗矢華の視界から消えた。
大気に空洞が生じる。
遅れて、旋風が巻き起こり、紗矢華は視認するよりも早くその場に身を伏せる。ルドルフが紗矢華の真横に現れ、その勢いのままに腕を振るったのである。
「あああああッ」
紗矢華は咆哮し、剣を振るう。
下から上へ振り上げられた刃は、ルドルフの腹をなぞる。
「ぬんッ」
ルドルフは、煌華麟の刃が皮膚に触れると同時に背後に跳んだ。
ルドルフの腹部には、真一文字に切れ込みが入っていた。獣毛に血が滲む。
「煌華麟に防御力は意味ないわよ。何せ、理論上斬れないものはないって代物なんだもの」
次元切断は、煌華麟が持つ攻防一体の強力な能力だ。空間ごと対象を斬り裂くため、獣人の肉体すらもバターのように切り捨てることができる。
「厄介な武器です。が、触れなければ、どうということはありませんね」
ルドルフが再び紗矢華に殴りかかる。
紗矢華の能力を高く評価するルドルフは、紗矢華を殺さないように

加減している。それでも、僅かでも攻撃が掠るだけで、重傷は免れない。

紗矢華はルドルフを相手に防戦一方となる。速く、重い攻撃を、紙一重でかわし続ける。気の遠くなるような作業の中で、ほんの僅かな勝機を探る。

もとより紗矢華は雪菜に勝ち越せるくらいに高い実力を持っている。戦闘経験も春菜に及ばないものの、剣巫に匹敵するのだ。

できる限り紗矢華に傷をつけたくないルドルフの都合と、紗矢華の単純ながら絶対的な殺傷性を有する煌華麟がルドルフに最後の一線を躊躇させている。

それでも、どこまで持ち堪えられるか分からない。先の読めないギリギリの戦いを続けていくしかないのである。

□

戦闘開始早々から古城は引かざるを得ない状況に追い込まれた。

春菜のときもそうだったが、眷獣を使えない状況では古城は身体能力の高い人間と大差ない。対魔族戦闘のスペシャリストである剣巫との相性は最悪だ。

古城が雪菜と戦って、未だに無事なのは紗矢華から呪的身体強化を受けているからである。人間の肉体では自壊してしまうくらいに強烈な強化魔術を、吸血鬼の肉体を頼りにして付与している。

後は動体視力に反射神経に任せて、雪菜の刃を潜り抜ける。

手を出せば、その手を斬り落とされる。

古城は戦いを維持するために、とにかく首だけは落とされないように庇いながら避けなければならない。

〝姫柊を殴るわけにはいかねえし、クソ。かなり、まずいぞ、これ〟

冷や汗が傷に染みる。

紗矢華の呪詛が内蔵を締め上げて、息が詰まる。肉体が崩壊と再生を繰り返しながら、身体能力の向上を強制しているのである。

まずは、あの刀をどうにかしなければ、近付こうにも近付けない。
「姫柊。必ず助けてやるから、心配するな」
斬り付けられ、内心の焦るは募るが、それでも口調には冷静さを滲ませる。雪菜に届いているかは、分からない。けれど、もしも意識が残っているのなら、少しでも安心させたかった。
雪菜は古城の言葉には反応を見せず、驚くべき速度で古城の懐に飛び込んできた。
「疾く在れ、〝神羊の金剛〟！」
横薙ぎに首を刈りにきた刃に合わせて、古城は金剛石の楯を展開した。大きさは一〇センチ四方。しかし、その防御力は絶対的だ。雪霞狼ならばいざ知らず、ただの刀では傷を付けることすらもできない。
金剛石の楯に触れた刀は、反射能力で跳ね返される。
ただし、雪菜のほうに刀は飛ばない。古城が角度を調整した結果、刀は雪菜の手を離れて弾き飛ばされ、海に落ちた。
「ッ……」
雪菜は、動じなかった。
刀が弾き飛ばされたことで、手首を傷めたであろうに、そのまま抉り込むように掌底を放ったのだ。
「ごッ……！」
腹部にめり込むと同時に雪菜の霊力が炸裂する。
爆発的な威力が古城を跳ね飛ばす。
膝をつき、咳き込むと信じられないくらいの血を吐いた。
腹に受けたダメージはあまりにも大きい。これが、雪菜たち剣巫の対魔戦術。古城の強力な再生能力が、機能を弱めている。
「容赦ねえな、おい」
いつまでも膝をついていられない。古城は気合を入れて立ち上がり、雪菜に向かい合う。だが、そのときには、すでに雪菜の追撃が襲い掛かっていた。
跳び蹴りを古城は真横に転がって避ける。その古城に、雪菜はかかと落としを放った。狙いは頭である。当たればトマトのように頭を潰される。そうなっては、紗矢華が雪菜とルドルフの二人に囲まれる

ことになる。
古城は地面を叩き、転がる勢いをさらに強めた。視界が回って仕方がないが、雪菜のかかと落としは辛うじてよけることができた。そのまま立ち上がる。驚くべきことに、ただの一撃で膝が笑うまでに追い込まれている。
「お前のツッコミ、結構優しかったんだな。驚いたわ」
腹部を押さえて呻く。
一瞬先の未来を視る雪菜に対抗するには、雪菜の身体能力を上回る反応速度を維持するしかない。紗矢華の呪詛がなければ、今頃は叩き潰されていたはずだ。
春菜と同じように不意を突いて吸血したいところだが、感情がないというのが厄介で、機械的に対応してくるために不意打ちが通じない。
「ッ!!」
古城は眼前に迫る縦拳を首を振って避ける。そうして体勢が崩れたところに雪菜の回し蹴りが襲い掛かり、古城を蹴り飛ばす。右手を楯にして防いだが、攻撃を受けた部分は熱さしか感じない。どうやら骨折したらしい。再生も、雪菜の霊力に阻害されてしまっている。
初めから分かっていたことだが、状況は最悪。命をいくつ懸けても足りないくらいに、相性が悪すぎるのであった。

□

冷たい風が頬を撫でる。
潮の匂いが鼻を突き、目を醒ます。
「う、ん……」
ふかふかとした何かが頬に当たっている。目を開けても、すぐには状況を理解できなかった。そこは広い駐車場で、車が数台止まっているだけで、極めて空虚であった。
春菜がいるのは駐車場の端で、フェンスのすぐ傍であった。獅子はちょこんとその座り込み、主を待っているかのようであった。

「わたし、は」
頭の奥がズキズキと痛んでいる。思考にはもやがかかっていて、前後不覚に等しい不安感を覚えてしまう。しかし、それも数秒のことである。春菜は自分が乗っているのが人工の獅子であると理解できた時点で、すべてを思い出した。
実の妹を敵の手に引き渡してしまったことや、一時の友誼を結んだ古城や友人の紗矢華と対立して怪我をさせてしまったことなどを初め、この島にやってくるまでに犯した様々な罪の数々が、脳裏に蘇る。思わず吐き気すらも催すが、春菜は積み上げた精神力で押さえ込んだ。
「なんて、こと……」
震える声で呟く。
獅子の背中から、春菜は転がり落ちた。
打ち付けた肘がジンジンと痛んだ。けれど、そんなことは気にならなかった。激しい焦燥に駆られて、春菜は立ち上がる。フェンスを掴み、身体を持ち上げる。しかし、すぐに崩れ落ちた。膝が震えているのは、疲弊のせいだけではない。身体に回った薬物が、春菜の心身を蝕んでいたのである。ルドルフから逃れられないように、その身体は薬に浸け込まれている。
「あ゛、あ゛、ぁ……」
痛い、痒い、苦しい、心が虫食いになっていく、息ができない、血潮が沸騰してしまいそうだ、視界が赤く染まる、もうどうでもいい、薬、薬、クスリ――――、
「ぐ、あぅッ」
春菜は自分の右手首に噛み付いた。痛みで自我を保つ。霊力は古城に奪われているが、まだ枯渇しているわけではない。何とか振り絞り、薬物の影響を遮断する。長くは続かないが、一時的に健常者と同じ程度に持ち直せる。
荒く息を吐いて、春菜は立ち上がった。
このままでは、この苦しみを雪菜や紗矢華に味わわせてしまう。それだけは、死力を尽くしてでも防がなければならない。

商船の近くでは、未だに激しい魔力が渦巻いている。古城と紗矢華は今でも戦っているのだ。

春菜を倒した二人とはいえ、まだルドルフと雪菜が控えている。この二人が単独で向かってくるのであれば、勝利できるだろうが、おそらくはそうはならない。春菜はルドルフの傍にいて、その性格や彼の周囲の状況をすべて把握している。古城と紗矢華は、ルドルフと雪菜に相性が悪すぎる。春菜のときのようにはいかないだろう。

ルドルフの神獣化は強力に過ぎる。倒すには第四真祖の眷獣が必要である。しかし、ルドルフもそれを分かっているから古城に雪菜をぶつけるだろう。雪菜が目の前にいる限り、古城は全力で戦えない。

「雪菜……」

雪菜をまず取り戻す。

時間は限られているが、それは敵も同じ。特区警備隊（アイランドガード）が駆けつけてくるまで、もう時間がない。ならば、近く攻勢をかけるに違いない。

急がなければならない。

春菜はここまで自分を運んでくれた紗矢華の式神に手を触れて、獅子を構成する霊力を引き抜いた。獅子は姿を消して、呪符に戻り、その呪符を春菜はポケットに押し込んだ。

今は少しでも霊力が必要だったからである。

春菜は薬の効果を押さえつけていられる僅かな時間で事を成すために、動き出した。

古城と紗矢華は、自分を命懸けで助けてくれた。駐車場まで運んだ自分が戦場に舞い戻れば、いい顔はしないだろうし、今の春菜では足を引っ張るだけだ。よって、春菜が向かう先は戦場ではない。夜闇に紛れたまま、春菜は岸まで駆け寄り、コンクリートの岸壁を蹴って海中に身を投げた。

春菜は海面に顔を出して、目標との距離を測る。目測で五〇メートルあるかどうかといったところだろう。衣服を着たまま、この距離を泳ぐのは骨が折れるが、商船に忍び込むには、海側からでなければならない。

鼻の効くルドルフを出し抜く意味も込めて、泳いでいくのが最適解だったのだ。
波に翻弄されながら、春菜は商船の真下にまで泳ぎ着く。
「はぁ、く、……縛大蛇！」
右手を掲げ、闇色の鎖を生成する。伸び上がった鎖が商船の手すりに絡みつき、春菜の身体を引き上げる。
商船の中は静まり返っている。紗矢華の呪詛によって、すべての船員が意識を手放しているからである。
「げほ、げほ、……はあ、あ、ぐぅ……」
壁と膝に手を突いて息を整える。予想以上に消耗している。気持ちだけが逸って足が前に進まないのである。目的の場所は、隠し通路の先にある武器庫。そこまで辿り着ければ、雪菜を救うことができるのである。

その十

さながらサンドバックであった。

もはや傷ついていない箇所はなく、瞼も腫れ上がり、全身の至るところの骨が砕けた。吸血鬼の再生能力を上回る攻撃は、古城を瞬く間に虫の息にまで追い込んでいた。

それでも、頭と心臓だけは必死になって庇い続け、命からがらで雪菜の前に立ち続けていた。

こうしている間にも、古城の身体は崩壊と再生を続けている。

雪菜と対峙するためとはいえ、古城が背負った負担はあまりにも大きい。

古城が雪菜に入れた攻撃は一つもない。

依然として、古城は劣勢を強いられていた。

「げほ、げほ。クソ、手が出せねえ」

口元を拭い、古城は、薄く笑う。

雪菜の容赦のなさには、もう笑うしかないのだ。

雪菜の動きが徐々に見えなくなってきた。反応速度もずいぶんと鈍っている。

雪菜が右の拳を握り締めて踏み込んでくる。顔面目掛けて突き出された拳を古城は腕をクロスして防いだ。銃撃されたような衝撃に、古城は上半身を逸らしてしまう。

「ぐ……ッ！」

ここで堪えれば、雪菜の追撃をそのまま受けることになるであろう。古城はそのまま後ろに下がろうとして、唖然とする。古城を殴りつけた雪菜の腕が、そのまま古城のパーカーの襟を鷲掴みにしたのである。

万力のような力で古城を引き寄せた雪菜は、突き上げるような膝蹴りを古城の腹部に叩き込み、前のめりになったところで力と技を結集した大外狩で古城を背中から地面に叩き落とした。

「うごぁ……！」

意識が白黒して、思考に空白ができる。

さらに雪菜は古城を吊り上げて、コンテナに向けて放り投げた。
ジェットコースターに乗っているほうがまだましというほどに上下左右に振り回された古城は、ついにコンテナに激突して崩れ落ちた。
出血量は尋常ではない。
がくりと頭を垂れる古城は、虫の息といった様子で浅くとも辛うじて呼吸できているのが奇跡的だとさえ言える状態である。現状で、右の肺は潰れているし、あばら骨は何本か粉砕骨折している。両腕の橈骨もへし折れているので、長袖の下は赤黒く腫れ上がっている。
雪菜の間断ない攻めによって、内蔵も多大な損傷を負った。感覚こそないが、足のほうもかなりの痛手を被っているだろう。これほどの状態にまで追い込まれながらも、古城は雪菜を傷付けるようなそぶりは一切見せなかった。起死回生の一手があるわけでもなく、ただ殴られ、蹴られを続けただけの愚かな道化である。しかし、道化に徹してでも、古城には通すべき意地があったし、雪菜を救い出すという当初の目的を喪失したわけでもない。
八割方死にながら、生きている部分が懸命に古城の身体を再生しようと動き出す。肉と血管と神経と骨が癒着して、感覚を取り戻してく。いつもよりも再生速度が遅いものの、命を繋ぐには十分である。惜しむらくは、それでも雪菜を止めるには至らないということだが、それは根性を振り絞ってどうにかする。

全身を返り血に染め上げた紅色の雪菜は、さながら鬼神のようであった。背後に月を背負って立つ姿は神々しくも思える。
雪菜が歩を進めると、血の足跡が残る。血溜まりを踏みつけたからか、あるいは古城の腹部を蹴り抜いたときのものか分からない。それくらいに、雪菜は頭から足先まで血で汚れているのである。
目の前の敵を排除する。
ただそれだけのために身体を動かす。疑問は一切持たない。疑問を持つようなら、当の昔に壊れている。
呼吸を確認、――――暁古城（てき）は、まだ生きている。

吸血鬼にしても、ずいぶんとしぶとい。
どうやら、彼を仕留めるには、特殊な魔術なり兵器なりが必要になるらしい。どちらも持たない雪菜では、動けなくするのが関の山であろう。
淡々とそれを分析して、雪菜は次の行動に映る。
少なくとも、〝八雷神法〟は古城に対して十分な効力を発揮している。ならば、その格闘術を駆使して、完全に動かなくなるまでその身体を破壊し尽くす。主の命令は叩き潰せであり、殺せないならば、それに近い状態にまで追い込まなければならない。
まずは立ち上がれないように両足を潰し、次に喋れないように喉を穿つ。両腕は再生がすでに始まっているので、再び砕く。心臓と頭も早々に破壊しておくべきだろう。刃物があれば、斬り刻むこともできたのだが、ないものねだりは無意味と弁える。
「げほ……」
古城は喉に溜まった血を吐き出した。
呼吸が安定する。肺は不完全ながらも再生を果たし、視力も取り戻せた。四肢の自由は、万全とはいえないが、雪菜がこちらを死に体と思い雑な攻撃をしてくれれば、その隙を突いて密着できるくらいには回復している。
そして、古城は顔を上げる。
雪菜はこちらを警戒しているのか、一息に止めを刺そうとはしていない。ゆっくりと、真綿で絞め殺すかのように歩み寄ってくる。
「はッ……、たく、無理しすぎだぜ……」
古城は頬肉を吊り上げて笑った。
雪菜の背後、商船の上に見知った影がふらつきながらも現れたのを見て取って、その企図を悟ったからである。
彼女は相当な無理を押して、危険を冒した。考え得る限り、最も確実に雪菜を取り戻せる方法を実践しようとしている。よって、古城はそれを実現するために、できる限り雪菜を引き付ける。
「う、おおおおあああああああッ」
死力を振り絞って古城は立ち上がった。

砕けた骨が軋み上がって、激痛を伝えてくる。痛みがあまりにも激しく、今度こそ気絶するかと思ったくらいである。
さすがに、この身体で立ち上がるのは雪菜にとっても想定外だったのか、歩みを止めて古城を見つめた。何か、隠し玉があるのではないかと警戒しているのであろう。
それは、好都合だ。
「来いよ、姫柊。最後まで、相手になってやる」
雪菜は、古城が戦う意思を見せたことで今度こそ動けなくしてやろうと距離を一息に詰める。
古城のほうには、ほとんど余裕らしい余裕はない。虚勢を張るので精一杯である。
「ッ！」
雪菜は後一歩で古城の頭を打ち砕けるところに踏み込んだところで、背後から飛来する何かに気付いて飛び退いた。
力なく地面に落ち、跳ねたそれは、純白の輝きを秘めた槍だった。
雪霞狼。
真祖をも葬るとされる最高の対魔武神具七式突撃降魔槍（シュネーバルツァー）である。
古城は、それを拾い上げると、そのまま雪菜に突撃した。
槍として扱う必要はない。雪霞狼は、あらゆる魔力を無効化する。雪菜に押し当てるだけで、効果を発揮するはずであった。
雪菜は、それを知っているが、古城の槍を扱うスキルは底辺であるから脅威ではないと判断した。魔力を無効化する点については、魔術を使わなければ問題ないという認識であり、自分の呪詛が解けるかどうかは考慮していない。呪詛について思案するという発想が、そもそも存在しないからである。
よって、雪菜は古城を迎撃する。
未来を読み取り、古城の胸を突く。
「いい加減、目ぇ醒ませ。この馬鹿野郎がッ!!」
古城は雪菜の拳を避けなかった。今更一発重い一撃を貰ったところで大差ない。そう割り切ったからだ。避けるつもりのない相手に、加減する必要もなく雪菜は古城を強かに殴りつけた。心臓が、一撃の

下に粉砕され、身体の内側がミンチになるのを感じながら、古城は薄れ行く意識を引き伸ばして、雪霞狼の柄を雪菜に押し当てたのであった。

□

支えるものを失った雪霞狼が地面に落ちた。甲高い金属音が埠頭に響いて、潮風に流れて消えていく。

雪菜は、膝をつき、糸の切れた人形のようになっている古城を抱きかかえて呆然としていた。

「先……輩……？」

古城は動かない。

最後の雪菜の拳が、ついに心臓を破壊したことで、古城の肉体は生命活動を停止していた。

何れにせよ、普通の人間ならば即死である。心臓を潰されれば、第四真祖といえども大幅な消耗は避けられず、意識を保つことも困難である。もともと受けていたダメージがあまりに大きかったために、このまま本当に死んでしまう可能性すらあった。

かつて、首を刎ねられた際にも復活できた古城だが、雪菜の〝八雷神法〟を幾度もその身に受けた状態で心臓を破壊されて、無事に再生できるかどうかはかなり怪しいところである。そもそも、剣巫の格闘戦術は、古城のような不死性の高い魔族を素手で制圧するために編み出された破魔の技なのだから。

「あ、ああ、ああああああああああああああッ」

雪菜は絶望に塗れた声を上げた。

春菜と同じく、洗脳を受けていたときのことを鮮明に覚えていた。古城の身体を徹底的に破壊しつくした感触が、両手に残って離れず、身体を濡らす血のすべてが古城が流したものだと思うと自分の存在を消し去りたくなるような衝動に駆られる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、先輩、……うあああッ」

古城を仰向けに寝かせた雪菜は、為す術なく古城に呼びかけ、謝罪

の言葉を口にするだけである。動転して、思考が真白に染まってしまった。
「雪菜ちゃん！」
そこに、春菜が駆けつけた。
見るからに体調が悪そうだ。顔面は蒼白で、立っているのもやっとというような状態で、商船のデッキから雪菜の下まで一直線に跳んできたのである。
足がもつれて転びそうになりながら雪菜の隣に辿り着いた春菜は、跪いてから、雪菜を落ち着かせるように、その頭を掻き抱いた。
「ごめんね、雪菜ちゃん。本当に……」
「ねえ、さん……！」
ギリ、と雪菜は歯を食いしばる。春菜に八つ当たりをしても仕方がない。そう、分かっていても誰かにぶちまけなければ落ち着かない。
だが、その時間すら惜しい。春菜は雪菜にどれだけ罵倒されようとも、受け容れる覚悟はしていたが、まずは今を乗り切らなければならないと、雪菜の耳元で囁く。
「早く、暁君に血を飲ませてあげないと」
「血、血？　……あ、そ、そうか！」
古城は吸血鬼である。血を飲めば失った魔力を取り戻し、肉体の修復を加速させることができる。そのことに思い至らなかったのは、それだけ雪菜が冷静さを失っていたということである。
「時間は、わたしと紗矢華で稼ぎます」
春菜は、そう言って雪菜を離して立ち上がる。
右手首の縛大蛇を起動。腕を振るって鞭のような一条の鎖を生成した。
雪菜はルドルフに挑みかかる紗矢華と春菜を信じ、古城に集中する。手首を雪霞狼で切り、滲み出る血を口に含む。鉄の匂いが口内に広がるのを感じながら、古城と唇を重ねた。できる限りの血を古城に分け与える。古城の体内で暴れる雪菜自身の霊力を抜いて、古城の魔力を増大させるには、それ相応の量の血液が必要だ。
雪菜は合計三度に亘って自らの血を古城に口移しした。

「が、ぐはッ、ごほッ」
四度目の口移しをしようとしたところで、古城の呼吸が再開した。古城の口から血の塊が飛び出し、肉体の再生が急速に行われていく。砕かれた心臓が鼓動を取り戻し、音を立てて壊れた四肢が修復していく。それは、まるで逆再生映像を見ているかのような光景であった。
そして、古城は目を開けた。
「先輩……ッ！」
雪菜は堪らず古城に抱きついた。
「ぐ、おぉぉッ」
古城は苦悶の声を上げる。復活した傍から絞め殺されるかと思った。
「ひ、姫柊、ギブ……」
古城は雪菜の肩をタップして解放を要求する。
雪菜は、慌てて古城から離れる。
「す、すみません……」
雪菜は癖なのかその場で正座する。
何か言いたそうにしながらも雪菜は言葉を紡がない。古城の様子を窺って、無言を貫いている。
「姫柊。大丈夫そうだな」
「はい。……本当に、ご迷惑をおかけしました」
雪菜は頭を下げる。その雪菜の頭に古城は手を置いて、優しく撫でた。
「アイツを倒す。姫柊は、休んでろ」
古城は、そう言って立ち上がった。もはや血まみれなのは見た目だけである。雪菜からの血液の供給によって、古城は絶好調の状態に戻っている。
「いいえ、先輩。わたしもご一緒します」
雪菜は首を振って、古城の提案を拒否する。雪霞狼を握る手に力を込め、古城の隣に並んだ。

□

「やってくれましたね……！」
雪菜が解放されたことで、ルドルフの思惑は九割方崩壊した。
危険を冒して剣巫を手に入れようとしたルドルフは、ここにきて利益の大半を古城たちに奪い返されたことになる。
紗矢華によって船員が昏倒させられた今、単独で出航するというのは現実的ではない。敵を倒し、船員を叩き起こして、沿岸警備隊（コーストガード）が駆けつけてくる前に逃亡しなければならない。
だが、まだ終わっていない。今は敵に剣巫を奪い返されたが、相手は四人とも限界まで身体を酷使している。倒せば獅子王機関の優秀な実力者を三人纏めて手に入れることができる上に、第四真祖を出し抜いたという箔も付く。
そう、ルドルフはまだ負けていない。
「おおおおッ」
咆哮し、地面を抉る。粉砕したアスファルトの礫が紗矢華に襲い掛かる。
「煌華麟！」
紗矢華は前方の空間を薙いで次元を切断する。アスファルトの散弾が、見えない空間の亀裂に吸い込まれて消失する。
煌華麟の防御は絶対的だが一瞬の楯でしかない。それを知っているルドルフは、瞬時に紗矢華との間合いを零にする。
「く……！」
呪的身体強化でも、いよいよ油断ならぬと全力を出したルドルフの行動についていけない。無理な強化と行動で身体は悲鳴を上げている。傍目からしても紗矢華の運動能力は大幅に低下しているのだ。
撫でられるだけでも、意識を飛ばされる。そうと分かっていながら、紗矢華はルドルフが振り上げた拳を目で追うことしかできなかった。
「蛇動／固定！」
紗矢華を打ちのめそうとしたルドルフの腕に、蛇のように闇色の鎖が絡みついた。

ルドルフの動きが止まり、紗矢華がその隙に距離を取る。
「春菜君、……まさか、あの槍を持ち出してくるとは思いませんでしたよ」
「ずいぶんと、お世話になりましたね。ルドルフ。せっかくいただいたご縁ですけど、ここで切らせていただきます」
春菜は縛大蛇を操りながら、ルドルフに決別を宣告する。
「春菜さん。……雪菜は」
「あの娘なら、大丈夫。今は、目の前に集中しましょう」
「はい」
紗矢華は荒い息を整え、煌華麟を弓の形態にする。春菜が防御をしてくれるのだから、自分は本領を発揮できる弓でルドルフと戦うのがいいと判断したからだ。
ルドルフは、縛大蛇の鎖を自由の利くもう一方の手で掴む。
「気丈なのはいいことです。が、分かっていますよ。この鎖、まったく本来の力を発揮できていませんね」
神獣は吸血鬼の眷獣に匹敵する怪物だが、春菜の鎖はその眷獣すらも虜とする。しかし、それも全力を尽くせるときに限った話で、今の春菜ではそこまでの出力は期待できない。
「忘れたとは言わないですよね。あなたは、私に挑んで負けたんですよ！」
ルドルフは、縛大蛇の鎖を強引に引き千切った。
砕けた鎖が魔力を散らして、大気に解けた。
「ええ、確かにわたしは負けました」
春菜は特に反論もすることなく認める。ルドルフと戦い、その圧倒的な力に屈服したときを思い返すと恐怖すらも感じてしまう。
あのときに比べて、春菜はあまりに消耗している。正面から挑んで勝利することなど、万に一つもありえない。
「ですが、どういうことなのでしょうね。負ける気はしないんですよ」
春菜は微笑み、縛大蛇にあらん限りの霊力を注ぎ込む。起動した縛大蛇が大気中の魔力を片っ端から固定化し、長大な鎖を生成、そしてルドルフの周囲に鎖の渦を形作った。

「縛鎖／結界！」
魔力固定化能力を完全解放し、鎖で囲んだ空間を凍結する。捕縛に特化した縛大蛇の奥の手であった。
闇色の渦の中で、神獣が苦悶の声を上げる。如何に神獣とはいえ、その戦闘能力は魔力によって維持されている。縛大蛇の魔力固定化空間は、神獣の体内にすら作用し、その活動を著しく低下させる。
「う、ごほッ」
膝が笑う。咽ると同時に口から血が滴り落ちた。命が鎖に吸い上げられているかのように、消耗が加速していく。
「春菜さん!?」
「大丈夫、大丈夫だから……」
もう少し、古城が復活する時間を稼ぐ。息をするのも億劫になるほどになりながら、春菜は死力を尽くして結界を維持する。
「だから、無駄と言ったでしょう！」
しかし、死に体の春菜をあざ笑うかのように、ルドルフが咆哮し、その巨腕が結界の壁を突き崩す。
「おおおおおおおおおおッ！」
膨張した筋肉が鎖の渦を無理矢理止める。固定化された空間に罅が入り、ルドルフの魔力を抑えておけなくなる。
「負けるんですよ、あなたはッ。そして、今度こそ私に永遠の忠誠を誓うのです！　呪詛などなくとも自らの意思で従いたくなるほどに、徹底的に調教しつくしてあげますよ！」
縛大蛇がついに崩れる。鎖が千切れ飛び、押さえていた膨大な魔力が噴き出して周囲を蹂躙する。
「く、……紗矢華！」
「はい！」
そこを狙って紗矢華が呪矢を放った。
吹き荒れる魔力の風を貫いて、紗矢華の矢はルドルフの胸を抉る。
――その直前、ルドルフは信じがたい挙動で真横に跳んで矢をかわす。紗矢華の呪矢はルドルフの左の二の腕を傷付けるに留まった。
「は、今更、当たるわけがないでしょう！」

ルドルフは、怒鳴る。紗矢華の何番煎じとも分からない単調な攻撃を嘲り笑い、地を蹴る。技はいらない。圧倒的な身体能力と体重による突進はそれだけで自分が乗り入れた商船を沈没させる力がある。目の前の二人なら即死はしないだろう。生きていればどうにでも使える。そうして、紗矢華の呪矢から意識を逸らしたのが、まずかった。

「勝った気にならないでよ！」

紗矢華は叫ぶと煌華麟から最後の矢を放った。

ルドルフには正面から射っても当たらない。しかし、紗矢華は愚直にも呪矢をルドルフの真正面に放ったのだ。ルドルフは、その幼稚な攻撃手段に呆れながら、回避しようとして矢が消失したことに気付いた。

そのときには、すでに紗矢華の矢はルドルフの背に突き立っていた。

激しい衝撃が内蔵を揺らす。筋肉だけでは衝撃を受け止め切れなかった。

「な、あァ……!!」

煌華麟の能力は空間切断。呪矢を放つ砲台であると同時に空間を斬り裂く魔術を付与された煌華麟は、その二つの能力を駆使することで数キロメートル先にまで、呪矢を瞬間移動させることができる。今回はそれを応用して、ルドルフの背後の空間に矢を飛ばしたのである。

「ぬあああああああッ」

呪詛を注入する矢は、さらに大気中の魔力を吸い上げて大爆発を起こす。

神獣とはいえ、この一撃はさすがに堪えたであろう。爆炎の中から現れたルドルフは、肩で息をして這い出てくるような格好であった。

紗矢華の呪矢の直撃を受けて、まだ動けるところが神獣の面目躍如といったところか。

「やって、……くれましたね。煌坂紗矢華君……！」

ギラギラとした獰猛な視線で紗矢華を射抜く。紗矢華にはもう矢がない。後は剣で戦うことしかできない。そして、援軍として駆けつ

けた春菜も先の結界で力尽きたのか膝をついている。だが、それでも腹立たしいことに二人は敗北を受け容れてはいない。むしろ、勝利を確信したように落ち着いた表情を浮かべている。
「やってくれたのは、お前のほうだろ、ルドルフ」
彼女たちが敗北を認めないのは、進み出た第四真祖の存在によるところが大きいのだろう。
雪菜の血を吸った古城は、魔力を充溢させている。人質として使える者ももういない。古城は、今全力で眷獣を解き放てる。
「今までてめえが仕出かしたことの落とし前、ここで付けさせてもらうぜッ！　ここから先は、俺の戦争（ケンカ）だ!!」
古城から信じ難い魔力の奔流が噴き出して、荒れ狂った。その魔力量はルドルフを遥かに上回っている。
〝馬鹿な……ッ〟
ルドルフは目を見開いた。
神聖なる神獣の力を持つルドルフを上回る力など、存在してはならないのだ。しかし、目の前の少年はルドルフが全力を振り絞っても届かないほどの力を放出している。
そのようなことはあってはならない。認めてはいけないのだ。
「図に乗らないでください、第四真祖ッ!!」
ルドルフは身体を膨らませ、腹中に蓄えた魔力を口から吐き出した。暴風は灼熱の炎の津波となって古城たちに襲い掛かる。その熱量はアスファルトを一瞬で気化させ、その下の構造材すらも蒸発させるほどのものである。当然、直撃すれば、四人とも跡形もなく消え去るであろう。
その死の猛威に立ち向かうのは、最も小柄な少女であった。
純白の輝きが、ルドルフの炎と熱を消滅させる。
「いいえ、先輩。わたしたちの戦争（ケンカ）です！」
轟、と振るわれた雪霞狼は、神格振動派を振り撒いて完全に炎の津波を消し去ってしまった。
雪霞狼を手にした雪菜に魔術的な攻撃は一切効果がない。ルドルフのブレスは、古城たちに何一つダメージを与えることがなかった。

「く、おおおおおおおッ」
ルドルフに残されたのは、その身体能力を駆使した突撃のみ。
ルドルフの突進に先んじて、古城が眷獣の枷を解き放つ。
「疾く在れ（来やがれ）、獅子の黄金（レグルス・アウルム）!!」
召喚されたのは電光の煌きを持つ獅子の眷獣であった。
神獣化したルドルフをして見上げざるを得ないほどの巨体を持つ獅子が、埠頭を黄金色に染め上げる。
爆雷の如き轟音を発して、ルドルフと獅子の黄金（レグルス・アウルム）は衝突した。
如何にルドルフが強靭な肉体を持つ規格外の神獣とはいえ、第四真祖の眷獣と正面から戦えるはずもない。ルドルフは、一瞬も抗することができずに、炸裂する魔力に飲まれていった。

エピローグ

大晦日の絃神島を襲ったシーサーペントの大群は大々的なニュースとなって新年のお茶の間を賑わせた。

負傷者こそ出たものの、死者は奇跡的に皆無で、第三埠頭が崩壊したのもシーサーペントが襲撃したためであるとされた。

また、逮捕されたルドルフは、監獄結界に収監されたという。

第四真祖の眷獣に敗れたとはいえ、普通ならば跡形もなく消え去っているところで生きていたわけなので、神獣の凄まじい生命力の一端を見せ付けることとなった。

新年を古城たちは病院で過ごすこととなった。

古城は何の問題もないのだが、紗矢華、雪菜、春菜の三人に関しては怪我をしているということに加えて、精密検査の必要があったために、しばらくは入院しなければならないという。

「三人揃って同じ部屋なのかよ」

昼過ぎに、古城は雪菜たちを見舞った。

三人は知り合いということもあって同じ病室に入院していた。先日のシーサーペントの襲撃によって、特区警備隊（アイランドガード）や沿岸警備隊（コーストガード）からそれなりの負傷者が出ていたために、病院も病室の空きがなかったということもある。

窓辺のベッドは姫柊姉妹が使い、雪菜の隣のベッドを紗矢華が使っていた。

「先輩、明けましておめでとうございます」

患者服に身を包んだ雪菜が新年の挨拶をすると、紗矢華と春菜がそれに続いた。

「明けましておめでとう。って、そうか。今日から新年か」

一連の騒動によって、すっかり忘却していたが、この日は一月一日。年が改まり、新たな一年が始まったのである。

「て、手ぶら!?　ちょっと、暁古城、お見舞いに来てくれるのは嬉しいけど、何か持ってきなさいよ」

「悪かったな手ぶらで。仕方ねえだろ、店閉まってんだから！」

古城も、せっかく見舞いに行くのだからとフルーツでも仕入れようとしたのだ。ところが、スーパーは軒並み閉まっていた。新年の弊害である。
「結局、カウントダウンの花火は延期だってな」
「延期って、いつに？　もう年明けたのに」
紗矢華の言葉に古城は「だよなあ」と空返事をする。
シーサーペントの騒動によって花火の打ち上げはできなかった。しかし、用意した花火を無駄にするのももったいないので、どこかでイベントは開きたいというのが、人工島管理公社の意向であり、概ねその方向で議論を進めているらしい。一応は、立春の日を目処にしているとのことだが、果たしてどうなるか。
「三人とも、身体のほうは大丈夫なのか？」
古城はイスに腰掛けてから尋ねた。
「わたしは、明日には退院できるわ。もともと、怪我自体は大したことないし、呪的身体強化（フィジカルエンチャント）で無理したくらいだから」
と、紗矢華は答え、
「わたしは二、三日かかるみたいです。呪詛は消えましたけど、薬を抜くのにそれくらいかかるらしくて」
雪菜は頬を掻きながら、そう答えた。
雪菜の洗脳の導入に使われた薬は依存性の低い合成麻薬のようなものだという。雪菜自身が薬に対してそこそこの耐性があったこともあり、身体から影響が抜けるのは早いというのだ。
「獅子王機関での対毒訓練が奏功しました」
「そんなことまでしてんのか、獅子王機関は」
特務機関で、なかなか表沙汰にできないこともやっている獅子王機関だが、一歩間違えば十分に犯罪組織の仲間入りである。秘密結社という言葉がこれほど似合う組織もないだろう。
「姉さんは……」
と、春菜に雪菜は視線を向ける。
「わたしは少し長引きそうですね。退院はできると思いますけど、通院はしないといけないみたいです」

「そうか。大変だな」
古城には春菜の苦しみは分からない。しかし、春菜は何事もないような顔をして、ルドルフから数多の薬物を投与されてきたと聞いている。その効果が抜けるまでは、気を緩めることはできないのだとか。
「ということは、春菜はしばらくここにいるのか？」
古城が尋ねると、春菜は頷いた。
「〝魔族特区〟の技術を使ったほうが、早く治療が済むんだそうです。それに、わたしは重要参考人ですから、取調べなども受けないといけませんし」
〝魔族特区〟である絃神島は、魔族の研究を通して本土を上回る科学技術を手に入れた。春菜を支配していた薬物や呪詛は、魔族由来のものなので、絃神島に蓄積されたデータが必要不可欠だったのである。
「重要参考人って、そんな」
雪菜が不快そうに顔を顰めた。
まるで犯罪者のような扱いではないか。実の姉が、そのような汚名を着せられているのは、雪菜でなくとも不愉快であろう。
「わたしは、ルドルフの下で犯罪にも手を染めましたし、そのときのことを覚えているのです。洗脳を受けていたことは、南宮攻魔官が証明してくださいましたが、それでも罪が消えることはありません。収監されることも覚悟しています」
「収監って、春菜は操られていただけだろ!?」
「そうですよ。春菜さんは、好きでやったわけじゃないんですから！」
「そう言っていただけると、嬉しいです。まあ、コレに関してはわたしではどうすることもできませんので、運を天に任せるしかありませんね」
と、春菜は淡く微笑んだ。
ルドルフの犯した犯罪についても春菜は証言することができる。そういう意味でも、春菜の身柄は重要であろう。
一頻り話をした後、長居はよくないだろうと、古城は病室を辞したのであった。

□

大晦日の戦いから一週間と少しが経過した。
この日の絃神島は、いつも通りの快晴で、灼熱の太陽が頭上で燦燦と降り注いでいた。休み中は、何かと理由をつけて家の中に篭っていた古城であったが、さすがにこの日は朝から外出しなければならなかった。
短い冬休みが終わり、新学期に突入したからである。
ただでさえ出席日数が危ないのに、新学期早々に遅刻などということになったら那月にどのような小言を言われるか。もしかしたら、それに付けこんで面倒ごとを押し付けてくるかもしれない。
それが恐ろしいのでサボるわけにも行かず、騒がしい妹と病み上がりの後輩と共に学校に向かったのである。
あの後、春菜は那月の取調べを受け、ルドルフの犯罪の証拠を次々と証言していった。春菜の証言を基に捜査が行われた結果、本土や外国の本拠地も合わせて〝黒懺会〟の主要な収入源が絶たれていき、活動そのものを縮小しなければならない状態にまで追い込まれたという。ルドルフ逮捕から、一週間程度のあまりにも早い展開に、世論は大きくどよめいた。
とはいえ、劇的な展開となったのは、〝黒懺会〟との戦いであって、それは最早古城たちの手を離れた問題である。よって、一視聴者として古城は報道を眺めていたし、春菜についての続報が入ってくることもなかった。紗矢華は退院した直後に本土に帰ってしまい、雪菜も退院の後は、春菜と会うこともできないでいるという。
春菜がどうなってしまったのか、気にしながらも、古城は一月の第二月曜日を迎えていた。
そして、昼休みを迎え、浅葱が古城の机までやってきた。
「古城、あんた冬休みの宿題ちゃんとやってたのね」
「当たり前だろ。さすがに、出さねえと、何を言われるか分かったもんじゃねえしな」

「天下の第四真祖が留年なんて、恥ずかしくて仕方ないわよね」
声を潜めて、浅葱がからかってくる。
古城は頬杖を突いて、気だるげに窓の外に視線を向けた。
「最近は俺も勉強してんだよ」
「へえ、ちょっと意外」
「なんでだよ」
勉強するだけで驚かれるのか。
古城には永遠に近い時間があるが、だからといって生活していけるだけの収入源をずっと確保していけるわけでもない。他の真祖や高位の吸血鬼ならば領地からの収入があるが、古城の立場はただの高校生で、これから先も莫大な収入を期待できるようなことにはならないだろう。そのため、後々のことを考えて、真面目に勉強して手に職をつけなければならないと現実的な考え方をするようになったのである。
「それで、古城。姫柊さんたち、大丈夫なのよね？」
と、周囲を気にしながら浅葱が尋ねてきた。
浅葱も、一連の事件の目撃者であった。古城たちの事情も知っているので、雪菜や春菜のことを気にかけていた。
「春菜は連絡がつかないから分からないけど、多分大丈夫だろ。取調べは那月ちゃんがやったっていうし、収監されたって話も聞かないからな」
「それ、大丈夫なの？」
「もしも収監されてたら、何かしら情報が入るだろ。姫柊の姉貴なんだからな」
「それもそうか。……姫柊さん、しばらく大変かもね」
「ああ」
春菜がどうしているのか、一番知りたがっているのは雪菜である。気丈に振舞ってはいるが、時折そわそわとして落ち着きがない。
そこに、一人の女子生徒がやってきた。
「あの、暁君。お客さんだよ」
おずおずと言ってきたのは、古城と話し慣れていないということと

浅葱に憚ってのことだろう。
古城は客と言われて、扉に視線を向けると、そこに立っていたのは、何と高等部の制服を着た春菜だった。
「な、……春菜!?」
古城は思わず声を上げてしまう。それが人目を引き、古城を訪ねてきたのが雪菜とそっくりの少女だったので、さらに教室内がざわついた。
古城は慌てて春菜に駆け寄った。いろいろと聞きたいことが山積している。
「お久しぶりです、暁君。一週間ぶりくらいですね」
にこやかな春菜に古城は渋い顔をして声を潜める。
「なんでここにいるんだ?」
「今日から二年B組に編入することになったんです。それで、暁君にご挨拶をと思いまして」
「ご挨拶って……いや、編入?」
と、そこで、古城はクラスの内外から好奇の視線を集めていることに気付いた。とりわけ男子からの視線は、呪詛すら帯びているようで、「また、暁かよ」「姫柊さんと関係が?」「めっちゃ可愛いじゃん」「まじひくわー」などなど、様々なヒソヒソ話が聞こえてくる。古城はこの場では満足に話もできないと、春菜を連れて人気のない場所まで行くことにした。

「くそ、教室に戻りたくねえ……」
屋上前の踊場で、古城は頭を抱えた。
女性問題で古城はかなりの有名人だ。非常識な美しさで孤立しかけたこともあるという浅葱に想われていながら、浮世離れした可愛らしさの雪菜に付きまとわれているというだけで、学園の男子の嫉妬を一身に浴びている。さらにそこに天使とも呼称される夏音が加わって、古城は男子から日々呪詛を受けるようになってしまったのである。さらに、雪菜の姉が加入したとなれば、またしばらくネタにされる。

「すみません、タイミングが悪かったようですね」
「いや。別に春菜がどうということじゃない」
古城は改めて春菜と向き合う。
彩海学園高等部の制服は、春菜によく似合っている。この学園は決して格式のある学校ではないのだが、物腰の柔らかい春菜がその制服に身を包むと、不思議なことにお嬢様学校の制服なのではないかとすら思えるようになってしまう。
「で、どういうことだよ。編入って」
「はい、それなのですが、わたしも驚いたのです。今朝学校に通えと命を受けまして」
「今朝？」
「はい。それまでは、事情聴取や検査などで缶詰になっていまして、外部との連絡も禁じられていたので、雪菜ちゃんにも伝えられなかったんです」
「なるほど、それで姫柊も何も言ってなかったのか」
重要参考人の春菜の証言は、非常に重要なもので、外部に漏れる要素は極力排除したかったという政治的な思惑があったのであろう。
「それで、もう大丈夫なのか？」
「大丈夫、とは？」
「身体のほうとか、後は獅子王機関のこととかだよ」
学校に通えという命令が来るくらいだから、危惧していたような罪人という扱いにはならないのであろう。しかし、どのような展開があったのか、それが気になる。
「とりあえず、目一杯怒られました」
「やっぱり、そうなのか」
「はい。それはもう。二ヶ月間の免停処分です」
攻魔師資格が一時的に凍結されたというのだ。しかし、それは、当初の予想に比べればかなり軽い処罰である。
「どうやら、獅子王機関と人工島管理公社のほうで政治的な駆け引きがあったようです」
「駆け引き？」

「はい。獅子王機関と人工島管理公社は利害が一致しているだけの他人ですから、常に仲良くとはいきません。今回はわたしの処遇を巡って、両者の利害が一致したおかげで自由の身になれたのです。獅子王機関は剣巫が収監されるのを快く思わず、公社のほうは獅子王機関に貸しを作っておきたい、そんなところですね」
「そうか。ということは、もうそっちの問題は解決したわけだな？収監なんてことにはならないんだな？」
「そのようです」
そう聞いて、古城は安堵の息を漏らした。
「ずっと気になってたからな。いいことを聞いた。姫柊も喜ぶだろ」
春菜の処遇は、古城たちにとっては最大の関心事であった。ルドルフのことなど、もはやどうでもいいから春菜がどうなったのかを知りたかったのだ。古城がらしくもなく、新聞やニュースに気を払っていたのもここに尽きる。
「そう、ですか……」
春菜は、意外そうな、それでいてほっとしたような表情をする。
「あの、暁君」
それから、意を決したように古城に話しかけた。
「本当に、申し訳ありませんでした」
春菜は、深々と頭を下げる。
「わたしが不甲斐ないせいで、多大なご迷惑をおかけしました。暁君がいなければ、わたしは取り返しの付かないことをしていました。……本当に、なんとお礼を申し上げたらいいか」
雪菜や紗矢華には、何度も頭を下げた。
とりわけ雪菜には、姉として有るまじきことをしてしまった。許してはくれたが、それでも心苦しいものがある。一歩間違えば、春菜は薬と呪詛を利用して雪菜を犯罪者の仲間にしていたのだ。すべてが終わった後で思い返しても、恐怖してしまう。
古城と紗矢華が命懸けで助けてくれなければ、今でもルドルフの下で罪を犯していたであろう。それを思えば。古城には返しきれない借りがある。

「このご恩は忘れません。必ず、お返しします」
「いや、恩て。そんなのはいいって」
「いえ、しかし……」
「俺は助けたいから助けに行っただけだ。それで、恩とかそんなのを言われても困る」
　本当に困ったような表情で、古城は言った。
「そんな。あなたは死にかけたのですよ。それもわたしが原因です。なら、あなたはわたしに償いを要求する権利があります」
「だから、いらねえって。それだったら姫柊と一緒にいる時間作ってあげてくれ。あれで、相当春菜のことを気にかけてたからな」
「――――――そうですか」
　春菜は得心がいったという風に落ち着いた笑みを浮かべた。
「暁君はお人好しさんですね」
　今までに会ったことのある人の中でも五本指に入るくらいのお人よしだ。善人で、他人のために自らの命を賭すことのできる、危うい吸血鬼。まるで、自分と妹を獅子王機関に連れてきてくれた、あの剣巫のようではないか。
「それでも、何もしないというのはわたしの矜持に反します。ですから、今は保留とします。暁君が危なくなったら、今度はわたしがお助けしますから。そう、例えば――――」
　春菜は首をかしげて髪を掻き分け、首筋を見せる。
「血を吸いたくなったときとか、お声をかけてくだされば、いつでも献血しますよ」
　艶めかしい白い肌がほんのりと桜色に染まっている。春菜の声が妖艶さを感じさせて、古城は思わずドキリとしてしまう。
「う……」
　古城は少し春菜から距離を取ろうとして、ツンとした痛みを鼻の奥に感じた。
「あら、もしかして鼻血ですか？　そういえば、鼻血が出やすい体質でしたね。雪菜ちゃんから聞きましたよ」
　そう言って、春菜は古城にポケットティッシュを差し出した。女子

の嗜みと言わんばかりに、自然にポケットから取り出したのである。
「す、すまん」
「いえいえ、わたし如きに欲情していただけたのなら、それは嬉しい限りです」
「欲情とか言うな！　別にそんなんじゃないわ！」
古城は鼻を押さえながら言う。当たらずとも遠からずだったのが、悔しかった。
「いた、姉さん！」
そんな二人の下に、階下から雪菜が声を荒げて駆け上ってきた。
「姫柊、なんでここに？」
ここは高等部の校舎である。雪菜の通う中等部とは隣接してはいるが、交流があるわけではない。高等部の校舎に中等部の雪菜がいるというのは、あまりいいことではないのである。
「先輩の近くに、姉さんの魔力を感知したので急いできたんです」
「お前、また俺に何か付けてたのか」
古城は慌てて自分の身体を確認するが、雪菜が古城に付けている魔術を見破ることはできなかった。もともと、魔術に縁のない古城では、見習いとはいえ専門の勉強を重ねてきた雪菜の監視から逃れることはできない。
「姉さん、どうして何も言ってくれなかったの！」
雪菜は春菜から何の連絡もなかったことを怒っているらしい。
ずっと心配していたのだから、当然であろう。
「落ち着いて雪菜ちゃん。正直、わたしも今朝知ったばかりで連絡できなかったんですよ」
「本当に？」
「本当ですよ。そうでなければ、真っ先に雪菜ちゃんに連絡しています」
眉根を寄せて、不信がる雪菜はしぶしぶ引き下がる。
それから、古城に視線を向ける。
「先輩、鼻血ですか？」
「え、ああ。もう止まった」

「ふぅん、そう、ですか……」
雪菜は古城から春菜に視線を移し、それから再び古城を見た。むむむ、と視線が険しくなる。
「ひ、姫柊。もしも、何かあらぬ誤解をしているようなら、それは違うからな」
「違う？　違うとは何が違うのですか、先輩」
「いや、だからな……」
古城は、何を言ってもどつぼに嵌るような気がして上手い言葉が出て来ない。実の姉と人目を憚ってひそひそ話をしている男子生徒が鼻血を出している。なるほど、誤解してくれと言っているようなシチュエーションである。
「雪菜ちゃん、そう暁君を睨まないの。大した話をしたわけじゃないんですから」
「そうなの？」
「はい。今回の件での謝罪とお礼をしただけです。お返しに、吸血たくなったらいつでも呼んでくださいねって、そう言っただけですから」
「お、おい、春菜……ッ」
古城はそのいかにもな台詞回しに冷や汗をかく。
雪菜は固まった後で、絶対零度もかくやという視線で古城を射抜いた。
「したくなったら？　へえ、……なんのことですか？　ねえ、先輩、姉さんに何をするつもりだったんです？」
急激に低下する雪菜の声のトーン。真夏日のはずなのに、急激に寒くなったような気がした。
ゆらりと身体を揺らす雪菜に古城は後ずさった。その背後で、春菜が面白そうに微笑んでいるのを見て、古城は頬を引き攣らせるのであった。